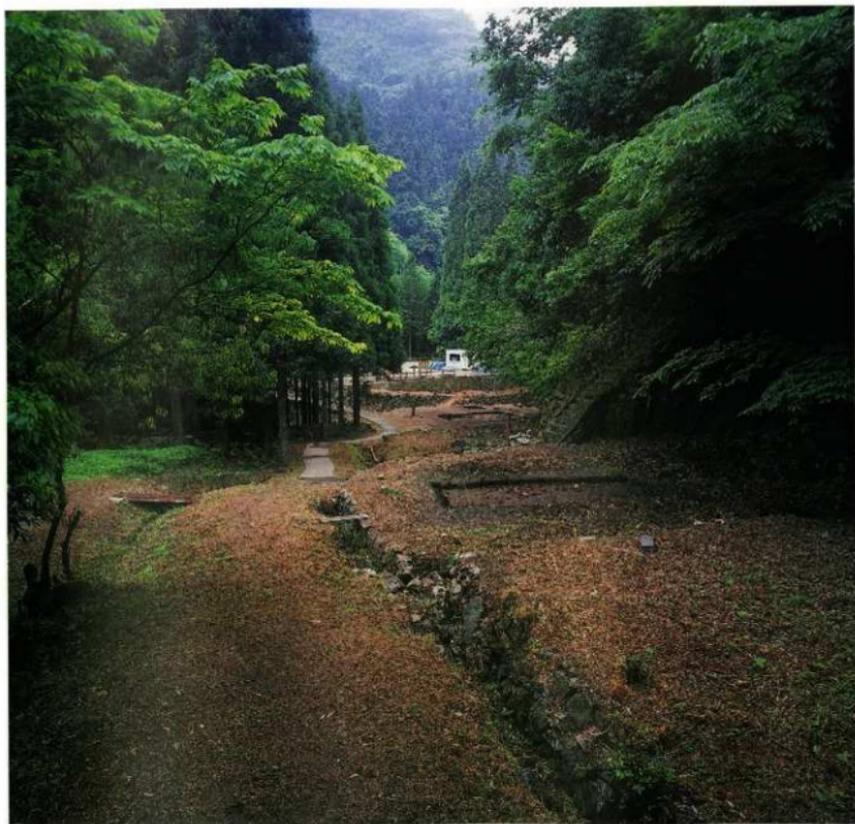


# 田儀櫻井家たたら製鉄遺跡 発掘調査報告書

—平成16～18年度の調査—



出雲市教育委員会

田儀櫻井家たたら製鉄遺跡発掘調査報告書 正誤表

頁	行	誤	正
巻頭図版2	上	北西から	南西から
巻頭図版2	下	東から	西から
巻頭図版5	下	北東から	南東から
例書8	32	第5図	第4図の地形測量図
例書8	32	第11、18図	第11図
例書8	33	第20、33図	第19、20、33図
23	12	幅約80m	幅約80cm
39	表6	本宅北側	平坦面北側
39	表6	第1遺構面	遺構面
44	36	図版12-2	図版13-2
52	第24図中段	1	5
52	第10表 押図番号第24図-1	本床北側6層	第22図参照
52	第10表 押図番号第24図-1	17世紀中～18世紀前半	1650～1680年
52	第10表 押図番号第24図-1	備考の空欄	備考に書き添
57	24	南側	北側
66	17	第25図	第27図
67	25	研究	ご教授
68	33	14.3m	13.65m
68	12	長さ5.5m	長さ6.14m
69	12	上部1.14m	上部1.04m
69	12	下部0.92m	下部0.88m
69	17	押立柱	押立柱(P1)
69	34	第34図	第33図・第34図石垣15
78	2	石列2	石列1

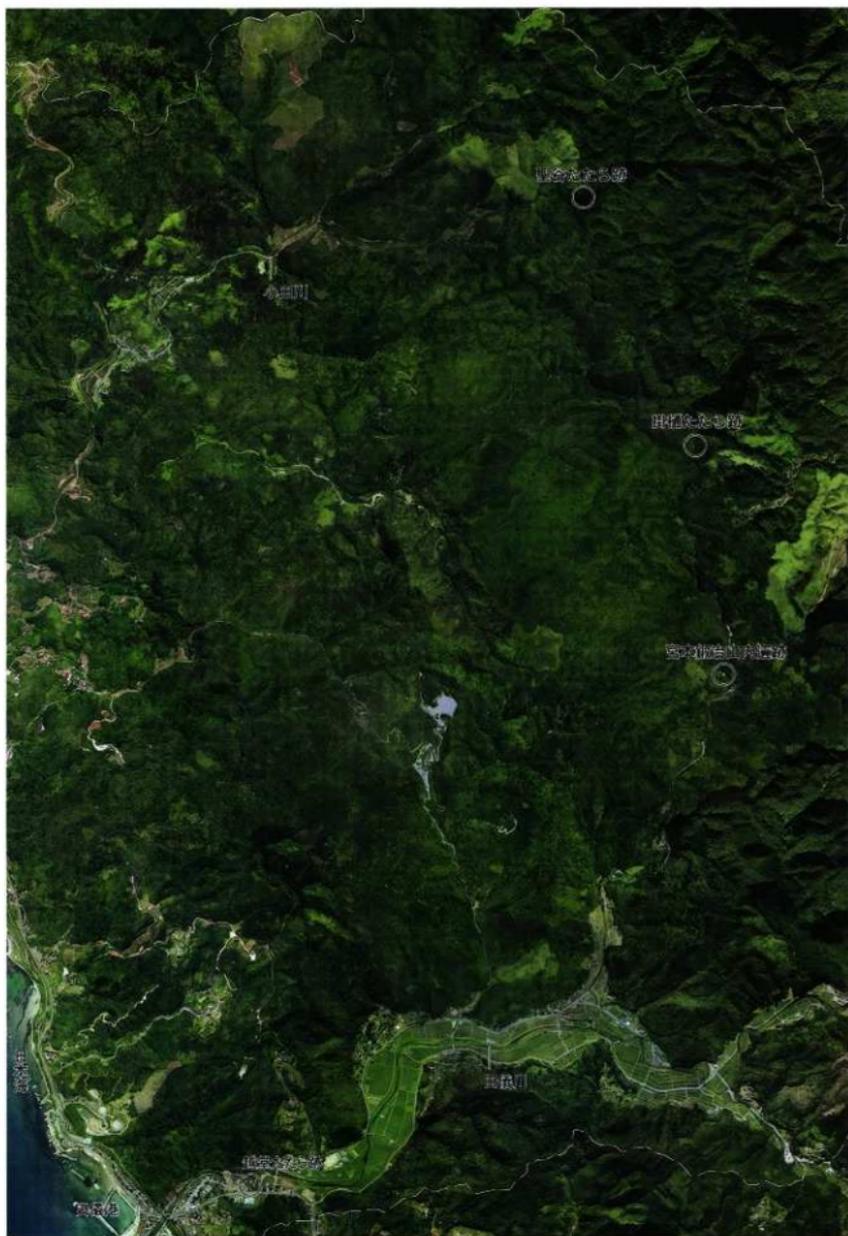
頁	行	誤	正
81	第18表 押図番号第40図-2	1面直上	遺構面直上
81	第18表 押図番号第40図-3	1面直上	表土山側
81	第18表 押図番号第40図-3	9.8	10.2
81	第18表 押図番号第40図-4	表土山側	遺構面直上
81	第18表 押図番号第40図-4	10.2	9.8
81	第18表 図版47-1	1面掘り下げ	遺構面掘り下げ
81	第18表 図版47-3を追加		下表のとおり
130	31	復元長約14.3m	復元長約13.65m
130	32	長さ5.5m	長さ6.14m
130	32	巾1.14m	巾1.04m
132	第34表 聖谷たたら 本床 幅	上面114cm	上面104cm
132	第34表 聖谷たたら 本床 幅	下面92cm	下面88cm
132	第34表 聖谷たたら 本床 長さ	5.5m	6.14m
132	第34表 聖谷たたら 圓形 長軸	14.3m	13.65m
図版38	中段 上	左から14-19	左から47-52
図版38	中段 下	左から20-24	左から53-57
図版38	下段 上	左から25-28	左から58-61
図版38	下段 下	左から29-32	左から62-65
報告書抄録	聖谷たたら跡 所在地	小田聖谷	奥田道聖谷

押図番号	図版	出土地点	種別	器種	法量	産地	時期	特徴
—	47-3	表探	磁器	碗	—	肥前系	18世紀	陶胎染付

# 田儀櫻井家たたら製鉄遺跡 発掘調査報告書

—平成16～18年度の調査—

出雲市教育委員会



出雲市多伎町宮本鍛冶山内遺跡周辺遠景（航空写真）（上が東北東）



全景（北西から）



3号炉（東から）



背面の石垣 (西から)



全景 (東から)

巻頭図版 4 掛樋たたら跡



石垣 (南東から)



本床 (上が西)



越堂たたら跡と口田磯港（南から）



調査区全景（北東から）



製鉄遺構（東から）



遺跡に残る石竈（南東から）



移設された地蔵

## 序

田儀櫻井家は江戸時代以来約250年の長きにわたり、多伎町奥田儀宮本（宮本鍛冶山内遺跡）を中心として、奥出雲の三大鉄師に次ぐ家格を得て製鉄業を営み、地域経済や人々の暮らしに大きな影響を与えました。その歩みを後世に伝えるため、平成5年には、地元有志による「宮本史跡保存会」が結成されました。その熱意を受け、平成15年11月より多伎町教育委員会が総合調査を開始し、平成17年3月の合併以降は、出雲市教育委員会が継続的に調査を実施しております。また、平成18年1月には、宮本鍛冶山内遺跡と朝日たたら跡が「田儀櫻井家たたら製鉄遺跡」として国指定史跡となりました。今後も、関連遺跡の調査、史跡の整備をすすめ、出雲地方におけるたたら製鉄の歴史を皆様にわかりやすく活用していただけるよう、努力してまいります。

最後になりましたが、ご指導ご協力いただきました文化庁、島根県教育庁文化財課をはじめ関係者の皆様に対し心より謝意を表するとともに、遺跡の保護活動に尽力されました「宮本史跡保存会」の皆様に対し、心より敬意を表します。

平成20年（2008）3月

出雲市教育委員会  
教育長 黒目 俊策

## 例 言

1. 本書は、平成16年（2004）12月から平成19年（2007）3月まで4ヵ年にわたり出雲市教育委員会（平成16年度は旧多伎町教育委員会）を調査主体として実施された田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の調査のうち、平成16～18年度の調査成果をまとめた報告書である。

2. 調査組織は次の通りである。（職名等は当該年度のものである）

○平成16年度（発掘調査：国庫補助内容確認調査）

事 務 局 烏屋原敏夫（多伎町教育委員会教育長）、三原順子（同教育課長）、山本春美（同社会教育指導員）、帯刀桂子（同社会教育指導員）

調 査 員 田中義昭（島根県文化財審議会委員）

調 査 補 助 員 伊藤悟郎（多伎町教育委員会臨時職員）

調査指導機関 文化庁、島根県教育庁文化財課、島根県埋蔵文化財調査センター、島根県古代文化センター、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡調査委員会

○平成17年度（発掘調査：国庫補助内容確認調査）

事 務 局 神門 勉（出雲市文化観光部文化財課長）、川上 稔（同主査）、野坂俊之（同文化財企画係長）、杉原浩紀（同副主任）

調 査 員 石原 聡（同文化財課埋蔵文化財係副主任）、阿部智子（同嘱託員）

調 査 補 助 員 伊藤悟郎（同文化財課臨時職員）

調査指導機関 文化庁、島根県教育庁文化財課、島根県埋蔵文化財調査センター、島根県古代文化センター、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備調査委員会

○平成18年度（発掘調査：国庫補助内容確認調査）

事 務 局 石飛幸治（出雲市文化観光部文化財課長）、花谷 浩（同学芸調整官）、川上 稔（同主査兼埋蔵文化財係長）、野坂俊之（同文化財企画係長）、杉原浩紀（同主事）

調 査 員 石原 聡（同埋蔵文化財係主事）、阿部智子（同嘱託員）、藤原雄高（同嘱託員）

調 査 補 助 員 伊藤悟郎（同臨時職員）

調査指導機関 文化庁、島根県教育庁文化財課、島根県埋蔵文化財調査センター、島根県古代文化センター、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備調査委員会

○平成19年度（報告書作成：国庫補助内容確認調査）

事 務 局 花谷 浩（出雲市文化観光部次長兼文化財課学芸調整官）、石飛幸治（同文化財課長）、川上 稔（同主査）、景山真二（同埋蔵文化財係長）、野坂俊之（同文化財企画係長）、大槻智徳（同主事）

調 査 員 石原 聡（同埋蔵文化財係主事）、阿部智子（同嘱託員）、藤原雄高（同嘱託員）

調 査 補 助 員 伊藤悟郎（同臨時職員）

調査指導機関 文化庁、島根県教育庁文化財課、島根県埋蔵文化財調査センター、島根県古代文化センター、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備調査委員会

### 3. 作業員

#### 【発掘作業員】（五十音順、敬称略）

伊藤 伸、石飛すみえ、岩崎和夫、岡田裕介、川上晴夫、木村文一、小松原千恵子、齋藤淳一、須田昭夫、柳楽 晃、柳楽昭治、柳楽房利、花田増男、福庭 正、森山節朗、山岡靖一

#### 【整理作業員】（五十音順、敬称略）

加藤怜美、前島浩子、山口恵里

### 4. 本書の刊行にあたり、次の方々から玉稿をお寄せいただいた。記して敬意を表します。

（順不同、敬称略）

時枝克安（法吉アーク）、渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）、角田徳幸（鳥根県埋蔵文化財調査センター主幹）、大澤正巳・鈴木瑞穂（九州テクノリサーチ・TACセンター）、相良英輔（鳥根大学教育学部教授）、鳥谷智文（松江工業高等専門学校准教授）、仲野義文（石見銀山資料館館長）、田中義昭（鳥根大学元教授）

### 5. 本書の刊行にあたって次の方々及び諸機関にご協力を頂いた。記して謝意を表します。（敬称略）

坂井秀弥（文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官）、禰宜田佳男（同文化財調査官）、山下信一郎（同文化財調査官）、平澤 毅（奈良文化財研究所）

田中義昭、河瀬正利、相良英輔、和田嘉寿、河上 清、田中迪亮、西尾克己、松尾充品、原田敏照、目次謙一、仲野義文、鳥谷智文、松杉力修、浅沼政誌、中村唯史、勝部智明（以上、整備調査委員会委員）

角田徳幸、大野篤美（千葉工業大学名誉教授）、穴澤義功（製鉄遺跡研究会代表）、的野克之（鳥根県芸術文化センター課長）、村上伸之（有田町教育委員会学芸員）

佐々木幸男、鳥屋尾義明、岩谷泰介、長吉強司

林野庁、林野庁近畿中国森林管理局鳥根森林管理署、鳥根県出雲県上整備事務所、株式会社安井組、株式会社山下工務所、大和森林株式会社

NPO法人風の子たき風の子楽習館、宮本史跡保存会

### 6. 本書の執筆者については、目次に記す。本書の編集は、阿部智子と伊藤梧郎、藤原雄高の協力を

得て、石原がおこなった。田儀櫻井家たたら製鉄遺跡については、先に『田儀櫻井家 田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書』（多伎町教育委員会、2004年）が刊行されている。本書ではこの報告書を『基礎調査報告書』として引用する。

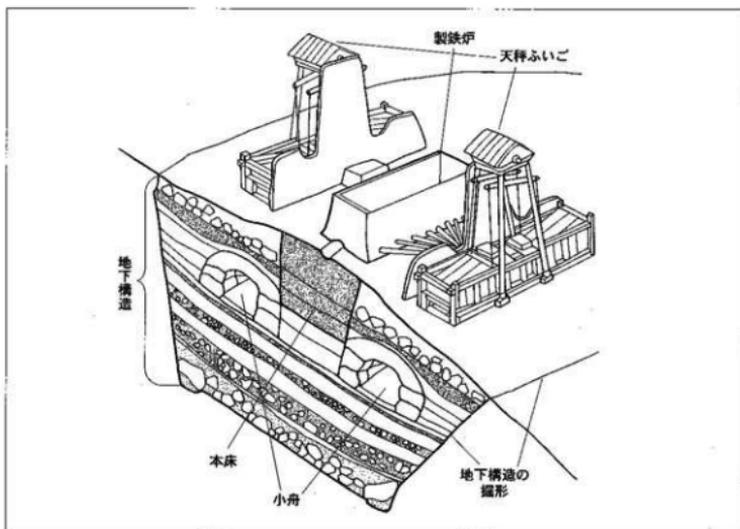
### 7. 写真については、調査員が撮影した。なお、写真の一部は、鳥根県埋蔵文化財調査センター

松尾充品氏、空撮写真は、株式会社ワールド、株式会社人隆設計、有限会社サン・アドが撮影したものである。

### 8. 図版のうち、第5図は株式会社ワールド、第11、19図は株式会社トーワエンジニアリング、

第20、33図は株式会社人隆設計に委託し、測量を実施した。

9. 挿図中に図示した北方位および平面直角座標系のXY座標は、日本測地系による測量法第3座標系の座標北および軸方位を示す。
10. 表記に用いた遺構略号は以下のとおり。  
SD：溝 SK：土坑 SX：その他の遺構  
ただし、特別に調査当時から遺構名称を付し、遺構略号を用いていない遺構もある。
11. 本遺跡の出土品、図面・写真類は出雲市教育委員会で保管している。
12. 平成19年度より、本市の文化財関係発行物に「出雲市の文化財報告」のシリーズ名を付すこととした。本報告はその初刊である。
13. 本書で用いた用語は、次のとおりである。



製鉄炉と地下構造の模式図（潮見浩編「保光たたら」1985年、を一部改変）

# 本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	(石原 聡)	1
第1節 調査に至る経緯		1
第2節 調査の経過		1
第1項 発掘調査		1
第2項 整備調査委員会		2
第3項 調査成果の公表		2
第2章 自然環境と地域のあゆみ	(伊藤悟郎)	3
第1節 自然環境		3
第2節 地域のあゆみ		6
第3章 発掘調査の概要	(石原)	9
第1節 宮本鍛冶山内遺跡		9
第1項 概要		9
第2項 試掘調査		11
第2節 掛樋・越堂・聖谷たたら跡		20
第1項 掛樋たたら跡		20
第2項 越堂たたら跡		20
第3項 聖谷たたら跡		20
第4章 宮本鍛冶山内遺跡の調査		21
第1節 宮本鍛冶屋跡	(伊藤)	21
第1項 調査の目的		21
第2項 調査区の位置		21
第3項 検出遺構・出土遺物		21
第4項 小結		27
第2節 田儀櫻井家本宅跡	(石原)	31
第1項 調査の目的		31
第2項 調査区の位置		32
第3項 検出遺構・出土遺物		32
第4項 小結		40
第5章 掛樋・越堂・聖谷たたら跡の調査		43
第1節 掛樋たたら跡	(阿部智子)	43
第1項 調査の目的		43
第2項 調査区の位置		43
第3項 検出遺構・出土遺物		43
第4項 小結		53

第2節 越堂たたら跡	55	(阿部)
第1項 調査の目的	55	
第2項 調査区的位置	55	
第3項 検出遺構・出土遺物	57	
第4項 小結	63	
第3節 聖谷たたら跡	68	(石原)
第1項 調査の目的	68	
第2項 調査区的位置	68	
第3項 検出遺構・出土遺物	68	
第4項 小結	79	
第6章 自然科学的分析結果	83	
第1節 宮本鍛冶屋跡3号炉と掛樋たたら地の地磁気年代	83	(時枝克安)
第2節 田儀櫻井家たたら製鉄遺跡(掛樋たたら跡・宮本鍛冶屋跡・越堂たたら跡)発掘調査にかかるAMS年代測定	90	(渡辺正巳)
第3節 聖谷たたら跡表面採集鉄滓の考古学的観察	96	(角田徳幸)
第1項 経緯・経過	96	
第2項 観察と分析結果	96	
第4節 聖谷たたら跡採取炉底塊の金属学的調査	98	(大澤正巳・鈴木瑞穂)
第7章 文献史料の調査	103	
第1節 文献史料調査の概要	103	(藤原雄高)
第2節 近世後期田儀櫻井家の山内	104	(相良英輔)
第3節 掛樋・越堂・聖谷たたら地の文献調査	106	
第1項 越堂炉・掛樋炉・聖谷炉の歴史の変遷	106	(鳥谷智文)
第2項 越堂炉の鉄流通について	112	(仲野義文)
第3項 絵図からみた田儀櫻井家の遺跡	116	(藤原)
第8章 調査の成果と課題	127	(田中義昭)

# 挿 図 目 次

第1図	調査対象地位置図	3	第33図	聖谷たたら跡 地形図・調査区設定図・石垣実測図	70
第2図	田儀櫻井家たたら製鉄遺跡と周辺の主要遺跡位置図	4	第34図	聖谷たたら跡 石垣・地蔵実測図	71
第3図	田儀櫻井家関連遺跡位置図	10	第35図	聖谷たたら跡 南平坦面遺構実測図(1)	72
第4図	宮本鍛冶山内遺跡 地形測量図・試掘調査区実測図	13~14	第36図	聖谷たたら跡 南平坦面遺構実測図(2)	73
第5図	宮本鍛冶山内遺跡 第2トレンチ遺構実測図	15	第37図	聖谷たたら跡 北平坦面調査区設定図・製鉄関連遺物出土位置図	74
第6図	宮本鍛冶山内遺跡 トレンチ遺物実測図	16	第38図	聖谷たたら跡 北平坦面調査区土層図	75
第7図	宮本鍛冶屋跡 遺構実測図	24	第39図	聖谷たたら跡 北平坦面遺構実測図	77
第8図	宮本鍛冶屋跡 粒状滓・鍛造剥片分布図(1)	25~26	第40図	聖谷たたら跡 遺物実測図	80
第9図	宮本鍛冶屋跡 粒状滓・鍛造剥片分布図(2)	25~26	第41図	宮本鍛冶屋跡3号炉の自然残留磁気の強度分布	88
第10図	宮本鍛冶屋跡 粒状滓・鍛造剥片分布図(3)	25~26	第42図	掛樋たたら自然残留磁気の強度分布	88
第11図	宮本鍛冶屋跡 石垣実測図	29~30	第43図	宮本鍛冶屋跡3号炉の自然残留磁気、交流消磁(10mT)後、および、交流消磁(15mT)後の残留磁気の方向	88
第12図	田儀櫻井家本宅跡 建物配置推定図	31	第44図	掛樋たたら自然残留磁気と交流消磁(10mT)後の残留磁気の方	88
第13図	田儀櫻井家本宅跡 調査区設定図	33	第45図	宮本鍛冶屋跡3号炉と掛樋たたら自然残留磁気の平均方向(+印)と誤差の範囲(点線の楕円)、および、広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線	89
第14図	田儀櫻井家本宅跡 遺構実測図(1)	34	第46図	試料採取地点(掛樋たたら跡)	92
第15図	田儀櫻井家本宅跡 遺構実測図(2)	35	第47図	試料採取地点(宮本鍛冶屋跡)	93
第16図	田儀櫻井家本宅跡 遺構実測図(3)	36	第48図	試料採取地点(越堂たたら跡)	94
第17図	田儀櫻井家本宅跡 遺物実測図	38	第49図	INTOCAL04グラフ	94
第18図	田儀櫻井家本宅跡 銭貨拓影図	39	第50図	分析対象とした鉄滓	97
第19図	田儀櫻井家本宅跡背面 石垣実測図	41~42	第51図	鉄滓の顕微鏡組織	101
第20図	掛樋たたら跡 地形図・調査区設定図・石垣実測図	45~46	第52図	奥田儀村①	120
第21図	掛樋たたら跡 第1遺構面実測図	47	第53図	奥田儀村② トレース図	120
第22図	掛樋たたら跡 遺構実測図(1)	48	第54図	奥田儀村③	121
第23図	掛樋たたら跡 遺構実測図(2)	50	第55図	奥田儀村④ トレース図	121
第24図	掛樋たたら跡 遺物実測図	52	第56図	宮本鍛冶山内遺跡 周辺地形図	122
第25図	越堂たたら跡 周辺地形図・炉の建物配置図	56	第57図	越堂たたら跡 周辺地形図	122
第26図	越堂たたら跡 調査区設定図・遺構配置図	58	第58図	越堂炉の配置図	123
第27図	越堂たたら跡 調査区土層図	59	第59図	口田儀村①	124
第28図	越堂たたら跡 遺構実測図(1)	60	第60図	口田儀村② トレース図	124
第29図	越堂たたら跡 遺構実測図(2)	61	第61図	口田儀村③	125
第30図	越堂たたら跡 遺物実測図	64	第62図	口田儀村④ トレース図	125
第31図	越堂たたら跡 地蔵実測図	65	第63図	口田儀村⑤	126
第32図	越堂たたら跡 反転復元図	66	第64図	口田儀村⑥ トレース図	126

# 表 目 次

第1表	田儀櫻井家たたら製鉄遺跡と周辺の遺跡	5
第2表	宮本鍛冶山内遺跡 陶磁器観察表	17~18
第3表	宮本鍛冶山内遺跡 銭貨計測表	18
第4表	宮本鍛冶屋跡 粒状滓・鍛造剥片出土地点別重量一覧表	25~26
第5表	宮本鍛冶屋跡 陶磁器観察表	27
第6表	田儀櫻井家本宅跡 陶磁器観察表	39
第7表	田儀櫻井家本宅跡 金属製品観察表	39
第8表	田儀櫻井家本宅跡 石製品観察表	39
第9表	田儀櫻井家本宅跡 銭貨計測表	39
第10表	掛樋たたら跡 陶磁器観察表	52
第11表	掛樋たたら跡 土器観察表	52
第12表	掛樋たたら跡 鉄製品観察表	52
第13表	越堂たたら跡 石製品観察表	64
第14表	越堂たたら跡 陶磁器観察表	64
第15表	越堂たたら跡 製鉄関連遺物観察表	64
第16表	越堂たたら跡 鉄製品観察表	64
第17表	越堂たたら跡 石造物観察表	65
第18表	聖谷たたら跡 陶磁器観察表	81
第19表	聖谷たたら跡 石製品観察表	81
第20表	聖谷たたら跡 鉄製品観察表	81
第21表	聖谷たたら跡 製鉄関連遺物観察表	81
第22表	聖谷たたら跡 銭貨計測表	81
第23表	宮本鍛冶屋跡3号炉、および、掛樋たたらの残留磁気の平均方向と誤差の目安となる 数値	86
第24表	宮本鍛冶屋跡3号炉と掛樋たたらとの地磁気年代	86
第25表	年代測定結果	95
第26表	製鉄関連遺物 詳細観察表	97
第27表	供試材の履歴と調査項目	99
第28表	出土遺物の調査結果のまとめ	99
第29表	供試材の組成	100
第30表	田儀櫻井家経営の炉・鍛冶屋（明治5年）	106
第31表	明治3・5年田儀櫻井家炉別生産量・販売量（貫目）	109
第32表	田儀櫻井家の鉄山経営収支	110
第33表	天保14年半期の販売数と販売先	114
第34表	各たたらの諸元比較表	132

# 図 版 目 次

- |        |   |      |   |
|--------|---|------|---|
| 巻頭図版 1 | 出雲市多伎町宮本鍛冶山内遺跡<br>周辺遠景  | 図版10 | 掛樋たたら跡 1<br>1 空からの遠景<br>2 空からの遠景<br>3 空からの遠景      |
| 巻頭図版 2 | 宮本鍛冶屋跡 全景<br>3号炉  | 図版11 | 掛樋たたら跡 2<br>1 草刈り前<br>2 草刈り後<br>3 排滓場             |
| 巻頭図版 3 | 田儀櫻井家本宅跡 背面の石垣<br>全景  | 図版12 | 掛樋たたら跡 3<br>1 石垣<br>2 石垣<br>3 本床周辺遺構面             |
| 巻頭図版 4 | 掛樋たたら跡 石垣<br>本床   | 図版13 | 掛樋たたら跡 4<br>1 本床検出状況<br>2 掘形ライン<br>3 2トレンチ        |
| 巻頭図版 5 | 越堂たたら跡と口田儀港<br>調査区全景  | 図版14 | 掛樋たたら跡 5<br>1 遺物出土状況<br>2 P10検出状況<br>3 本床上部土層堆積状況 |
| 巻頭図版 6 | 聖谷たたら跡 製鉄遺構<br>聖谷たたら跡に残る石倉<br>移設された地藏   | 図版15 | 掛樋たたら跡 6<br>1 小舟検出状況<br>2 小舟内部<br>3 小舟石積み         |
| 図版 1   | 宮本鍛冶屋跡 1<br>1 遠景<br>2 遠景  | 図版16 | 越堂たたら跡 1<br>1 調査区全景<br>2 調査前の状況<br>3 調査区設定        |
| 図版 2   | 宮本鍛冶屋跡 2<br>1 調査区全景<br>2 1号炉・2号炉<br>3 3号炉検出状況                                 | 図版17 | 越堂たたら跡 2<br>1 調査区全景<br>2 本床検出状況<br>3 本床断面         |
| 図版 3   | 宮本鍛冶屋跡 3<br>1 溝SD01検出状況<br>2 製鉄関連遺物の回収<br>3 製鉄関連遺物の磁石による選別<br>4 製鉄関連遺物のピックアップ | 図版18 | 越堂たたら跡 3<br>1 小舟煙道蓋石<br>2 小舟内部<br>3 地下構造周石        |
| 図版 4   | 田儀櫻井家本宅跡 1<br>1 宮本川左岸の石垣<br>2 平坦面<br>3 平坦面                                    | 図版19 | 越堂たたら跡 4<br>1 分銅出土状況<br>2 鉄滓出土状況<br>3 水路跡         |
| 図版 5   | 田儀櫻井家本宅跡 2<br>1 SX02検出状況<br>2 SX02検出状況<br>3 土間面                               | 図版20 | 越堂たたら跡 5<br>1 礎石A<br>2 礎石Dの墨書<br>3 たたら跡周囲の石垣      |
| 図版 6   | 田儀櫻井家本宅跡 3<br>1 拡張前<br>2 拡張区全景<br>3 石組溝SD01                                   | 図版21 | 越堂たたら跡 6<br>1 権現山<br>2 田儀川右岸の水路跡<br>3 地藏尊石像安置状況   |
| 図版 7   | 田儀櫻井家本宅跡 4<br>1 1トレンチ<br>2 2トレンチ南サブトレンチ                                       |      |   |
| 図版 8   | 田儀櫻井家本宅跡 5<br>1 3トレンチ<br>2 3トレンチSK01<br>3 3トレンチ東サブトレンチ                        |      |   |
| 図版 9   | 田儀櫻井家本宅跡 6<br>1 4トレンチ<br>2 手水鉢<br>3 手水鉢                                       |      |   |

- 図版22 聖谷たたら跡1  
 1 調査前全景  
 2 調査前道  
 3 調査前全景
- 図版23 聖谷たたら跡2  
 1 南平坦面  
 2 南平坦面本床周辺
- 図版24 聖谷たたら跡3  
 1 本床検出状況  
 2 本床周辺  
 3 本床周辺
- 図版25 聖谷たたら跡4  
 1 小舟内部  
 2 小舟焚き口部分  
 3 小舟焚き口閉塞状況
- 図版26 聖谷たたら跡5  
 1 本床断面  
 2 砂鉄集積箇所  
 3 押立柱穴断面
- 図版27 聖谷たたら跡6  
 1 鉄池  
 2 鉄池  
 3 鉄池への導水路の石垣?
- 図版28 聖谷たたら跡7  
 1 排滓場  
 2 排滓場  
 3 北平坦面 石垣
- 図版29 聖谷たたら跡8  
 1 北平坦面 石列1  
 2 北平坦面 石列2  
 3 北平坦面 石列1・2
- 図版30 聖谷たたら跡9  
 1 硬化面とその周辺  
 2 SX06検出状況  
 3 SX06半裁状況
- 図版31 聖谷たたら跡10  
 1 集石1  
 2 集石1  
 3 集石1の下層断面
- 図版32 聖谷たたら跡11  
 1 SX07半裁状況  
 2 地藏尊台座銘文  
 3 地藏尊石像の現状
- 図版33 出土遺物1 宮本鍛冶山内遺跡
- 図版34 出土遺物2 宮本鍛冶山内遺跡
- 図版35 出土遺物3 宮本鍛冶山内遺跡
- 図版36 出土遺物4 宮本鍛冶山内遺跡
- 図版37 出土遺物5 宮本鍛冶山内遺跡
- 図版38 出土遺物6 宮本鍛冶山内遺跡
- 図版39 出土遺物7 宮本鍛冶山内遺跡
- 図版40 出土遺物8 田儀櫻井家本宅跡
- 図版41 出土遺物9 田儀櫻井家本宅跡
- 図版42 出土遺物10 田儀櫻井家本宅跡
- 図版43 出土遺物11 掛鐘たたら跡
- 図版44 出土遺物12 越堂たたら跡
- 図版45 出土遺物13 越堂たたら跡  
 石造地藏尊
- 図版46 出土遺物14 聖谷たたら跡
- 図版47 出土遺物15 聖谷たたら跡
- 図版48 出土遺物16 聖谷川採取 羽口

# 第 1 章

調査に至る経緯と経過

## 第1章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

現在、無住の地となっている出雲市多伎町奥田儀の宮本鍛冶山内遺跡は、かつて田儀櫻井家が経営したたたら製鉄業の中心として栄えた地である。宮本周辺地区の住民は、白らが田儀櫻井家のたたら製鉄の歴史を貴重なかけがいのない遺跡、未来へ語りついでいきたい遺跡と認識し、これを保存するため、平成5年(1993)に「宮本史跡保存会」を結成し、保護保存活動を行ってきた。その内容は、田儀櫻井家の歴史を伝えるパンフレットの作成、宮本に残る民俗資料の展示会、毎年5月に開催される金屋子神社での祭りの開催など、宮本への想いを広く伝える活動である。

平成12年(2000)4月には、多伎町による「第4次多伎町総合振興計画」のなかに「宮本史跡公園整備事業」として、遺跡の保存活用が計画された。平成15年11月17日「宮本櫻井家のたたら製鉄に関する調査委員会」が組織され、遺跡の分布調査、文献調査、建造物調査、民俗調査、石造物調査など基礎的な調査が実施された。その成果は、平成16年8月に「田儀櫻井家田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書」にまとめられた(以下、『基礎調査報告書』と引用)。16年度からは国庫補助を得て発掘調査を実施することとなり、平成17年3月23日の周辺2市4町(出雲市・平田市・多伎町・佐田町・湖陵町・大社町)の広域合併により、多伎町教育委員会で実施していた調査は、出雲市教育委員会が引き継がれることとなった。その後、平成18年(2006)1月26日には、宮本鍛冶山内遺跡と出雲市佐田町所在の朝日たたら跡をあわせ、「田儀櫻井家たたら製鉄遺跡」として国史跡に指定された。

### 第2節 調査の経過

#### 第1項 発掘調査

平成16年(2004)度には、宮本鍛冶山内遺跡のトレンチ調査を12月より実施した。遺跡全体に7箇所の小トレンチを設置し、調査をおこなった。その詳細については、第3章第1節第2項で述べるが、大鍛冶炉(精錬鍛冶炉)の検出(1トレンチ)、小鍛冶炉(鍛錬鍛冶炉)の検出(2トレンチ)、土間状硬化面の検出(7トレンチ)など、面積は狭小であったが、遺跡の性格を知る上で、重要な発見が各所であった。

平成17年(2005)度には5月より宮本鍛冶山内遺跡の宮本鍛冶屋跡(1トレンチ)の拡張調査に着手し、新たに1基の大鍛冶炉を確認した。6月からは、掛樋たたら跡の調査に着手し8月より発掘を開始した。10月には、近世たたら地下構造を確認した。12月からは宮本鍛冶山内遺跡の田儀櫻井家本宅跡調査に着手した。雪のため、ビニールハウスを設置し、その中で調査を行った。平成18年1月に化粧土間面(SX02)を確認した。3月に調査を終了した。

平成18年(2006)度調査は、4月より越堂たたら跡の発掘調査に着手し、5月にたたら地下構造を確認した。また、宮本鍛冶山内遺跡の田儀櫻井家本宅跡拡張調査に着手し、7月に小規模な排水路(SD01)を確認したのち埋め戻しを行なった。8月より聖谷たたら跡への機材搬入の通路及び遺跡内の草刈りを実施し、草刈り中に本床の一部が露出していることを確認し、10月より発掘を開始した。平成19年(2007)1月に越堂たたら跡の調査を終了し、同年3月には聖谷たたら跡の調査も終了した。

## 第2項 整備調査委員会

平成15年度に設置された宮本櫻井家のたたら製鉄に関する調査委員会は、平成17年3月に第2回委員会が開催された。その委員会を踏襲するかたちで、広域合併後、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備調査委員会が発足した。委員会は、考古学、文献史学、民俗学、建築学等の専門家15名の委員により構成された（会長：田中義昭 元島根大学教授）。整備調査委員会は、田儀櫻井家の調査・整備を適切に行なうための諮問機関であり、文献史学部会、考古部会など5つの部会で構成されている。平成17年度に2回（平成17年8月、平成19年2月）、18年度に1回（平成18年11月）の委員会を開催した。また、発掘調査の具体的な方針や、調査内容については適宜、現地において考古部会を開催し指導を受けた。

## 第3項 調査成果の公表

発掘調査の成果を広く市民に伝えるため、平成17年度には、11月26日に掛樋たたら跡・宮本鍛冶山内遺跡・朝日たたら跡を対象に現地説明会を実施した。見学者は120名。また平成18年度には、越堂たたら跡・宮本鍛冶山内遺跡を対象に現地説明会を実施した。見学者70名。現地説明会では、宮本鍛冶山内遺跡において、宮本史跡保存会の協力を得て、宮本鍛冶山内遺跡各所に残る遺構について説明をしていただいた。

また、パンフレットなどによる広報活動も行い、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡NEWS『鉄！この部屋』を年4回のペースで発行した。内容は、市民向けの平易なものであり、遺跡の調査状況、製鉄の方法などが紹介されている。さらに、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の国史跡指定1周年記念として、パネル展と「たたら講座」を平成19年（2007）2月10日（土）～25日（日）出雲市多伎町出雲市立海辺の多伎図書館及び出雲市佐田町サノオ館において開催した。この企画は市民の好評をえたので、翌年度も、平成20年（2008）3月1日（土）～31日（月）の日程で第2回を開催した。

## 第2章

自然環境と地域の歩み

## 第2章 自然環境と地域のあゆみ

### 第1節 自然環境

出雲市多伎町は島根県の中央部、出雲圏域海岸部の西端にあり、北緯35度15分、東経132度37分付近に位置している。町域は東西約8.2km、南北約10.8kmに及び、面積は55.15km<sup>2</sup>である。北は日本海に面し、東は出雲市湖陵町と同佐田町に、南と西は大田市に接している。

気候は日本海岸性気候で低温、多雨、多雪である。積雪は対馬海流の影響で出雲平野部と比較すれば少ない。町内山間部では年に1・2度、20~30cmの積雪が記録されるが、近年は温暖化の影響で、積雪量は減少している。海岸部では、冬季殊に強く吹く北西・西風のため積雪はほとんどない。

山系は概ね南北に走り、山容は東より西に至るに従い急峻となり、山体は海岸近くまで迫っている。この山系に沿って田儀川、小田川、久村川の3河川が日本海に注いでいる。田儀川は、大須川、宮本川、草井谷川、大年谷川、仙山川、塚之尾谷川などを合して田儀港の西部で日本海に注いでいる。神戸川支流の佐田町伊佐川と田儀川との分水嶺は標高400mの高さをもつ。この分水嶺は、佐田町下佐津日の西方から小田川との分水嶺となり、要害山、亀山と比較的高度を保ちながら海岸に達している。小田川は田尻谷川、猪子田川、宇杉川、西明川、城谷川などを合して久村海岸へ注いでいる。

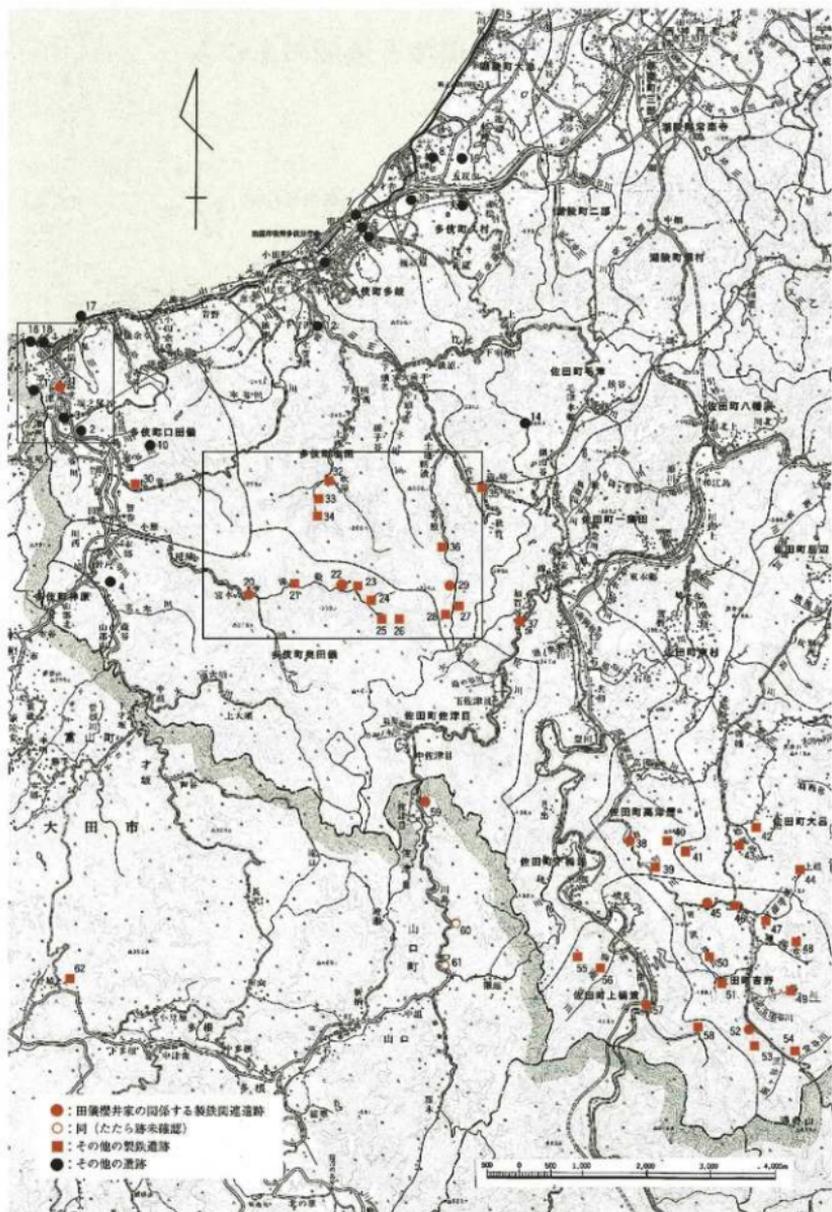
当地域の地質は、町内海岸部の大部分は新第三紀中新世の礫岩を主とする地層であり、山間部西側は第三紀中新世の安山岩質、東側は後期中生代~第三紀中新世の酸性凝灰岩の層である。本書報告の各遺跡の地質は、宮本鍛冶山内遺跡・掛桶たたら跡が後期中生代の酸性凝灰岩層、越堂たたら跡が新第三紀中新世の安山岩質岩石層、聖谷たたら跡が第三紀中新世の酸性凝灰岩層である。

町内土地利用の状況は、宅地1.16km<sup>2</sup>(2.1%)、農用地2.86km<sup>2</sup>(5.2%)、林野37.91km<sup>2</sup>(68.9%)、その他雑種地など13.21km<sup>2</sup>(24.0%)である<sup>1)</sup>。町の大部分は山林地であるため平野が非常に少なく、川に沿ってできた氾濫原、その両側斜面にある階段状の平坦面を造成し耕地化している。

また、多伎町では海辺の温暖な潮風と水はけの良い土壌を活かし、いちじくの栽培を盛んに行っている。現在、多伎町は県下でも最大のいちじく産地となっており、町内で栽培されたいちじくは、町の特産品として県内外に高い知名度を誇っている。



第1図 調査対象地位位置図



第2図 田儀櫻井家たたら製鉄遺跡と周辺の主要遺跡位置図(囲みは第3図の位置)

第1表 田儀櫻井家たたら製鉄遺跡と周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	所在地	概要	備考
1	矢谷遺跡	散布地	出雲市多伎町久村	赤土土器	
2	経塚山古墳群	古墳	出雲市多伎町口田儀塚尾谷口	4基確認、箱式石椁、壱穴式石室、石枕、人骨、玉類、土器類、刀剣	外形消滅
3	経塚山横穴墓群	横穴墓	出雲市多伎町口田儀塚尾谷口	3穴、家形墓入	外形消滅
4	原の古墳	古墳	出雲市多伎町奥田儀	横穴式石室	
5	砂原小山横穴墓群	横穴墓	出雲市多伎町多岐砂原	家形墓入、須事器	1基消滅
6	小田古墳	古墳	出雲市多伎町小田	土器	所在不明
7	砂原古墳	古墳	出雲市多伎町多岐砂原	箱式石椁?、土器器、須事器	外形消滅
8	正南横穴墓群	横穴墓	出雲市多伎町久村正南谷	3穴、家形墓入、貝、刀刀他	崩壊
9	後谷横穴墓群	横穴墓	出雲市多伎町久村後谷蛇窪	3穴、妻入、丸天井、横穴式石室	崩壊
10	要宮山城跡	城跡	出雲市多伎町口田儀中郷	山城(郭、帯郭、土塁)、古墓	
11	鶴ヶ城跡	城跡	出雲市多伎町口田儀清武山	山城(郭、帯郭、堀切、堅壁、土塁、石垣)	
12	富士ヶ城跡	城跡	出雲市多伎町小田菅沢	山城(郭、帯郭、腰郭、堀切、土塁、虎口、橋台)、宝篋印塔	遺構一部破壊
13	平畑城跡	城跡	出雲市多伎町久村新道		消滅
14	熊ヶ丸城跡	城跡	出雲市多伎町小田	祭祀跡、山城(郭、堀切)	
15	山陰道	街道跡		近世街道跡	
16	口田儀台場跡(1)	台場跡	出雲市多伎町口田儀町向		
17	口田儀台場跡(2)	台場跡	出雲市多伎町口田儀上町東笠取坂		
18	口田儀番所跡	番所跡	出雲市多伎町口田儀		推定地、消滅
19	雲州久呂長沢焼窯跡	窯跡	出雲市多伎町久沢辰山		黒指定
20	元本郷治山内遺跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町奥田儀元本	骨子窯、石粉、窯道具、陶磁器、陶台	国指定 本書所収
21	屋形遺跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町奥田儀	鉄滓、陶磁器、石垣、黒曜石	発掘調査
22	掛桶たたら	製鉄遺跡	出雲市多伎町奥田儀掛桶	近世たたら跡、石垣、鉄滓、陶磁器	本書所収
23	屋敷谷Ⅰ遺跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町奥田儀	石垣	
24	屋敷谷Ⅱ遺跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町奥田儀	石垣	
25	屋敷谷Ⅲ遺跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町奥田儀	石垣	
26	屋敷谷たたら跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町奥田儀	鉄滓	発掘調査
27	聖谷奥Ⅰ遺跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町奥田儀	石垣	
28	聖谷奥Ⅱ遺跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町奥田儀	石垣	
29	聖谷たたら跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町奥田儀	近世たたら跡、鉄池遺構、石垣、鉄滓、陶磁器	本書所収
30	草井谷鍛冶屋跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町口田儀		
31	越堂たたら跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町口田儀越堂	近世たたら跡、山内堀、鉄滓、陶磁器	本書所収
32	西明原の前たたら跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町小田西明	鉄滓	
33	西明原たたら跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町小田西明	石垣、鉄滓	
34	堂のそねたたら跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町小田西明	鉄滓	
35	道ヶ崎たたら跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町小田道ヶ崎	石垣、鉄滓	
36	茗ヶ原奥たたら跡	製鉄遺跡	出雲市多伎町小田	たたら跡、陶磁器、銅銭、鉄滓	発掘調査
37	加賀谷たたら跡	製鉄遺跡	出雲市佐田町一窪田加賀谷	金屋子神社、石垣、小小屋	
38	朝日たたら跡	製鉄遺跡	出雲市佐田町高津屋	高倉、近世たたら跡、金屋子神社跡	発掘調査、黒指定
39	田床たたら跡	製鉄遺跡	出雲市佐田町高津屋田床		
40	大横谷Ⅰ号たたら跡	製鉄遺跡	出雲市佐田町高津屋		
41	大横谷Ⅱ号たたら跡	製鉄遺跡	出雲市佐田町大呂大山	鉄滓	
42	大山たたら跡	製鉄遺跡	出雲市佐田町大呂大山	鉄滓、銅	
43	藤谷たたら跡	製鉄遺跡	出雲市佐田町大呂大山藤谷	鉄滓	
44	打尾Ⅰ・Ⅱ号たたら跡	製鉄遺跡	出雲市佐田町大呂大山	鉄滓	
45	青原たたら跡	製鉄遺跡	出雲市佐田町吉野古伊	鉄滓、金屋子神社	
46	古(吉野)たたら跡	製鉄遺跡	出雲市佐田町吉野下野	鉄滓、金屋子神社	
47	客ノ木たたら跡	製鉄遺跡	出雲市佐田町吉野客ノ木	鉄滓、銅	
48	小葦江泊たたら跡	製鉄遺跡	出雲市佐田町吉野小葦井	鉄滓	
49	水谷たたら跡	製鉄遺跡	出雲市佐田町吉野水谷		
50	菅沢たたら跡	製鉄遺跡	出雲市佐田町吉野菅沢	金屋子社礎石、鉄滓	
51	新田原たたら跡	製鉄遺跡	出雲市佐田町吉野新田原	炭石、鉄滓	
52	梅ヶ谷原たたら跡	製鉄遺跡	出雲市佐田町吉野梅ヶ谷尻	近世たたら跡、鉄滓	発掘調査、消滅
53	梅ノ木谷たたら跡	製鉄遺跡	出雲市佐田町吉野梅木谷		
54	堂の本たたら跡	製鉄遺跡	出雲市佐田町吉野堂の本		
55	空山たたら跡	製鉄遺跡	出雲市佐田町上橋渡宮の部		
56	柳瀬たたら跡	製鉄遺跡	出雲市佐田町上橋渡門並柳瀬谷		
57	橋原たたら跡	製鉄遺跡	出雲市佐田町上橋渡	近世たたら跡、鍛冶炉遺構、中世製鉄炉	発掘調査、消滅
58	保井谷たたら跡	製鉄遺跡	出雲市佐田町上橋渡保井谷		
59	日ノ平たたら跡	製鉄遺跡	大田市山口町佐津日	近世たたら跡、山内墓、金屋子神社跡	発掘調査
60	奥原たたら跡	製鉄遺跡	大田市山口町山口川奥	鉄滓	
61	横ヶ原沢たたら跡	製鉄遺跡	大田市山口町山口川奥		
62	久谷たたら跡	製鉄遺跡	大田市三瓶町野城	近世たたら跡	発掘調査

国指定史跡 □ 本書所収

『増補改訂 鳥根県遺跡地図Ⅰ』(鳥根県教育委員会、2003年)ほかによる

## 第2節 地域のあゆみ

### 縄文時代

現在出雲市多伎町内では縄文時代の集落遺構は確認されていない。しかし、同町小田菅沢地内より打製石器（尖頭器、石鏃、スクレイパー）や磨製石器（石斧等）などが採取されており、また奥田儀地区の屋形遺跡でも黒曜石製の石鏃等が出土していることなどから、同町内に縄文集落の遺跡が存在する可能性は高い。

### 弥生時代

多伎町の弥生時代の遺跡は、出雲平野周辺部に比べると少ない。同町の弥生時代を知るうえで貴重な資料となるのが昭和31年（1956）に久村矢谷地区の水田から出土した弥生時代前期の広口壺である。この土器の底部には刷の痕跡があり、弥生時代前期には既にこの周辺で稲作が行われていたことがうかがえる。

### 古墳時代

町内には経塚山古墳（口田儀地区）、原の古墳（奥田儀地区）、砂原小山横穴墓群（多岐地区）などがある。そのなかで唯一発掘調査が行われた経塚山古墳は、田儀小学校敷地内の小丘陵にある。この古墳は昭和10年ごろ県道拡張工事のおり初めて発見され、箱式石棺とともに人骨・鉄剣が出土したといわれる。発掘調査は昭和26年（1951）に行われ、丘陵の頂上付近に小規模な古墳が4基確認されている。そのうちの1基は6m×5.5m・高さ1mの方墳で、竪穴式石室の様相を帯びた箱式石棺をもち、副葬品として滑石製の勾玉・ナツメ玉、碧玉製管玉が出土した。これらの出土品などから、経塚山古墳は中期の古墳と推定される。

### 奈良時代

天平5年（733）に撰上された『出雲国風土記』には「多伎郷。郡家の西南二十里、天下造らしし大神の御子、阿陀加夜努志多伎吉比売命座しき。故、多吉と云ふ。神亀三年に、字を多伎と改む。」と記されている。『出雲風土記抄』（岸崎時照）に「奥田儀、口田儀、小田、多岐、久村等を併せて一郷と為す也」とあるように、ほぼ現在の町域が律令期における「多伎郷」に相当していたと考えられている。多伎町は出雲国と石見国の境に位置し、「多伎驛」[多伎驛]「多伎戊」[多伎鋒]があると記され、石見へと続く「正西道」の交通の要所、国境の要地となっていた。

### 平安時代

平安時代後期になると、全国各地で武士による反乱が相次ぐようになる。出雲国でも嘉承2年（1107）に源義親が反乱を起こし、朝廷から追討使を任せられた平正盛によって討たれるという事件が起こる。義親最期の地は多伎町口田儀地区の権現山であると伝わっており、「田儀村沿革史」によると、天仁元年（1108）正月、義親は口田儀鶴ヶ丸に立籠もり、田儀川をへだてて平正盛と戦ったが敗れ、権現山で流れ矢に当たって没したとある。その後、権現山では江戸時代末期に田儀櫻井家11代当主運右衛門直順が本願となり、義親追悼の祠が建てられ、名を神武社（権現社）とした。

## 室町時代

戦国時代には、石見国と国境を接する多伎町でも数々の攻防が繰り返り広げられた。とくに尼子氏と大内氏・毛利氏との攻防の舞台となり、町内にも防備のための山城がいくつか築かれた。小田地区にある富士ヶ城跡は、尼子清貞配下の小田常陸が応永年間（1394～1427年）に築いた山城であり、現在は郭跡などが残る。また、口田儀地区にある鶴ヶ城は、尼子経久が勢力を広げた大永年間（1521～1527年）に、その配下にあった小野玄蕃守が西方からの侵攻に備えて築いた山城である。この城は毛利元就による2度の侵攻を防いだが、元亀3年（1572）に元就の孫毛利輝元の城攻めにより落城、後に田儀城と改められた。現在は、山頂付近に主郭跡や、堀切などが残る。ちなみに3度目の鶴ヶ城攻めで輝元に策を進言し、毛利方の勝利に貢献したのが三嶋清右衛門である。清右衛門は口田儀出身の銅山師で、応永年間に出雲国鷺浦（現、出雲市大社町）で銅山を発見し開発を行った人物である。また、清右衛門は博多の豪商神谷寿徳に乞われて石見銀山の再開発に協力し、鷺浦山の技術者を動員して銀鉱石を採掘したことで知られる。奥田儀蔵谷地区には、清右衛門の供養塔と伝わる石塔が残っており、その正面の銘文には慶長5年（1600）の年号が見られる。町内に残る戦国時代以前の石造物として貴重な資料といえる。

## 江戸時代

江戸時代初期に、奥田儀宮本の地で田儀櫻井家がたたら製鉄業を開始する。田儀櫻井家は奥出雲に本拠を構える仁多櫻井家から分家独立した家であり、代々鉄師として多くの従事者を抱え、製鉄業を営んだ。田儀櫻井家の製鉄業は、仁多櫻井家初代の三郎左衛門直重が江戸時代初期に奥田儀村へ来住し、鉄山経営を起こしたことに始まるといわれている。その後、直重の嫡子幸左衛門直春を田儀櫻井家初代とし、12代勝之助直明が明治23年（1890）年に宮本の地を後にするまでの約250年間、製鉄業を続けた。田儀櫻井家は、250年に及ぶその経営のなかで盛衰を繰り返しながら成長し、奥出雲の三大鉄師に次ぐ家格を得て、安定した鉄生産を行い、地域の経済や人々の暮らしに大きな影響を与えた<sup>(2)</sup>。田儀櫻井家の製鉄関連遺跡は多伎町、佐田町、大田市と各地に点在し（第2図）、そのうちの数箇所が遺跡で発掘調査が実施されている。

江戸時代後期には、多伎町久村で長沢焼（久呂焼）の生産が始まる。文政10年（1827）頃に長沢山に窯が築かれ、当初は陶器を焼いていた。その品質は良くなかったが、文政の末頃、肥前国伊万里の陶工木村甚兵衛が来村し磁器製造の指導をするようになってからは、優れた作品が作られるようになった。しかし、経営難から資金不足となり、天保3年（1832）に藩直営の窯となる。その後、藩の方針により天保7年（1836）、下意東村（東出雲町）の長歳山に窯が移された。なお、長沢焼は県内初の地元生産の磁器である。

幕末、鎖国政策をとる江戸幕府は、市場拡大や寄港地確保を狙う欧米列強国から軍事的圧力をかけられ、国内の沿岸地域では緊張が高まる。そのため松江藩は藩内の海岸要所に台場を築き外国船に備えた。当地でも多岐地区砂原に1箇所、田儀湾に2箇所台場が築かれ外国船に備えたといわれる。

## 明治時代

製鉄業で栄えた田儀櫻井家も、明治になると西洋式製鉄におされ次第に経営難となる。明治23年（1890）に田儀櫻井家はたたら製鉄業の経営を断念し奥田儀宮本を去り、鉄山経営は終焉を迎えた。従事していた人々も廃業となり、この地を離れていったため、奥田儀地区の人口も急激に減少した。

## 昭和時代

昭和初期、国内で戦時体制が強化されるなか、鉄鉱資源の重要性が高まるようになる。そのため、多伎町久村の矢谷地区では、日立製作所安来工場の分工場として昭和16年(1941)から砂鉄採取を目的とした久村鉱山が操業された。採鉱は坑内掘りと露天掘りの両方で、粗鉱月産約2,500~3,000トンであったという。この鉱山で採れる砂鉄の鉄含有率は25~40%と高い。また文献史料<sup>9)</sup>によれば、この地域には田儀櫻井家が経営した鉄穴場(赤松鉄穴)があったとされ、もともと砂鉄を採取できる下地があったと思われる。この鉱山は、昭和20年(1945)、終戦によって廃山となり、現在は当時の選鉱場の一部を残すのみとなっている。

## 註

- (1) 平成16年度「多伎町土地総括表」より。
- (2) 田儀櫻井家の沿革については「基礎調査報告書」に詳述されている。
- (3) 田部家文書「弘化四未弍月御用留」

## 参考文献

- 島根県 「都道府県土地分類基本調査(石見大田・大浦編)」1978年
- 島根県教育委員会 「出雲部製鉄遺跡」島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅰ 1983年
- 同 「石見部製鉄遺跡」島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅱ 1983年
- 島根県教育委員会 「島根県遺跡地図Ⅰ(出雲・隠岐編)」2003年
- 同 「島根県遺跡地図Ⅱ(石見編)」2003年
- 同 「島根県遺跡地図Ⅰ(出雲・隠岐編)」2003年
- 同 「島根県遺跡地図Ⅱ(石見編)」2003年
- 多伎町教育委員会 「未来への伝承」1993年
- 同 「基礎調査報告書」2004年
- 同 「麗形遺跡」林道宮本聖谷線開設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ、2004年
- 同 「茗ヶ原奥たたら跡」林道宮本聖谷線開設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ、2005年
- 多伎町役場 「多伎町誌」1978年
- 同 「多伎町ふるさと辞典」2005年
- 多伎村役場 「岐久村誌」1959年
- 同 「田儀村誌」1961年
- 松尾充晶 「多伎の考古学」2004年
- 森山一止 「奥田儀宮本屋櫻井家文書目録」『古代文化研究』第10号、島根県古代文化センター、2002年

## 第3章

### 発掘調査の概要

## 第3章 発掘調査の概要

### 第1節 宮本鍛冶山内遺跡

#### 第1項 概要

宮本鍛冶山内遺跡は、出雲市多伎町奥田儀宮本に所在し、神社仏閣、墓地、鍛冶屋跡、住居跡などの遺構が集中している遺構群である。出雲市佐田町高津屋所在の朝日たたら跡とともに、平成18(2006)年1月26日に国史跡に指定された。指定面積は、214,673㎡である。宮本鍛冶山内遺跡は、田儀川支流の宮本川両岸の東西約400m、南北20~100mの範囲を中心地域としている。

宮本鍛冶山内遺跡は、次の遺構群で形成される。宗教的施設群としては、田儀櫻井家のかつて菩提寺であった智光院、その向かって左側に田儀櫻井家累代の墓地、また宮本に関係する人々の墓地として水丸子山墓地などが所在する。住居としては、田儀櫻井家当主の住まいであったとされる田儀櫻井家本宅跡、従事者の住居があった山内従事者住居跡などが所在し、生産の跡としては、宮本鍛冶屋跡が所在している。なお、詳細については、『基礎調査報告書』を参照されたい。

#### 智光院

智光院は10代、多四郎直敬が文政4年(1821)に田儀櫻井家の菩提寺として、佐田町一窪田にあった廃寺を移転勧請した寺である。現存する本堂はこの時に作られたものと伝えられる。本堂の真正面に仏壇があり、阿彌陀如来像が安置されていた。また、彫刻が施された欄間と様々な絵が描かれた格天井を見ることができ、江戸末期の建築技法を今に伝えるだけでなく、田儀櫻井家の栄華を垣間見ることができる貴重な建築遺構と言える。

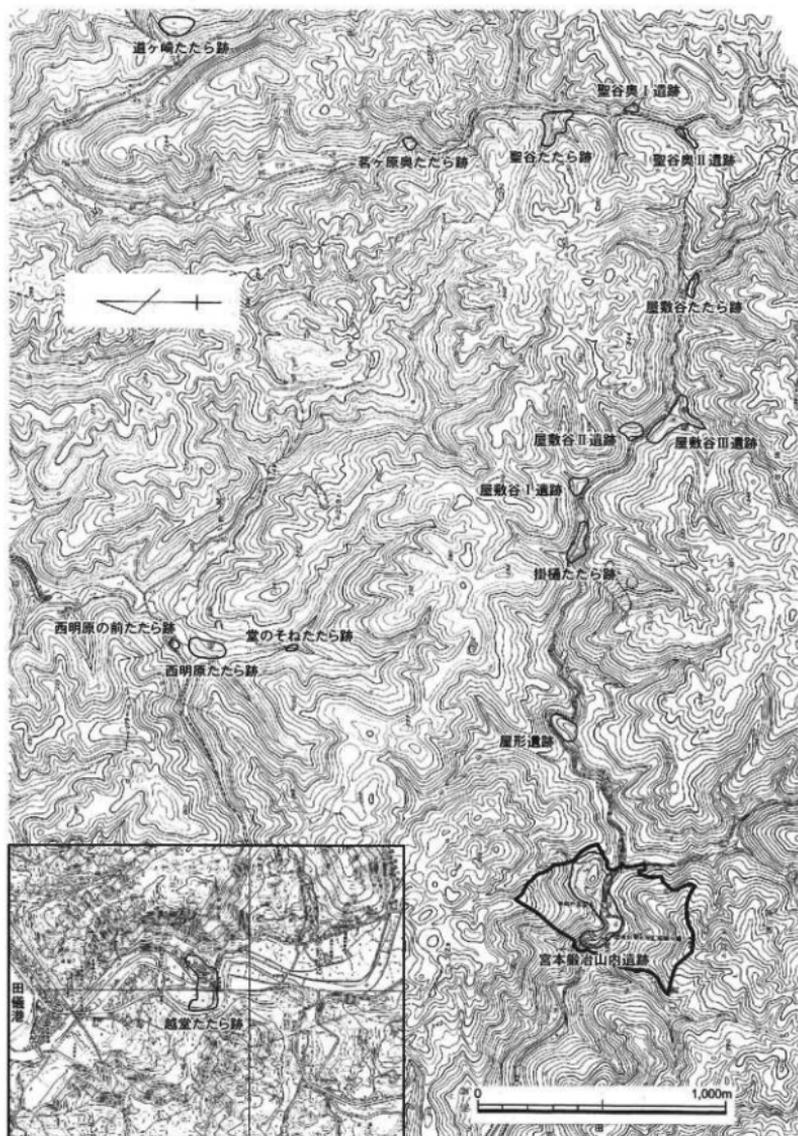
また、田儀櫻井家全盛のころには、この本堂の周りに医王堂や地藏堂が建立されていたようである。

#### 田儀櫻井家墓地

この墓地には、田儀櫻井家累代の墓塔が27基配置されている。正面中央でひと際目立つ五輪塔が田儀櫻井家の祖とされる三郎左衛門直重の供養塔である。延宝7年(1679)に没したこの直重から、明治26年(1893)に没した12代直明までの歴代当主、さらにその子女等の墓塔から墓地は構成されている。その配置に年代順などの規則性が認められないのは、幕末以降に再整備された結果と考えられ、それ以前の墓地の配置状況は不明である。田儀櫻井家墓地は、創業期から廃業にいたるまで、約250年に及ぶ経営の実態をその墓塔から読み取ることができる点できわめて貴重な資料であると言える。

#### 田儀櫻井家本宅跡

田儀櫻井家本宅跡は、東西約70m、南北約40mの長方形の隅に張出部を設けた敷地が現存している。北側と西側は、宮本川の岸に揃えてあり、東側と南側は、山腹を大きく切り込んで整地されている。いずれの面も2段以上の石垣が組まれている。特に注目すべきは、南東隅付近の石垣である。ここは宅地を広げるために山を削り、崖面に5段の石垣を組み上げている。比高は約15mであり、使用されている石は人頭大の自然石が主体をなし、人工景観としても優れた趣を呈している(平成17・18年度発掘調査を実施、第4章第2節で詳述)。



第3図 田儀櫻井家関連遺跡位置図 (S=1/20,000)

## 宮本鍛冶屋跡

宮本鍛冶山内遺跡の「生産の場」といえるのが、この宮本鍛冶屋跡である。元々この場所では大鍛冶（精錬鍛冶）が行われていたと言いつえられており、発掘調査では、確実に大鍛冶の炉であるものが1基（2号炉）、その他にも建物の施設の一部と思われる遺構が確認できた。追加調査では、大鍛冶の炉をもう1基（3号炉）確認することができた（平成16、17年度に調査を実施、第4章第1節で詳述）。

## 金屋子神社

製鉄を司る金屋子神（金山彦命と金山姫命）を祀る。社殿の位置は、標高137.2m。参道の石段は全部で110段、高低差25m。中ほどにテラスがあるとはいえ、急勾配である。境内には、拝殿と本殿がある。本殿に納められた数枚の棟札によると、この神社は元文元年（1736）に造立され、今の本殿は天保15年（1844）に建て替えられたことがわかる。本殿は凝った造りになっており、その彫刻から江戸末期の装飾的な技法をみることができる。なお拝殿は昭和31年（1956）に建てられたもので、それまでは本殿だけで拝殿はなかったと思われる。

## 水丸子山墓地

水丸子山墓地は、宮本の山内作業に関った、一般従事者の集団墓地である。水丸子山の北東から南東側の山腹斜面にかけて総数80基の墓石があり、なかでも南東部に墓石が集中している。ここでは急斜面を等高線に沿って造成し、回廊状に8～9箇所平坦面が造り出されており、そこに複数の墓石が立ち並んでいる。墓石のなかには「鑪屋鉄信士」や「鉄翁良関信士」など山内ならではの戒名がみられる。

## 山内従事者住居跡

宮本鍛冶山内遺跡の「生活の場」といえるのが、この山内従事者住居跡である。水丸子山を取り囲むように、石垣を組んで造作された平坦地が懸壇状に連なっている。平坦面の面積は、大（350～450㎡）、中（180～280㎡）、小（110～150㎡）、極小（10～60㎡）の4つに分類され、規模別にみると中・小クラスが8～9箇所と多く、大クラスと、極小クラスが各々5箇所となっている。現在、建物等はまったく残っていない（本章第2項にて詳述）。

## 第2項 試掘調査（第4図）

試掘調査実施の発端は、平成15年（2003）11月に「宮本櫻井家のたたら製鉄に関する調査委員会」が設置されたことである。まず、委員会指導のもと発掘調査を伴わない総合調査が実施され、その調査成果は、平成16年8月に「基礎調査報告書」としてまとめられた。宮本鍛冶山内遺跡の遺構群についても詳しく記述された。遺跡の年代観については、陶磁器等の表採遺物から述べられているものの発掘調査によって得られた資料ではなかったため、さらに詳細な調査・研究が必要であると強調されている。これをうけて、平成16年12月より試掘調査を開始した。

平成16年度に実施された試掘調査が、田俣櫻井家関連遺構調査の端緒となった調査である。調査の目的は、生産の中心となっていた大鍛冶場の確認、そして山内住居跡区域における石垣を伴った各平坦面の性格の確認である。遺跡内にある石垣をとまなう平坦面のなかから、聞き取り図や表採遺物を

手がかりに地権者の植林を避ける形で2×5mのトレンチを7箇所設定した。各トレンチとも、植林を傷つけないように人力により表土掘削を行い、遺構検出・精査、随時写真・図面記録を行った。

### 【1 トレンチ】

1 トレンチを設定した平坦面は、田儀櫻井家本宅跡から宮本橋を渡ってすぐ左手にあり、その面積は約230㎡である。平坦面中央部に東西方向の2×5mのトレンチを設定し、調査を行った。詳細は次節、第4章第1節で述べる。

### 【2 トレンチ】

2 トレンチを設定した平坦面は、金屋子神社参道石段登り口の上段に位置する。平坦面の面積は約100㎡である。平坦面中央部に東西方向に2×5mのトレンチを設定し、調査を行った。約15cmの表土を除去した段階で、非常にかたくしまった粘質土面を検出した。これが作業面と考えられ、この面で5基の鍛冶炉を検出した。

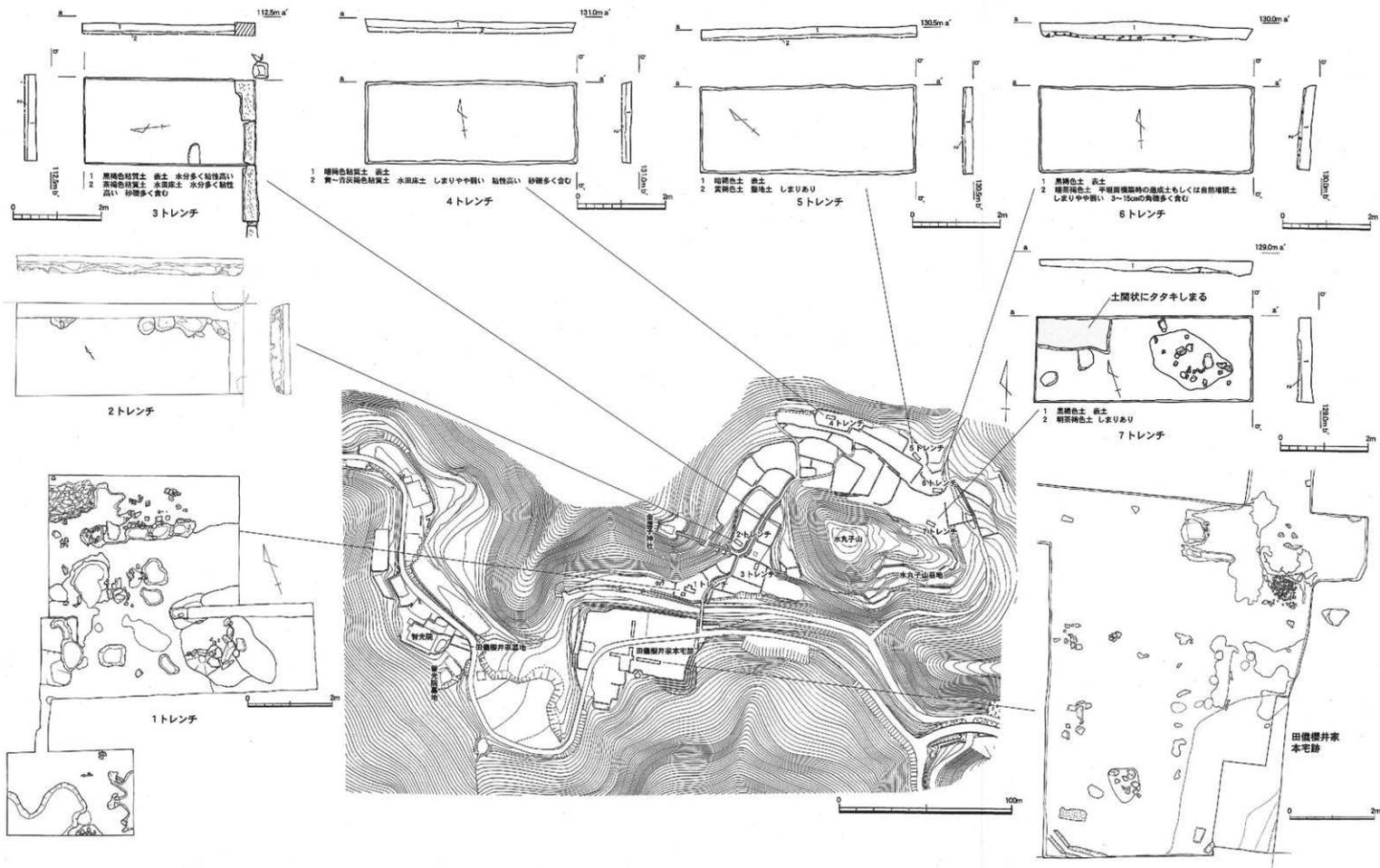
#### 遺構面

非常にかたくしまった土間状のタタキ面である。トレンチ内の東と西側で違いがあり、東側では赤味を帯びた黄褐色の粘土が広がっており、所々に炭化物、焼土ブロック、5～10cmの礫を含んでいる。西側は礫が少なく色は暗褐色である。とてもかたくしまっているタタキ面で、焼土粘土ブロックを含む。

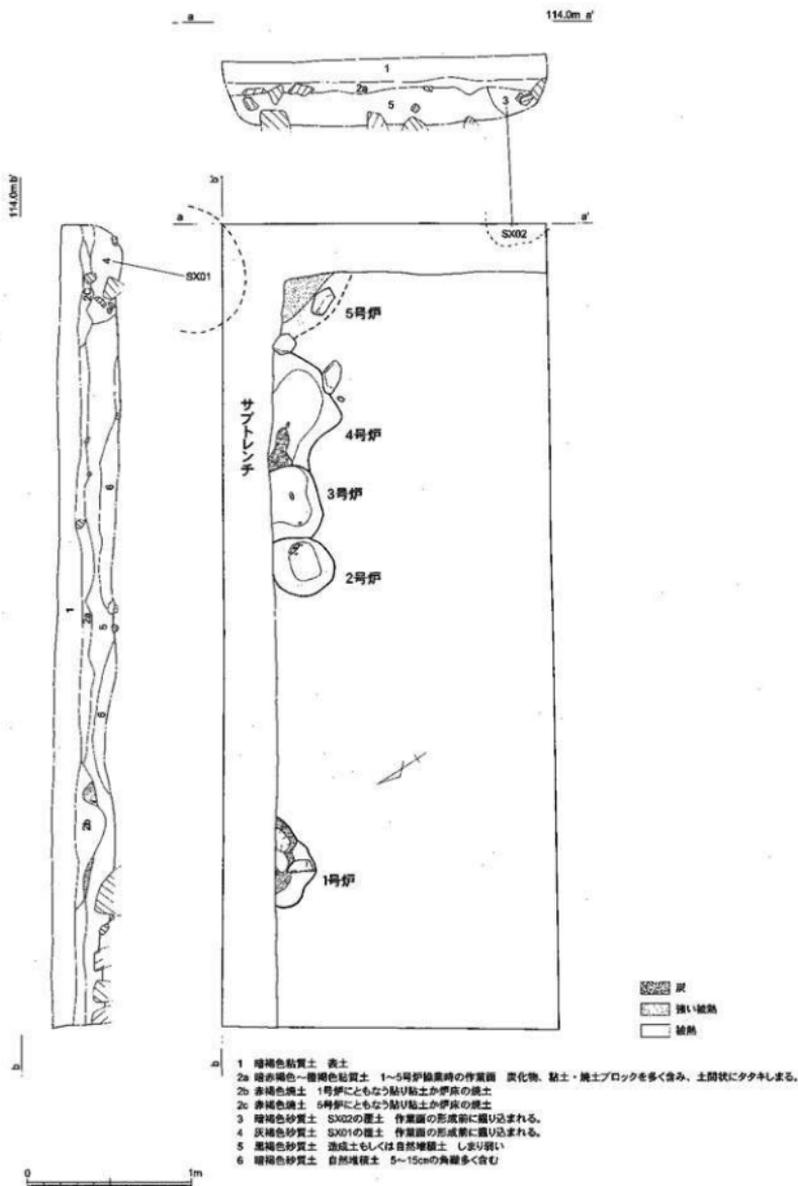
1号炉の掘形規模は、61×45cm。炉内には炭がよく残っており、炉の中心部は流入土と思われる暗赤褐色の軟らかい土砂が入っている。周りの貼り粘土は被熱が弱い。2号炉の掘形規模は、39×35cm。3号炉の掘形規模は、50×40cm（推定）である。2・3号炉は、3号炉を2号炉が切る状態である。火室内は炭がほとんど無く、暗赤～茶褐色の焼土で硬く締まっている。炉床の可能性が高い。4号炉の掘形規模は、95×65cm（推定）。4号炉は、3号炉に切られている。火室内には炭がよく残っており、3号炉との切り合い部分から中心部にかけて広がっている。炉の中心部は被熱が強く、暗赤褐色～橙褐色で硬く締まる。炉床の可能性も考えられる。5号炉は、掘形規模が100×95cm、中心部にかけて被熱が強い。

### 【3 トレンチ】

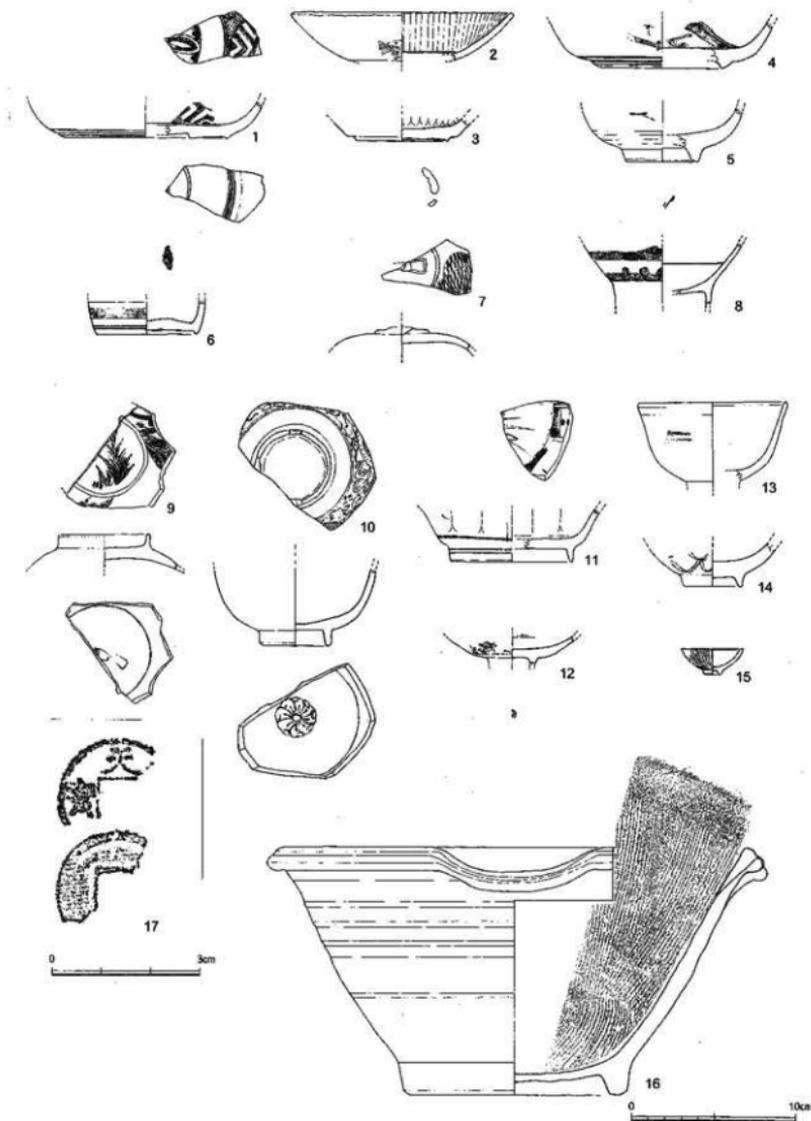
調査前の段階で石列が表土面から露出している状態であった。石列の輪郭を出したところ、平坦面のほぼ中央を東西に伸びる形であった。切石のなかには北にむかって凸部がでているものがあり建物を区切るような形になっている。他の建物に使用されていた土台を再利用した可能性が高い。この平坦面は水田跡のため、非常に水はけが悪く、掘り下げていくと水が湧いて出る状態であった。中央部を2×5mの範囲で、約20cm掘り下げると、黄茶褐色をした砂礫混じりの締まった層（水田の造成土か？）が現れる。この層の上面で精査したが、遺構を検出することはできなかった。唯一、礎石になりうるような上面が平らな石が検出されたが、それに対応するような礎石は調査区内からは検出できなかった。石列との関係は不明。また、石列は所々被熱しているところがあり、また、水抜きのためにきった溝内からは、焼けた瓦、木材、杭などがみつまっている。これらは明治15年（1882）に起きたとされる大火の痕跡である可能性も考えられ、宮本鍛冶山内跡の歴史の下限を知る上で重要な場所であると思われる。



第4図 宮本鍛冶山内遺跡 地形測量図 (S=1/2,000)・試掘調査区実測図 (S=1/80)



第5図 宮本鍛冶山内遺跡 第2トレンチ 遺構実測図 (S=1/30)



第6図 宮本鍛冶山内遺跡 トレンチ 遺物実測図 (S=1/3、銭貨は実大)

第2表 宮本鍛冶山内遺跡 陶磁器観察表

図版番号	写真 図版	出土地点	種別	器種	法量 (cm)			産地	時期	特徴	備考
					口径	器高	底径				
第6図-1	36-37	第2トレンチ付近水溝 表探	磁器	皿	-	-	(10.0)	肥前系	1750～1810年代	柘の目彫彫高台	
第6図-2	36-37	第2トレンチ付近の道 表探	磁器	皿	(13.2)	-	-	肥前系	1730～1780年代		
第6図-3	36-37	第6トレンチ付近 表探	陶器	鉢	-	-	(5.6)	美濃焼	17世紀前半		
第6図-4	36-37	第2トレンチ付近の道 表探	磁器	皿	-	-	(7.4)	肥前系	18世紀		
第6図-5	36-37	第6トレンチ付近 表探	磁器	碗	-	-	(4.4)	肥前系	18世紀	陶胎染付	
第6図-6	36-37	第7トレンチ付近 表探	磁器	そば罎口	-	-	(6.2)	肥前系	1820年代		
第6図-7	36-37	金屋子神社参道付近 表探	磁器	蓋	-	-	-	肥前系	1690～1860年代	丸文	
第6図-8	36-37	第2トレンチ付近 表探	磁器	碗	-	-	(5.2)	肥前系	1810年代頃		
第6図-9	33	第2トレンチ	磁器	蓋	-	-	-	肥前系	1780～1810年代		
第6図-10	33	第3トレンチ	磁器	碗	-	-	4.1	肥前系	19世紀		
第6図-11	33	第2トレンチ	磁器	鉢	-	-	(7.4)	肥前系	1820年代		
第6図-12	33	第2トレンチ	磁器	皿	-	-	-	肥前系	18世紀末～19世紀前		
第6図-13	33	第2トレンチ	磁器	碗	(9.0)	-	-	肥前系	18世紀		
第6図-14	33	第2トレンチ	磁器	碗	-	-	(3.6)	肥前系	1750～1770年代		
第6図-15	33	第2トレンチ	磁器	紅皿	(3.8)	(1.6)	(0.8)	肥前系	1740～1780年代		
第6図-16	34	第7トレンチ	陶器	すり鉢	28.2	15.2	12.8	不明	19世紀		
-	35-1	第2トレンチ SX02	磁器	碗	-	-	-	肥前系	18世紀	陶胎染付	
-	35-2	第2トレンチ SX02	磁器	碗	-	-	-	肥前系	18世紀後～19世紀		
-	35-3	第2トレンチ SX02	磁器	碗	-	-	-	肥前系	不明	陶胎染付か	二次的に被熱か
-	35-4	第2トレンチ SX02	陶器	碗	-	-	4.1	在地系	不明		
-	35-5	第2トレンチ SX02	磁器	皿	(12.5)	-	-	肥前系	1820～1860年代		
-	36-37-1	第2トレンチ 表土中	磁器	碗	-	-	-	肥前系	18世紀～19世紀		
-	36-37-2	第2トレンチ 表土中	磁器	皿	-	-	-	肥前系	18世紀後～19世紀		
-	36-37-3	第2トレンチ 表土中	磁器	皿	-	-	-	肥前系	18世紀～19世紀		
-	36-37-4	第7トレンチ 表土中	磁器	皿	-	-	-	肥前系	1810～1860年代		
-	36-37-5	第2トレンチ 2層	磁器	不明	-	-	-	肥前系	19世紀		
-	36-37-6	第2トレンチ 表土中	磁器	碗	-	-	-	肥前系	18世紀後		
-	36-37-7	第2トレンチ 2層	磁器	碗	-	-	-	肥前系	18世紀末～19世紀	外面青磁	
-	36-37-8	第2トレンチ 表土中	磁器	皿	-	-	-	肥前系	18世紀		
-	36-37-9	第2トレンチ 表土中	磁器	不明	-	-	-	肥前系	18世紀～19世紀		二次的に被熱
-	36-37-10	第2トレンチ 表土中	磁器	碗	-	-	-	肥前系	18世紀後～19世紀	内面底の目彫彫	
-	36-37-11	第2トレンチ 表土中	磁器	碗	-	-	-	肥前系	18世紀		
-	36-37-12	第2トレンチ 表土中	磁器	碗	-	-	-	肥前系	18世紀末～19世紀前		
-	36-37-13	第2トレンチ 表土中	磁器	鉢	-	-	-	肥前系	1820年代		
-	36-37-14	第2トレンチ 表土中	磁器	碗	-	-	-	肥前系	18世紀後～19世紀	外面青磁	
-	36-37-15	第2トレンチ 2層	磁器	皿	-	-	-	肥前系	1820～1860年代		
-	36-37-16	第2トレンチ 表土中	磁器	碗	-	-	-	肥前系	18世紀末～19世紀前	外面青磁	
-	36-37-17	第2トレンチ 表土中	磁器	そば罎口	-	-	-	肥前系	18世紀後～19世紀		二次的に被熱
-	36-37-18	第2トレンチ 表土中	磁器	そば罎口	-	-	-	肥前系	18世紀後～19世紀		
-	36-37-19	第2トレンチ 表土中	磁器	碗	-	-	-	肥前系	18世紀末～19世紀前		
-	36-37-20	第2トレンチ 表土中	磁器	そば罎口	-	-	-	肥前系	18世紀末～19世紀前		
-	36-37-21	第2トレンチ 表土中	磁器	碗?	-	-	-	肥前系	18世紀		
-	36-37-22	第2トレンチ 表土中	磁器	不明	-	-	-	肥前系	18世紀～19世紀		

図版番号	写真 図版	出土地点	種別	器種	法量 (cm)			産地	時期	特徴	備考
					口径	器高	底径				
-	36-37-23	第7トレンチ付近 表採	磁器	碗	-	-	-	肥前系	1820～1860年代		
-	36-37-24	第7トレンチ 表土中	磁器	瓶類	-	-	-	肥前系	19世紀初		
-	36-37-25	第7トレンチ 表土中	磁器	皿	-	-	-	肥前系	1820～1860年代		
-	36-37-26	第7トレンチ 表土中	磁器	碗	-	-	-	肥前系	1820～1860年代		
-	36-37-27	第7トレンチ 表土中	磁器	碗	-	-	-	肥前系	1820～1860年代		
-	36-37-28	第7トレンチ 表土中	磁器	皿	-	-	-	肥前系	1810～1860年代		
-	36-37-29	第7トレンチ 表土中	磁器	皿	-	-	-	肥前系	1810～1860年代		
-	36-37-30	第7トレンチ 表土中	磁器	皿	-	-	-	肥前系	1820～1860年代		
-	36-37-31	第7トレンチ 表土中	磁器	皿	-	-	-	肥前系	19世紀		
-	36-37-32	第7トレンチ 表土中	磁器	蓋 (9.7)	-	-	-	肥前系	19世紀		
-	36-37-33	第7トレンチ 表土中	磁器	碗	-	-	-	肥前系	1780～1810年代		
-	38-39-34	第7トレンチ付近 表採	磁器	不明	(7.9)	-	-	肥前系	18世紀	陶胎染付	
-	38-39-35	山内跡ため池付近 表採	磁器	坏	-	-	-	肥前系	18世紀後		二次的に被熱
-	38-39-36	第7トレンチ付近 表採	磁器	碗	-	-	-	肥前系	18世紀後		
-	38-39-37	第7トレンチ付近 表採	磁器	碗	-	-	-	肥前系	18世紀後		
-	38-39-38	第7トレンチ付近 表採	磁器	碗	-	-	-	肥前系	18世紀後		
-	38-39-39	第7トレンチ付近 表採	磁器	碗	-	-	-	肥前系	18世紀後		
-	38-39-40	金屋子神社参道付近 表採	磁器	皿	-	-	-	肥前系	18世紀～19世紀		
-	38-39-41	第7トレンチ付近 表採	磁器	仏飯器	-	-	-	肥前系	1780～1860年代		
-	38-39-42	第7トレンチ付近 表採	磁器	皿	-	-	(5.5)	肥前系	18世紀～19世紀初		
-	38-39-43	山内跡ため池付近 表採	磁器	碗	-	-	-	肥前系	1820～1860年代		
-	38-39-44	第2トレンチ付近の道 表採	磁器	碗	-	-	-	肥前系	18世紀後～19世紀前		
-	38-39-45	金屋子神社参道付近 表採	磁器	皿	-	-	-	肥前系	18世紀		
-	38-39-46	第2トレンチ付近の道 表採	磁器	碗	-	-	-	肥前系	18世紀		
-	38-39-47	山内跡ため池付近 表採	磁器	瓶	-	-	-	肥前系	19世紀初		
-	38-39-48	金屋子神社参道付近 表採	磁器	碗	-	-	-	肥前系	1820～1860年代	丸文	
-	38-39-49	第7トレンチ付近 表採	磁器	皿	-	-	-	肥前系	1820～1860年代		
-	38-39-50	第7トレンチ付近 表採	磁器	碗	-	-	-	肥前系	1850～1860年代		
-	38-39-51	第2トレンチ付近の道 表採	磁器	瓶	-	-	-	肥前系	19世紀初	たご唐草文	
-	38-39-52	金屋子神社参道付近 表採	磁器	香炉	-	-	-	肥前系	19世紀		
-	38-39-53	山内跡ため池付近 表採	磁器	碗	-	-	-	肥前系	19世紀		
-	38-39-54	山内跡ため池付近 表採	磁器	碗	-	-	-	肥前系	19世紀		
-	38-39-55	第6トレンチ付近 表採	磁器	瓶	-	-	-	肥前系	19世紀初		
-	38-39-56	第7トレンチ付近 表採	磁器	紅皿	(3.1)	1.4	1.0	肥前系	1840～1860年代		
-	38-39-57	山内跡ため池付近 表採	陶器	土瓶	-	-	-	在地系	19世紀		
-	38-39-58	第2トレンチ付近 表採	磁器	皿	-	-	-	肥前系	19世紀	たご唐草文	二次的に被熱
-	38-39-59	山内跡ため池付近 表採	磁器	蓋 (8.2)	-	-	-	肥前系	19世紀		二次的に被熱
-	38-39-60	山内跡ため池付近 表採	磁器	碗?	-	-	-	肥前系	19世紀		二次的に被熱
-	38-39-61	第6トレンチ付近 表採	磁器	皿	-	-	-	肥前系	19世紀		二次的に被熱
-	38-39-62	山内跡ため池付近 表採	磁器	皿	-	-	-	肥前系	19世紀		二次的に被熱
-	38-39-63	第6トレンチ付近 表採	磁器	碗	-	-	-	肥前系	19世紀		二次的に被熱
-	38-39-64	第6トレンチ付近 表採	磁器	碗	-	-	-	肥前系	19世紀		二次的に被熱
-	38-39-65	第3トレンチ付近 表採	磁器	瓶類?	-	-	-	肥前系	19世紀		二次的に被熱

第3表 宮本鍛冶山内遺跡 銭貨計測表

(単位: mm)

図版	写真図版	銭名	初铸年	銭径(A)	銭径(B)	内径(C)	内径(D)	銭厚	量目	残存率	備考
第6図	17	34 天聖元寶	北宋 1158年	-	-	-	-	1.10～1.15	0.90 g	40	

#### 【4 トレンチ】

水田跡のためか、この平坦面は非常に水はけが悪い。平坦面中央部に2×5mのトレンチを設定し掘り下げた。表土を約15cm除くと青灰色の砂礫が混じった層（水田の造成土か）が現れる。この層の上面で遺構精査したが遺構・遺物とも確認できなかった。後日、この平坦面にともなう石垣を調査したところ、石垣の積石に削岩機による加工痕が確認された。よって、この平坦面は、田儀櫻井家が官本の地を去った後に構築された平坦面である可能性が高い。

#### 【5 トレンチ】

平坦面中央部に設定したトレンチである。表土を約20cm掘り下げた段階で橙褐色の整地土を確認した。しかし調査範囲に遺構、遺物はなく、この平坦面の性格を把握することはできなかった。

#### 【6 トレンチ】

表土を約20cm掘り下げた段階で地山とおもわれる礫層を確認した。遺構は確認できなかったものの、表七層から天聖元寶（北宋銭・初鑄年1158年）の断片が1点出土した。しかし、この平坦面の性格を知る手がかりにはならなかった。ただし、トレンチ外の表採ではあるが、17世紀前半の美濃焼の破片を1点確認したので、宮本鍛冶山内跡の歴史の上限を知る上で、手がかりを得ることができる場所である可能性が高い。また、トレンチ周辺で、鉄滓を採集した。

#### 【7 トレンチ】

この平坦面は山内の石垣をもつ平坦面の中で、最も面積が大きく、約720㎡である。植林がほぼ等間隔で平坦面全域に広がっており、それを避ける形で平坦面東部に2×5mのトレンチを設定した。調査区内で、礎石状の石と、建物の土間と思われるしまった粘土面を検出した。礎石は少し乱れており、土間面もその端部を確認しただけである。建物の存在を伺わせる遺構が検出されているが、縁辺部の調査であり、今回の調査範囲内ではその規模、性格などは不明である。

#### 【小 結】

1・2トレンチにおいて、鍛冶遺構が検出されたことにより、鉄生産を立証する遺構が遺跡内に存在することが確認できた。2トレンチで確認した炉跡は、炉の形状、規模から小鍛冶炉（鍛錬鍛冶炉）である可能性が高い。しかし、どのような製品を生産したのか、現段階では不明である。

また、6・7トレンチの谷奥においても、鉄滓が確認でき、製鉄関連遺構の存在する可能性が高い。3トレンチからは、焼けた瓦、木材、杭などが出土しており、明治15年に発生したとされる火災との関連が注目される。

## 第2節 掛樋・越堂・聖谷たたら跡

### 第1項 掛樋たたら跡

出雲市多伎町奥田儀に所在する。平成17年（2005）8月から開始した発掘調査により、近世たたら  
の地下構造を検出した。掛樋たたら跡は、国史跡宮本鍛冶山内遺跡から直線距離で1.5kmと非常に近  
く、田儀櫻井家が経営したたたらである可能性が非常に高い。たたら跡は、川沿いの狭長な段丘状の  
平坦面に所在しており、段丘斜面には大規模な石垣が組まれているほか、川からたたら跡の所在する  
平坦面上がる道なども整備されており、国史跡宮本鍛冶山内遺跡から最も近い近世たたら跡である  
（第5章第1節）。調査は、平成18年3月に終了した。

### 第2項 越堂たたら跡

出雲市多伎町口田儀に所在する。平成18年（2006）4月から開始した発掘調査により、石垣に囲ま  
れた敷地内より近世たたらの地下構造を検出した。越堂たたらは、田儀櫻井家のなかでも、長期間に  
わたり操業されたたたらといわれる。『田儀村誌』には、越堂たたらの配置図が掲載されており、現  
在確認できる遺構と配置がほぼ一致している。田儀川沿いの岩を掘り込んで形成された水路や、金屋  
子神社が所在したとされる権現山など現在でもたたら操業時の面影を残している（第5章第2節）。  
調査は、平成19年1月までを要した。

### 第3項 聖谷たたら跡

出雲市多伎町奥田儀に所在する。平成18年（2006）10月から開始した発掘調査により、近世たたら  
の地下構造を検出した。聖谷たたらには、田儀櫻井家4代宗兵衛清矩の名が施主として刻まれた地藏  
が所在しており、田儀櫻井家が経営したたたら跡である可能性が非常に高い。発掘前の草刈りの段階  
で本床遺構や小舟などの一部が確認できるなど、遺存状態は非常に良好である。また、鉄池や排滓場  
も所在するほか、石垣に囲まれた製鉄関連遺構が推定される平坦面など、田儀櫻井家の近世たたら製  
鉄の様相を知ることができる（第5章第3節）。調査終了は平成19年3月である。

## 第 4 章

宮本鍛冶山内遺跡の調査

## 第4章 宮本鍛冶山内遺跡の調査

### 第1節 宮本鍛冶屋跡

#### 第1項 調査の目的

宮本鍛冶山内遺跡では平成15年度に実施された遺跡の基礎調査によって、遺構の保存状況が良好であることが確認され、平成16年度に試掘調査が実施された。試掘調査では大鍛冶場の確認、遺跡内の各平坦面の性格把握という2点を主目的とした。とくに田儀櫻井家は、本拠地宮本に大鍛冶場を設置し、これを鉄生産の核とするたたら経営を行っていたことから、宮本鍛冶屋の詳細を得ることが必要であると考えられた。

#### 第2項 調査区の位置

宮本鍛冶屋跡は、宮本川中流に位置する。宮本鍛冶山内遺跡内であって、本宅跡側から宮本橋を渡り、すぐ左側である。大鍛冶場のある平坦部は、標高が約110m、面積が約230m<sup>2</sup>である。

トレンチは、平坦面中央に東西2×5mの設定をし、1トレンチとした。平成16年度調査では、当初その他のトレンチと同じく、面積10m<sup>2</sup>で設定していたが、被熱した遺構面が確認されたため、調査区を拡張し18m<sup>2</sup>とした。その後の調査で大鍛冶炉（精錬鍛冶炉）が確認されたため、平成17年度では、さらに拡張し、最終的には31m<sup>2</sup>となった。

#### 第3項 検出遺構・出土遺物（第7～10図、図版1～3）

##### 基本層序

現地表から10～15cmに黒褐色の表土が堆積し、その直下に整地された土間面が現れる。土間面は、硬くしまったにぶい橙色の粘質土であり、所々に赤く焼けた面や炭化物がみられる。土間面の粘土は粗い質で、1～2cmの細礫を多く含むほか、約15cm大の礫も混じる。土間面の厚さは不明である。この土間面を遺構面と考え、精査・遺構検出を行った。なお、この土間面はSK01を境に東側にはみられず、3～10cmの角礫が混じった暗茶褐色土が現れる。これは平坦面構築時の造成土と思われ、整地された形跡がみられないことから、大鍛冶建物の外であると考えられる。

また、文献史料<sup>(1)</sup>によると明治15年（1882）にこの大鍛冶場からの出火が原因で宮本が大火に見舞われたとあるが、その火災の跡と思われる層は検出されなかった。

##### 1号炉・SK01

SK01は、トレンチ東側に位置する長さ約2m、幅約1.6mの土坑である。掘りきっていないため深さは不明。西半には30～50cm大の角礫が充填され、東半上面には焼土塊や炭溜りが堆積している。南西部分を掘削した際に、遺構面から深さ30～50cmにかけて強く被熱し赤化している箇所が確認された。その被熱の様子から、当箇所が炉の掘形に相当すると考えた。これが炉（1号炉）であれば、SK01によって火窟の大部分が破壊されていることになる。遺構保護の観点から、SK01は、一部しか掘らなかったため炉の規模や残存状況は不明である。また、SK01は角礫の充填の仕方などからみて、作為的に炉を破壊した土坑であると推察された。

##### 2号炉

SK01の北側に位置し、そのSK01に南部分を壊されていた。2号炉の火窟は長さ1.0m、幅0.25mの

長楕円形をしており、主軸は東西にとる。深さは0.33mで、内部は、いわゆるカーボンペットのよう  
な炭の充填はみられず、炭・焼土混じりのしまりのない土が埋土となっている。炭層は火室の底部に  
7～9mmの堆積を残すのみである。

2号炉掘形は長さ1.5m・幅0.8m、深さ0.55mである。掘形の内側には均質な粘土が貼られている。  
羽口や大鍛冶道具は残っておらず、輪座の位置、送風の方向は不明ではあるが、炉全体の被熱の仕方  
や西側に羽口の設置痕が見られないことから、東側から送風された可能性が高い。ただし、炉の東部  
はSK01によって破壊されているため断定はできない。

#### 炭溜り

SK01の東側に分布し、SK01の上面に堆積している。厚いところで10cmの堆積がみられる。性格は  
不明であるが、その分布位置や堆積状況から、1号炉あるいは2号炉からかき出された炭の溜りでは  
ないかと推定する。

#### 3号炉

3号炉は平成16年度の調査の際、調査区の西壁際で強く被熱した一部分がみえていたため、炉の可  
能性が考えられた遺構である。17年度の調査では、この炉の存在を念頭に置き、調査区を拡張して炉  
の平面プランを検出し、炉跡と確認した。3号炉の火室は、長さ0.78m、幅0.62mのほぼ楕円形である。  
主軸は、北側を頭として若干東に傾くものの、ほぼ南北にとる。掘形は長さ1.2m・幅0.9mの不  
整楕円形で、掘形内には濃橙色の均質な粘土が充填されている。粘土は部分的に赤く被熱しており、  
平面的にみると火室を囲う状態である。なお、3号炉は遺構保存のことを考え、上面検出のみにとど  
めたため断面の確認を行っていない。そのため3号炉の地下構造は不明である。輪座の位置、送風の  
方向については羽口やその設置痕などが検出されなかったため不明である。

#### SX01・SX02

SX01の規模は南北の長さ約80cm、東西の長さは調査区外のため未確認である。深さや堆積状況も  
断面を確認できなかったため不明である。掘形には3号炉掘形でも見られた濃橙色の粘土が貼られて  
おり、ところどころ剥げた部分の下からは粉炭の層が見える箇所がある。また、北側壁面が非常に強  
く被熱しており硬化している。SX02は、SX01の北東部分に重なり、南北に約130cmのびる溝状の遺  
構である。南側の窪みにはSX01と同じく濃橙色の粘土が貼り付けられている。

この2つの遺構の性格は不明であるが、SX01に関しては、その形状や掘形の粘土の貼り方などか  
ら、鍛冶炉である可能性をもつ。しかしながら、今回の調査において明確にはできなかった。

#### その他の遺構

遺構面からは、上記以外にも、大鍛冶作業に関係すると思われる被熱面や浅い窪みなどの遺構が検  
出されている。被熱面1～3は、熱をうけ赤褐色になっており硬化している。強い熱を受けているこ  
とから、何らかの高熱を帯びたものを一時的に置いた場所であると推察されるが、性格は不明である。  
窪み1～3は、どれも不整円形な深さ4～6cm程の浅い窪みである。窪み4は長さ64cm・幅47cm・深  
さ7cm隅丸方形の浅い窪みである。どの窪みも大鍛冶場内において何らかの役割を果たした可能性は  
あるが、今回の調査においてその性格を明確にすることはできなかった<sup>(2)</sup>。

## SD01

平成16年度の調査において、調査区北端で溝状遺構（SD01）が確認された。SD01は長さが東西に210cm、深さは整地面から20cmであり、底面には規則的な凹凸が残されていた。溝の西端には一箇所のみではあるが、石が据え付けられた状態で残っていたため、底面に残る凹凸は石の抜き取り痕であると判断した。残っていた石は整地面より10mほど低いところに位置し、上面は平らであった。これらのことから、この溝状遺構を石列の痕跡であるとみなし、これが建物の北辺ラインに相当すると考えた。しかし、平成17年度の拡張調査では、その続きは検出されなかった。

### 石垣（第11図、図版1）

大鍛冶場として機能していた平坦面は、宮本川の川床から約5mの高さに位置し、川に面した南側には石垣が2段状に組まれている。宮本川右岸に沿って築き上げられている基礎部分の石垣と、そこからかさ上げされるかたちで築かれたもう1段の石垣である。基礎部分の石垣上端は、宮本橋北詰から西に向けて緩やかに下っており、幅約80mの道が通っている。なお、この道の土からは粉炭や焼土ブロック、鍛造剥片・粒状滓が確認されている。また、宮本橋北詰から西に約7m、基礎部分の石垣上端より1.8m下方に暗渠があり、現在も大雨の際ここからの排水が見られる。さらに、対岸から見るとこの暗渠から西方向に一直線上の目地が走っていることが確認できる。このことから、宮本橋から西の基礎部分の石垣については、まず川から目地までの高さの石垣が築かれ、そこから現在の大鍛冶場跡の高さまで、少なくとも2度のかさ上げがあったことが推測できる。

### 出土遺物

表土中から時期・産地とも不明の陶器片が1点と遺構面から鍛冶関連遺物が出土している。

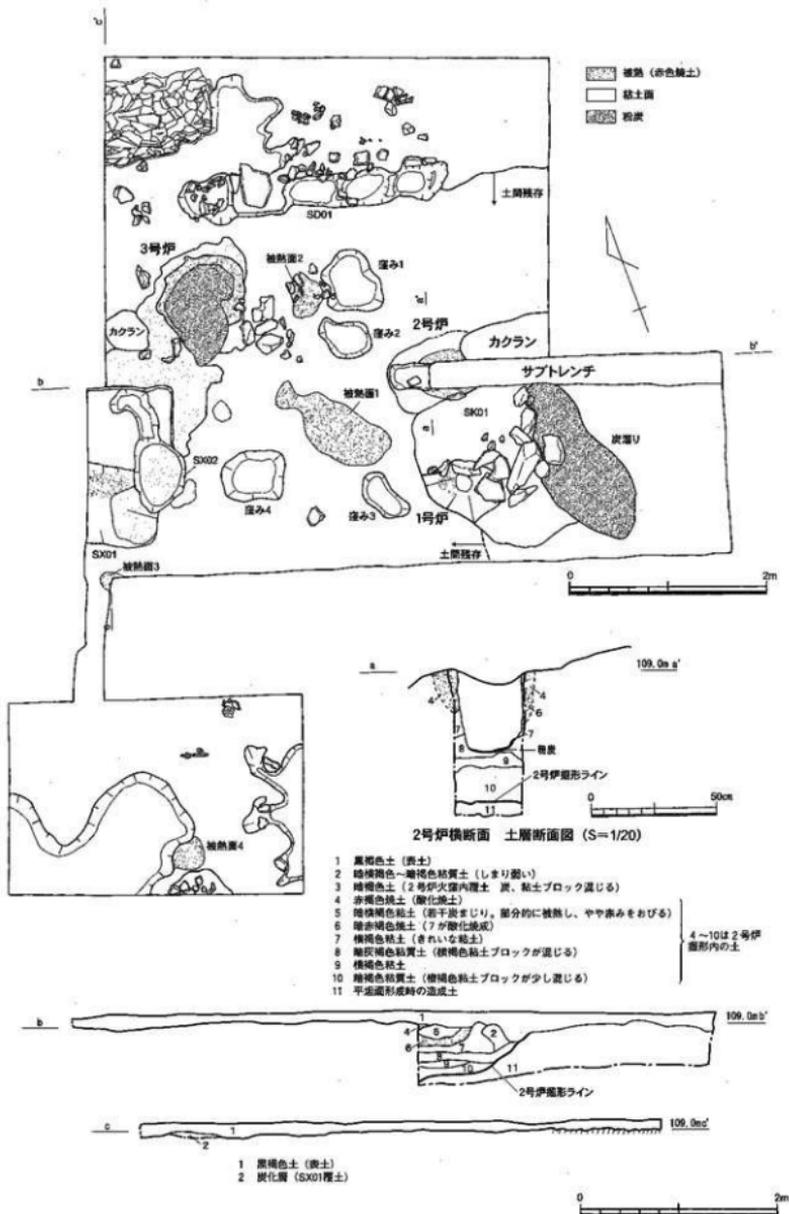
### 鍛冶関連遺物（第8～10図、第4表）

調査区内からは、鍛冶関連の遺物として鍛造剥片・粒状滓が出土した。この度の調査では当時の鍛冶作業の状況を復元するため、鍛造剥片・粒状滓の分布状況を調べることにした。調査方法は、50cmメッシュで遺構面の土を回収し、水洗い、磁石による選別、肉眼分類を通じて鍛造剥片・粒状滓を抽出し、それらの分布密度の状況から傾向をうかがうことにした。そのため、精査時にでた土を遺構面直上で全量回収する方法をとった。ただし、50cmメッシュを設定し、土を回収したのは平成17年度調査の拡張部分のみであり、平成16年度調査では、遺構ごとに土の回収を行ったため、メッシュによる分布図には反映されていないことを断っておく。

第8～10図が鍛造剥片・粒状滓の抽出作業の結果である。前述のように、平成17年度調査の拡張部分についてのみの結果であるが、鍛造剥片・粒状滓の分布に傾向をみる事ができる。第8図は鍛造剥片・粒状滓の合計出土量を表したものであるが、これをみると調査区東北部のP-9・10、O-9・10また、東南部のD-4・5、C-4・5で多く出土していることがわかる。

「基本層序」でも述べたように、東北部には整地された粘土面がみられず、造成土と思われる角礫混じりの暗茶褐色土が露出していた。そのため、この辺りは建物外もしくは作業場の外であったと考えた。

今回の調査区内での遺構配置から考えると、東北部は1～3号炉が位置する中心部から外れており、ここで鍛冶作業が行われていたとは考えにくい。しかし、その出土量の多さからすると、作業場内の清掃された土がこの部分に排出されたという可能性がある。また、鍛造剥片・粒状滓の分布が反対側の西北部にほとんどみられず、東北部に集中していることから、人の出入りに伴って鍛造剥片・粒状滓が運ばれた、つまりこちら側に建物の出入り口があった可能性も考えることができる。

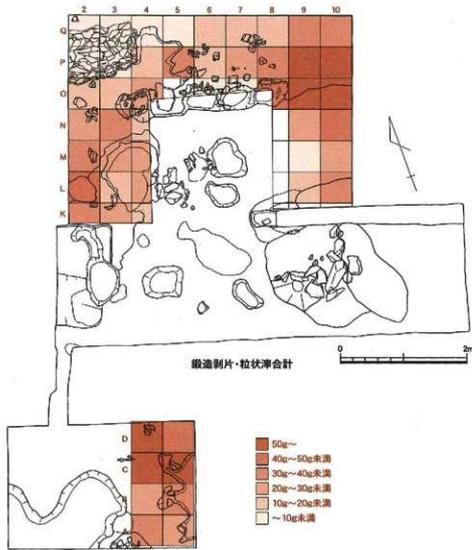


第7図 宮本鍛冶屋跡 遺構実測図 (S=1/50)

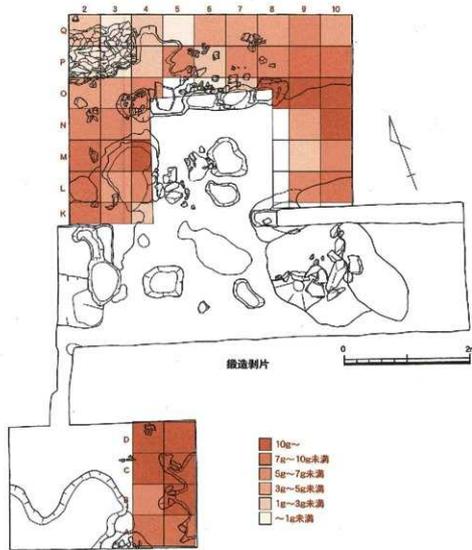
第4表 宮本鍛冶屋跡 粒状滓・鍛造剥片出土地点別重量一覧表

出土位置	鍛造剥片 (g)		粒状滓 (g)		鍛造剥片・粒状滓合計 (g)	その他の微小遺物 (g)		合計 (g)	
	~2.0mm(小)	2.0mm以上(大)	~1.0mm(小)	1.0mm以上(大)		微小遺物 (g)	合計 (g)		
A-4	5.75	4.52	10.27	13.51	17.12	30.73	41.00	730.82	771.82
A-5	7.85	1.73	9.58	6.75	7.27	14.02	23.69	615.38	639.98
B-4	4.18	1.67	5.85	9.47	9.39	19.86	24.71	478.99	503.70
B-5	7.09	3.83	10.92	10.67	16.50	27.17	38.09	841.39	879.48
C-4	8.05	16.44	23.76	23.76	19.57	43.33	59.77	1212.79	1272.56
C-5	11.26	15.30	27.16	22.38	22.49	44.87	72.03	1319.14	1391.17
D-4	6.98	3.93	10.91	24.88	20.39	45.27	56.18	928.78	984.96
D-5	7.97	4.32	12.29	16.41	16.96	33.37	45.66	1707.69	1753.35
K-2	5.78	1.76	7.54	16.36	13.86	30.22	37.76	508.24	546.00
K-3	3.57	3.19	6.76	6.60	8.43	15.03	21.79	446.22	468.01
K-4	1.06	0.90	1.96	5.35	4.46	9.81	11.77	131.25	143.02
L-2	5.91	2.30	8.21	23.22	12.35	35.57	43.78	639.13	682.91
L-3	3.15	1.72	4.87	1.06	10.45	11.51	16.38	344.33	360.71
L-4	4.07	2.24	6.31	8.28	8.71	16.99	23.30	449.11	472.41
L-8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
L-9	2.59	2.63	5.22	4.52	6.74	11.26	16.48	556.40	572.88
L-10	4.80	2.68	7.48	11.32	11.30	22.62	30.10	367.55	397.65
M-2	8.28	1.67	9.95	14.14	11.24	25.38	39.33	368.78	408.11
M-3	4.16	5.96	10.12	16.71	7.09	23.80	29.76	348.93	378.69
M-4	7.85	2.32	10.17	6.70	9.10	15.80	25.97	419.55	445.52
M-8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M-9	1.11	0.86	1.97	3.03	3.88	6.91	8.88	167.67	176.55
M-10	3.76	2.30	6.06	6.17	10.67	16.84	22.90	401.74	424.64
N-2	5.53	1.16	6.68	9.89	6.69	16.67	23.35	442.82	466.17
N-3	5.15	1.02	6.17	15.23	8.73	23.96	30.13	424.33	454.46
N-4	2.63	0.86	3.49	9.68	6.79	16.47	19.96	253.79	273.75
N-8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
N-9	3.17	1.43	4.60	8.30	8.18	16.48	21.08	348.37	369.45

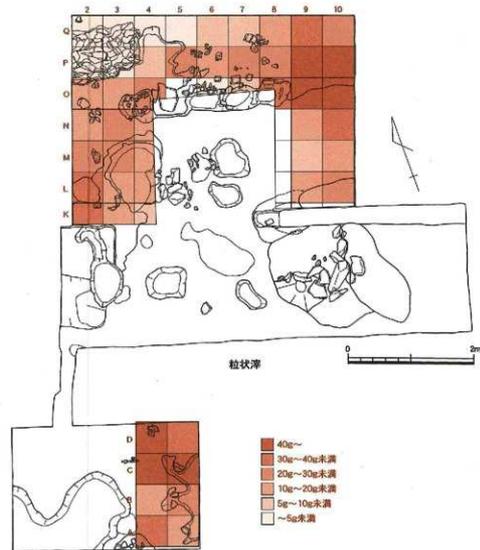
出土位置	鍛造剥片 (g)		粒状滓 (g)		鍛造剥片・粒状滓合計 (g)	その他の微小遺物 (g)		合計 (g)	
	~2.0mm(小)	2.0mm以上(大)	~1.0mm(小)	1.0mm以上(大)		微小遺物 (g)	合計 (g)		
N-10	7.27	2.79	10.06	15.27	15.24	30.51	40.57	438.67	479.24
O-2	2.66	1.08	3.74	6.14	6.85	12.99	16.73	35.04	367.77
O-3	0.47	0.45	0.75	3.20	5.88	6.75	12.63	15.83	504.09
O-4	4.15	1.62	5.77	9.90	13.04	22.94	28.71	605.84	634.55
O-5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
O-6	0.11	0.01	0.12	0.65	0.38	1.03	1.15	12.10	13.25
O-7	1.18	0.57	1.75	2.02	3.14	5.19	6.94	88.82	75.76
O-8	8.57	1.63	10.20	17.05	18.50	35.52	45.72	439.64	485.36
O-9	7.89	3.39	11.28	19.83	20.79	40.62	51.90	652.07	703.97
O-10	7.35	4.11	11.46	19.07	33.74	52.81	64.27	885.76	950.03
P-2	0.26	0.10	0.36	0.47	0.37	0.84	1.20	25.92	28.12
P-3	0.45	0.38	0.83	0.95	0.54	1.49	2.32	129.92	132.24
P-4	0.62	1.43	2.05	2.68	6.85	9.45	11.50	499.56	511.06
P-5	3.43	1.84	5.27	9.94	15.19	25.13	30.40	1099.06	1129.46
P-6	1.90	0.91	2.81	5.32	5.60	10.92	13.73	497.63	510.76
P-7	4.97	1.19	6.16	14.43	9.03	24.66	29.62	559.00	588.62
P-8	4.90	1.60	6.50	13.60	15.76	29.36	35.86	612.05	647.91
P-9	4.18	3.53	7.71	14.89	29.38	44.27	51.98	717.15	789.13
P-10	6.90	3.47	9.47	23.28	31.88	55.16	64.63	861.17	925.80
Q-2	0.63	1.78	2.41	0.58	1.17	1.73	4.14	29.81	33.05
Q-3	0.25	0.44	0.69	0.78	1.20	1.98	2.67	99.93	102.60
Q-4	2.21	0.52	2.73	1.62	2.43	4.05	6.78	244.61	251.39
Q-5	0.20	0.23	0.43	0.81	1.21	2.02	2.45	79.50	81.95
Q-6	2.94	1.71	4.65	2.07	5.11	7.18	11.63	737.17	748.00
Q-7	1.89	1.22	3.11	2.77	4.23	7.00	10.11	658.04	668.15
Q-8	2.90	0.89	3.79	4.27	5.77	10.04	13.83	40.05	53.88
Q-9	3.99	2.65	6.64	11.37	21.43	32.80	39.44	966.05	1005.49
Q-10	2.90	1.86	4.76	12.42	12.87	25.29	30.05	952.98	982.91



第8図 宮本鍛冶屋跡 粒状滓・鍛造剥片 分布図 (1) (S=1/60)



第9図 宮本鍛冶屋跡 粒状滓・鍛造剥片 分布図 (2)



第10図 宮本鍛冶屋跡 粒状滓・鍛造剥片 分布図 (3)

第5表 宮本鍛冶屋跡陶磁器観察表

番号	図版	出土地点	種別	器種	法量(cm)			産地	時期	特徴	備考
					口徑	器高	底徑				
-	34-1	表土中	陶器	不明	-	-	-	不明	不明		

#### 第4項 小 結

##### 大鍛冶遺構

近世の大鍛冶場では、たたら場でできた鉄をもう一度加熱し、脱炭して包丁鉄・割鉄と呼ばれる鉄素材を製造していた。大鍛冶場には通常「本場」と「左下場」と呼ばれる2基の鍛冶炉があり、左下場では、「火窟」＝炉と吹差輪を使い加熱することで、銑を半溶解状態し脱炭して左下鉄をつくった。次に本場で左下鉄を加熱し、除滓や炭素量の調節を行い、鉄床で鍛打して包丁鉄・割鉄に仕上げたとされる。

今回の調査では、確実に大鍛冶の炉が2基（2・3号炉）、可能性の高いものが1基（1号炉）確認できた。2・3号炉については、互いが近くに位置し、それぞれの軸が直交する関係にある。規模は2号炉が3号炉に比べ若干大きい。前述のように、近世の大鍛冶場では、「本場」「左下場」の2基の炉がセットになることが多く、本場と左下場は、軸が直交して位置する（一軒丁場直交配置）場合と平行して位置する（一軒丁場対向配置）場合がある。このことから一つの可能性として、2・3号炉がセット関係になることが考えられる（1号炉については、部分的な掘削による確認のため、その全容は明らかではない）。

1号炉とその他の遺構との関係は、1号炉がSK01によって破壊されているため明確ではない。隣接する2号炉も同じくSK01によって壊されているため、2つの炉の前後関係を明確にすることはできなかった。よって考えられる1・2号炉、SK01、炭溜りの前後関係は、①2号炉→1号炉→SK01による破壊→1号炉からの掻きだして炭溜り、②1号炉→2号炉→SK01による破壊→2号炉からの掻きだして炭溜り、の2通りである。

SX01については、これが仮に大鍛冶炉であれば位置的に2号炉、もしくは1号炉と「一軒丁場対向配置」の関係にあるとしてそれぞれのセット関係について考える必要がある。しかし、今回の調査ではSX01をすべて検出するには至らなかったため、今後の調査の課題としたい。

##### 操業年代

調査区からは、年代を特定できる考古遺物は出土していない。3号炉においては、自然科学的的年代測定（第6章第1・2節参照）を実施している。それぞれの結果は次のとおりである。

地磁気年代：AD1850±60、放射性炭素年代：yrBP157±21

地磁気年代についてみると、年代誤差は±60年とその幅は大きい。明治15年に大火があったことと表土直下という堆積状況から考えると、現段階の遺構面が最終操業面にあたるものとおもわれる。初期の操業面については、断面の確認を行わなかったため不明である。しかし、川側の石垣が段階的に構築されていたことや暗渠の存在、また川沿い南側の道の面で焼土ブロックや鍛冶関連の微細遺物等が検出されていることなどからあわせ考えると、大鍛冶の操業面も石垣と同様に段階的に作られ、何度もつくりかえたのではないかと推定される。

##### 建物範囲

建物規模は、調査区内から柱穴跡などが見られなかったことから、調査区全体を含んでさらに広いものと推定される。また、上屋建物の規模を測るうえで唯一の遺構といえるのがSD01である。平成

16年度調査でSD01の一部が検出された際、これを北辺のラインとして建物の規模を確定できることを期待したが、平成17年度の調査では、SD01に関連する遺構は検出されなかった。ただし、SD01を境に北側では、地山である岩盤が露出しており、南側では整地された面が広がることから、これが建物において何らかの区画を示すものである可能性は高い。建物東辺と西辺のラインは調査区外にあると考えられ推定できないが、南辺は、調査区南壁の南90cmで石垣ラインに達することから、その間にあると思われる。

#### おわりに

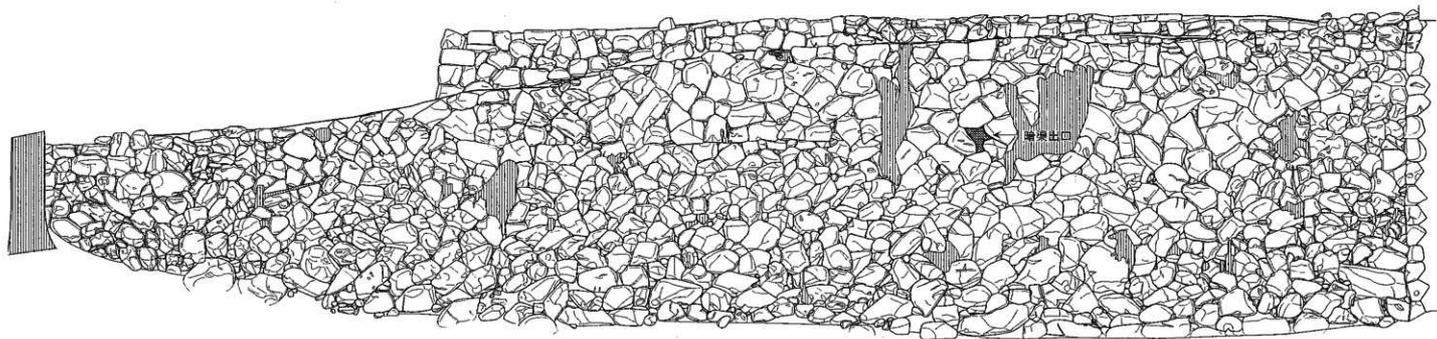
宮本鍛冶屋跡は田儀櫻井家の鍛冶関連遺跡としては、初めて発掘調査が行われた遺跡である。この度の調査では、これまで文献史料や言い伝えのなかでしか確認されていなかった大鍛冶場の存在を考古学的に確認することができ、当初の目的を果たすことができた。これにより、田儀櫻井家の経営した鍛冶屋の性格の一端を明らかにすることができたといえる。またさらに細部については調査すべきところはあるが、遺構の保存・活用のことを考え、今回の調査は最低限度にとどめたことを断っておきたい。

#### 註

- (1) 多伎村役場『田儀村誌』1961年
- (2) 窪み4については、底面に据え付け痕のような凸凹があり、1～3号炉からの位置や窪みの規模から、今回調査区内から検出されなかった鉄床が据え付けられていた可能性がある。

#### 参考文献

- 河瀬正利 『たたら吹製鉄の技術と構造の考古学的研究』 淡水社、1995年  
島根県教育委員会 『殿淵山遺跡・獅子谷遺跡』 志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書15、2002年  
多伎町教育委員会 『田儀櫻井家のたたら製鉄に関する基礎調査報告書』 2004年  
依 國一 『古来の砂鉄製錬法』 1933年（館充『復刻解説版 古来の砂鉄製錬法』 慶有社、2007年に所収）



191.90

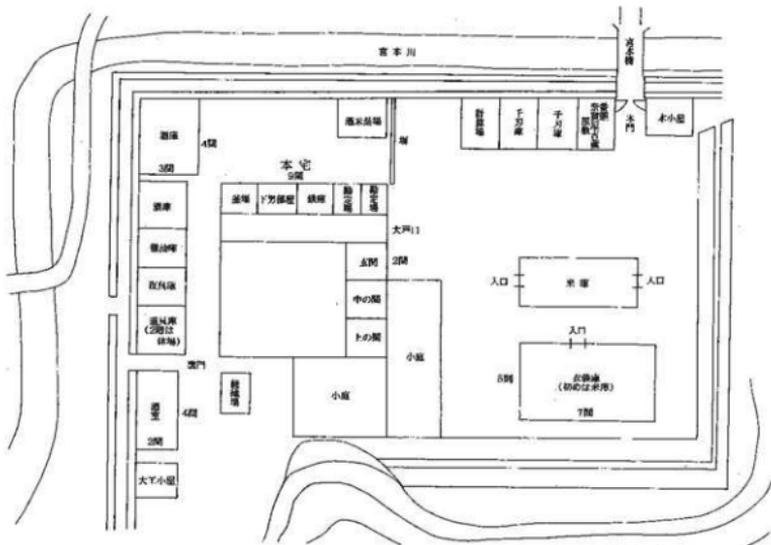


第11図 宮本鍛冶屋跡石垣実測図 (S=1/60)

## 第2節 田儀櫻井家本宅跡

### 第1項 調査の目的

田儀櫻井家の本宅が所在したとされる平坦面については、現況において周辺の石垣群、整地された平坦面、礎石などが露出している箇所があるものの、田儀櫻井家に関連する遺構であるかどうかは不明瞭であり、平坦面の造成時期なども不明の状況であった。田儀櫻井家本宅について窺い知ることのできる資料としては、田儀櫻井家の本宅配置図（第12図）である。この資料は、古老の言い伝えをもとに、渡辺勝治氏が作成、紹介されたものである<sup>(1)</sup>。図面には、本宅が正方形の平面プランで描かれており、この図が建物の平面形態まで正確に書かれているとは、考えにくいものの、唯一の手掛かりであることから、この配置図を参考とし、本宅に関連する遺構の残存状況を確認することを第一の目的とした。平坦面の総面積は約3,000㎡である。ここに、幅1.5mの細長いトレンチを4本設定した。1・2トレンチは、配置図を基に本宅建物跡に関係する遺構検出が可能と考えられる部分であり、トレンチが南北・東西に交差するように設定した。3トレンチは、平坦面東部における遺構の状況および層序、4トレンチは、平坦面北部、宮本川に近い部分までの遺構面の広がりを確認すること、を各々の目的として設定した。また、宮本鍛冶山内遺跡内での遺構の変遷を考察しうる資料を得ることも目ざした。



第12図 田儀櫻井家本宅跡 建物配置推定図

## 第2項 調査区的位置

宮本鍛冶山内遺跡の中央部、標高約110mの宮本川左岸に、東西約70m、南北約40mの長方形の隅に張出部を設けた平坦面が現存している。東辺と南辺の大部分では、最高、約15mに達する崖面に5段の石垣（第19図）、また北及び西側では宮本川に面した崖に2段の石垣を組み上げている。また、平坦部南部中央には、田儀櫻井家関連の遺物と考えられる手水鉢（凝灰岩質安山岩製）が欠損状態で、現地表面に残されている。他に地表面で観察できる遺構としては、平坦面北部や西部に集中している礎石があるが、昭和期の建物のものである可能性が高い。また平坦部南東部には、赤瓦が散在しているが、これも昭和期の瓦である可能性が高い。

明治23年（1890）の田儀櫻井家廃業以降においても、住宅が建てられていた。大正期には、本宅中央部を東西に貫く道路があり、7戸の住宅と1つの蔵が建てられていた。また、昭和期においても住宅があったことは、元住民への聞き取り調査<sup>(2)</sup>により判明している。現況でも、平坦面北西隅には昭和期の廃屋1軒が朽ちかかっており、ここにはまた、針葉樹が全面に植林されるなど、明治期の廃業後も大正、昭和にわたって地形が改変されている可能性が考えられた。

発掘調査面積は平成17年度に1～4トレンチの77㎡、さらに18年度には、1トレンチ南部・2トレンチ西部に位置する28㎡（4m×7m）を調査した。発掘調査総面積は105㎡であった。

## 第3項 検出遺構・出土遺物

1～4トレンチ及び拡張区において確認された遺構についてトレンチごとに報告する。

### 1トレンチ（第13～15図、図版5～7）

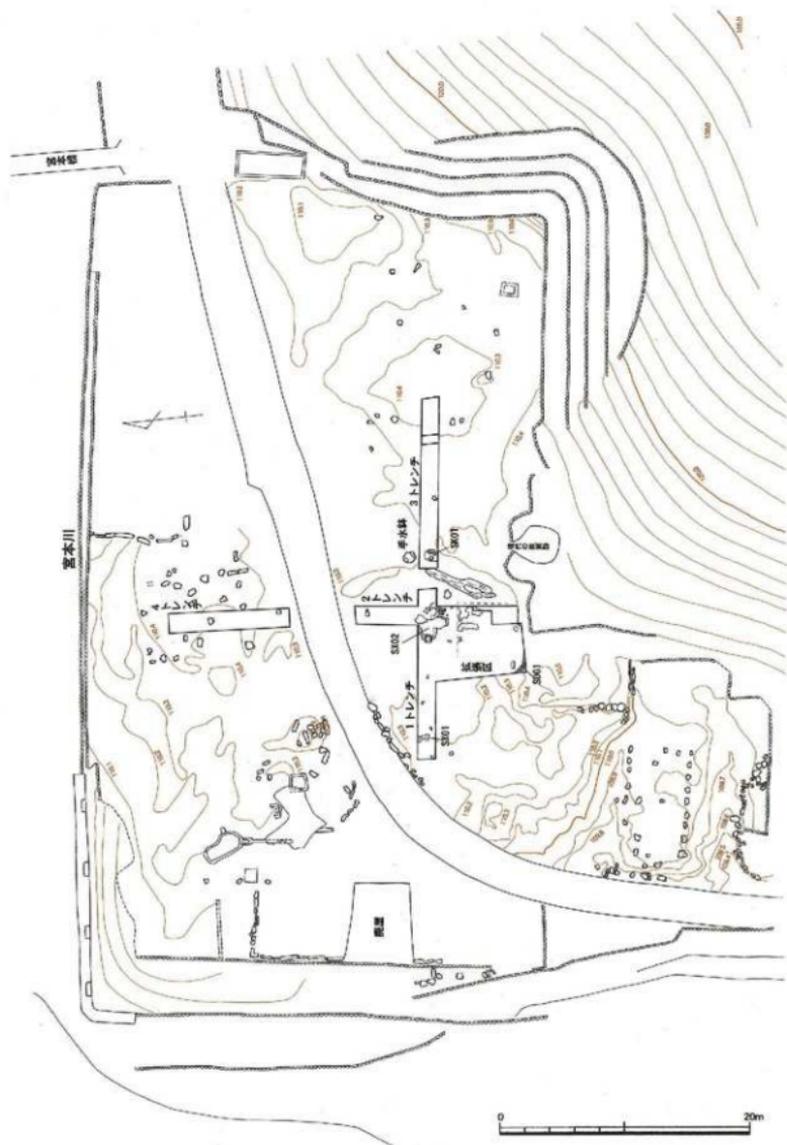
1トレンチは、21㎡（東西14m×南北幅1.5m）の調査区である。15～20cm程度の表土を除去した段階で褐色土の安定した遺構面を確認した。大部分は、後世の削平により不明瞭であるが、1トレンチの西部においては、南北幅90cm、東西幅45cmの黄褐色粘土の貼り付け面を確認した（SX01）。貼り付け面の東端は、南北に直線状をなしている。建物の区画を示すものであろうか。

また、1トレンチ西側においては、上面が平滑な河原石とそれを囲む明褐色土の粘土面、さらに粘土面上面に白色細砂と小粒玉石を化粧した遺構を確認した（SX02）。規模は、明確な範囲が南北2.5m×東西3.0mである。河原石は、東西60cm、南北54cmの楕円形の石である。平滑な部分を上面にして使っている。白色の化粧部分と、河原石上面の平滑な部分との比高は、12cm程度である。遺構保護を考え、断面確認は行っていないため、粘土面厚み、石の埋め込みの深さなどは不明である。SX02の西端部も、SX01東端と同様に貼り付け面が南北に直線状をなしている。両遺構間の距離は、約7.4mである。性格については、不明といわざるを得ないが、建物周辺の上間面部分ではないかと推測される。

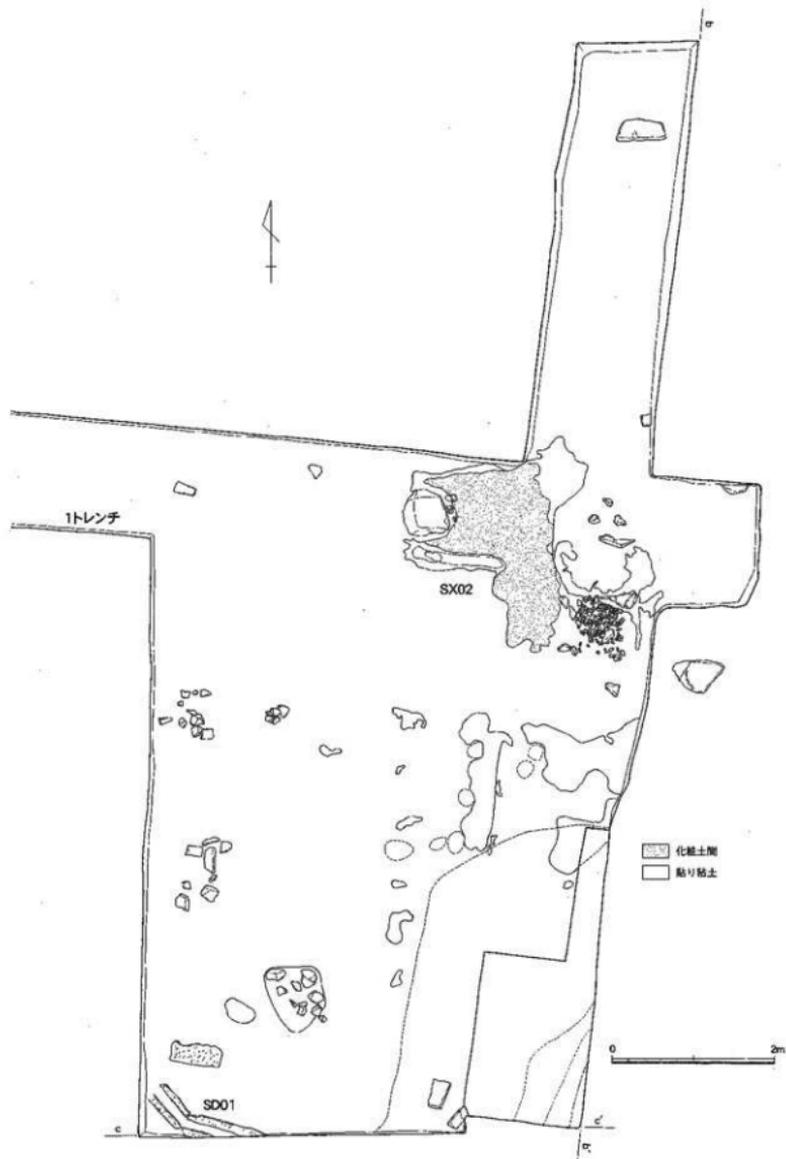
### 1トレンチ拡張区（第14図、図版6）

平成17年度において確認したSX02遺構の広がりを確認するために1トレンチ南側（2トレンチ西側）に28㎡（東西4m×南北7m）の拡張区を設定した。

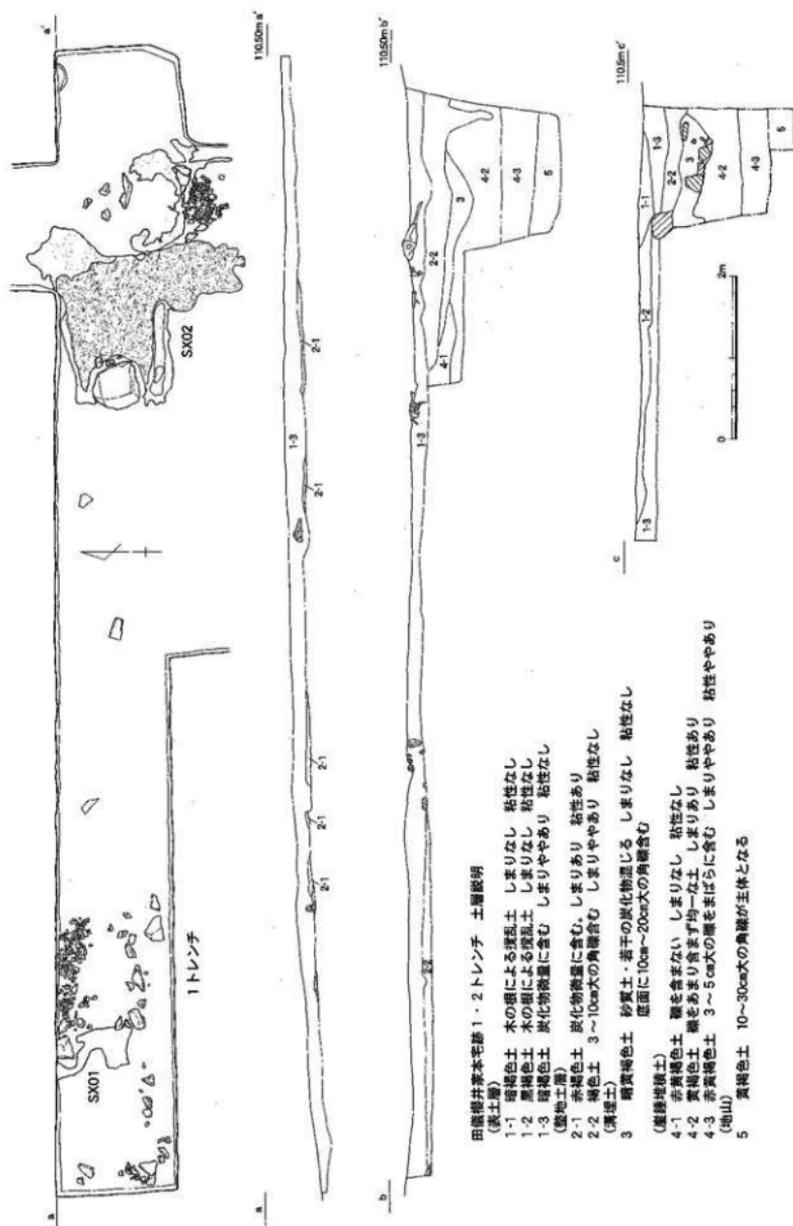
SX02遺構の規模を明確にすることを目的としたが、遺構面は削平を受けており明確な広がりを確認することはできなかった。しかしながら、長方形の石（福光石）を内法10cm・深さ8cmの溝状に成



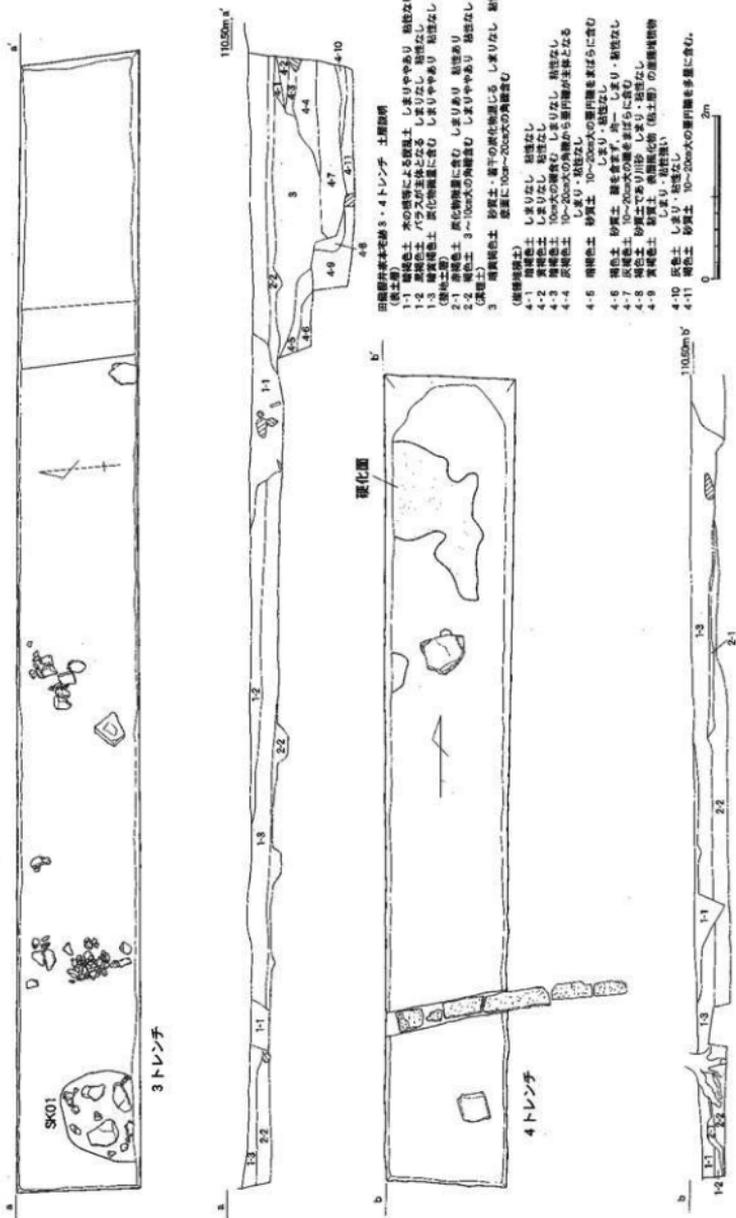
第13図 田儀櫻井家本宅跡 調査区設定図 (S=1/400)



第14図 田儀櫻井家本宅跡 遺構実測図(1) (S=1/60)



第15図 田橋樓井家本宅跡 遺構実測図(2) (S=1/60)



第16図 田儀櫻井家本穴跡 遺構実測図(3) (S=1/60)

形して、配石した小規模な排水路の一部を確認した (SD01)。排水の方向は、SD01がほぼ水平に設置されているため不明であるが、南側に本宅背面の山があることから、南東から北西方向への流れが考えられる。また、SD01の北側約50cm位置に、南北60cm・東西幅20cmの上面が平滑な石が検出されている。1ヶ所のみを検出であり、性格は明らかではないが、本宅を区画するものではなからうか。

拡張区南側において、SD01が検出されたことにより、本宅建物南辺を推定する資料を得た。

## 2 トレンチ (第14図、図版7)

2 トレンチは、1 トレンチと交差する約20m<sup>2</sup> (南北13.3m×東西幅1.5m) の調査区である。12cm～30cmの表土を除去した段階で遺構面を検出している。遺構は、1 トレンチと交差する部分で検出したSX02のみである。

2 トレンチ南端部において、サブトレンチを設定し、遺構面以下の層序を確認した。遺構面下層には、20cm程度の整地層、自然流路の痕跡、炭錐堆積層と続いており、下層において、より古い遺構面が存在する可能性は低いと考えられる。

## 3 トレンチ (第16図、図版8)

3 トレンチは、平坦面中央やや東南部の21m<sup>2</sup> (東西14m×南北幅1.5m) の調査区である。表土層 (多量のバラスを含む) を除去した段階で、炭化物を多量に含む層が確認されたため、明治15年の火災時の遺構面を想定し、慎重に調査を行ったが、炭化物層から昭和30年の10円硬貨やコンクリート破片が出土するなど、昭和期の火災痕跡であることが確認されたため、下層遺構面まで掘下げた。3 トレンチにおいても、遺構面は削平を受けており、残存状況は、良好ではなかったが、3 トレンチ西側において、東西110cm・南北80cm (検出分) の不整形円プランの遺構を確認した (SK01)。完掘はしていないため、深さは不明であるが、上面が平滑な石3点が中央部に向かって傾斜しており、礎石などを据え付ける遺構ではなからうか。

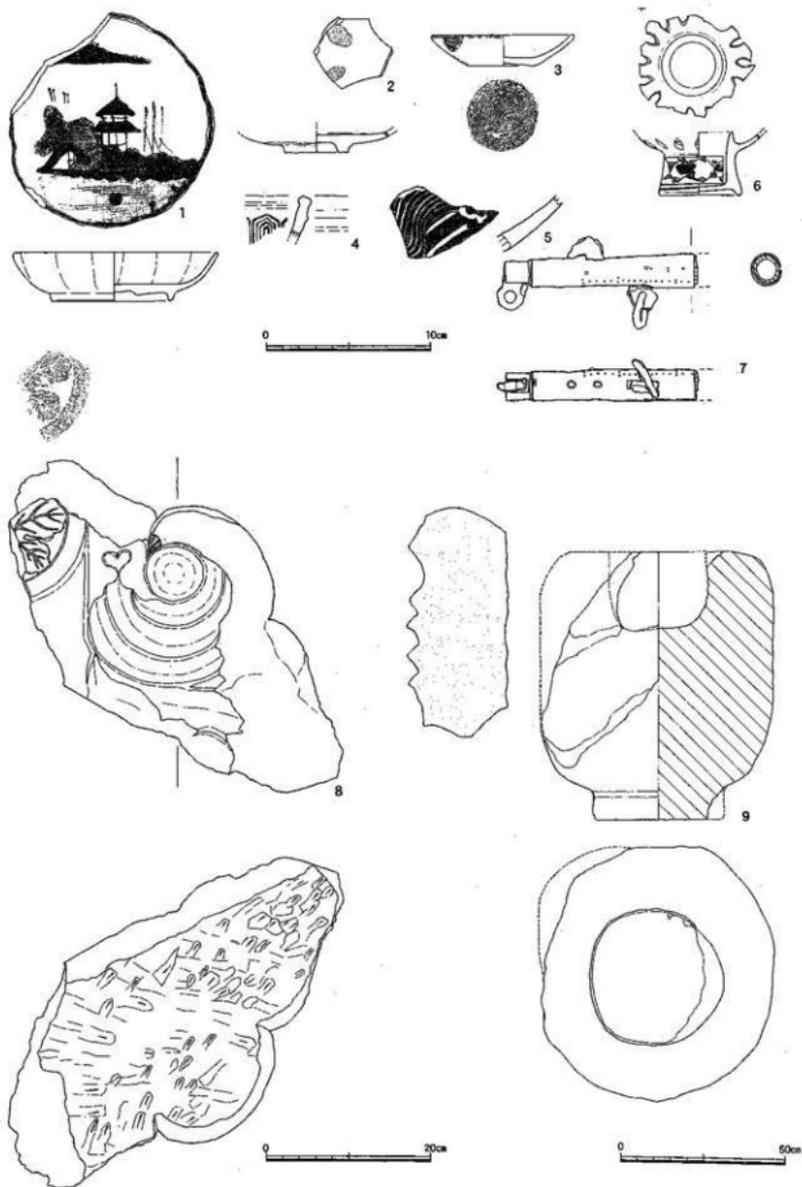
3 トレンチ東端部において、サブトレンチを設定し、下層の層序を確認している。遺構面下層には、自然流路の痕跡、礫を含まない粒子の細かい粘土層 (山の尾根にある風化物層の流れ込み)、炭錐堆積層と続いており、下層において、より古い遺構面が存在する可能性は低いと考えられる。

## 4 トレンチ (第16図、図版9)

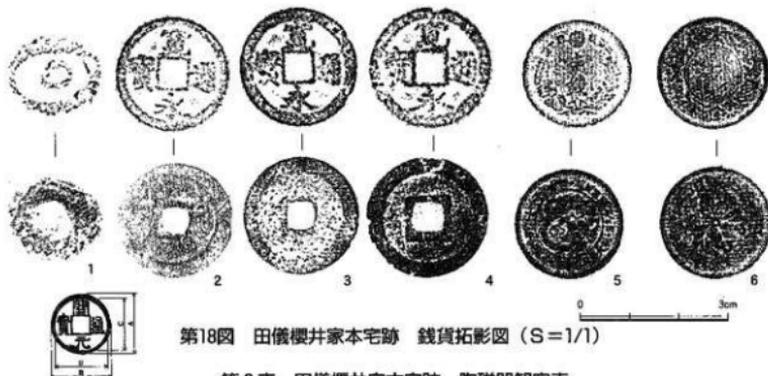
4 トレンチは、平坦面北側の15m<sup>2</sup> (南北10m×東西幅1.5m) の調査区である。昭和期に住宅が建てられており、表面観察においても、礎石など建物の痕跡が残されている。削平を受けているようであり、部分的にしか遺構面が確認できなかった。調査区北側において、約2mの範囲で遺構面と考えられる硬化面が残る他、その南40cmに50×50cmの楕円形石、また、南側でも30×30cmの方形石が出土しているが、用途は不明である。なお、面的には確認できなかったが、調査区西壁南端の土層観察によると、遺構面が段状になるところがある。すなわち、南から北に18cm程度の段差が確認できた。南に下がった部分は、1 トレンチのSX02検出面と標高がほぼ同じである。あるいは、土間面部分に続く段差とも考えられる。

## 出土遺物 (第17・18図、図版40～42)

陶磁器は、14点と少量である。1は、肥前系磁器の皿で、高台部分は蛇の目円形高台である。製作



第17図 田儀櫻井家本宅跡 遺物実測図 (1~7:S=1/3、8:S=1/6、9:S=1/15)



第18図 田儀櫻井家本宅跡 銭貨拓影図 (S=1/1)

第6表 田儀櫻井家本宅跡 陶磁器観察表

挿図番号	図版	出土地点	種別	器種	法量(cm)		産地	時期	特徴	備考
					口径	底径				
第17図-1	40	本宅北側表採	磁器	皿	12.6	3.0	7.2	肥前系	1820~1860年代	蛇の目門彫高台
第17図-2	40	第2トレンチ 第1遺構面	磁器	皿	-	-	(4.0)	肥前系	1610~1630年代	砂目積み
第17図-3	40	第2トレンチ 南サブトレ	陶器	皿	8.8	1.9	4.2	在地系	19世紀代からある	回転糸切り
第17図-4	40	第2トレンチ 南サブトレ	陶器	鉢	-	-	-	唐津系	18世紀前半	象嵌(三鳥子)
第17図-5	40	第2トレンチ 第1遺構面	陶器	鉢	-	-	-	唐津系	1750年頃	二形唐津
第17図-6	40	本宅北側表採	磁器	短冊	-	-	5.0	肥前系	不明	
-	41-1	第3トレンチ 表土中	磁器	碗?	-	-	-	肥前系	18世紀	陶胎染付
-	41-2	第4トレンチ 表土中	磁器	不明	-	-	-	肥前系	17世紀末~18世紀初	陶胎染付
-	41-3	第2トレンチ 表土中	磁器	不明	-	-	-	肥前系	18世紀	色絵
-	41-4	第4トレンチ 表土中	磁器	不明	-	-	-	不明	18世紀	
-	41-5	第4トレンチ 表土中	磁器	不明	-	-	-	不明	18世紀末~19世紀	
-	41-6	第2トレンチ 表土中	磁器	碗	-	-	-	不明	不明	
-	41-7	第2トレンチ 第1遺構面	陶器	不明	-	-	-	唐津系	17世紀後半~18世紀前半	
-	41-8	第2トレンチ 第1遺構面	磁器	瓶	-	-	-	不明	18世紀前半	
-	41-9	第1トレンチ 表土中	磁器	人形	-	-	-	不明	18世紀前半	

第7表 田儀櫻井家本宅跡 金属製品観察表

挿図番号	図版	出土地点	種別	器種	法量(cm)		重量(g)	特徴	備考
					長さ	厚さ			
第17図-7	41	平垣面南西張り出し部 追跡東側壁面 清掃時	金属製品	天秤棒?	11.9	0.4	-	92.21	

第8表 田儀櫻井家本宅跡 石製品観察表

挿図番号	写真 図版	出土地点	種別	器種	法量(cm)		重量(kg)	石材	特徴	備考
					長さ	幅				
第17図-8	42	背面石垣上り口 表採	石製品	棟石	52.7	28.2	12.1	17.7	凝灰岩 (福光石か)	櫻井家家紋「丸に立ち梶 の葉」が刻まれている
第17図-9	9-2-3	第13図参照	石製品	手鉢	82.5	71	(直径)	-	凝灰岩安山石	

第9表 田儀櫻井家本宅跡 銭貨計測表

(単位: mm)

挿図	図版	銭貨名	初铸年	銭径(A)	銭径(B)	内径(C)	内径(D)	銭厚	量目	残存率	備考
第18図-1	42	雁首銭						2.00~2.60	2.40 g	100	
第18図-2	42	寛永通寶(古寛永)	1636年	23.65	25.25	19.85	18.80	1.35~1.60	3.60 g	100	
第18図-3	42	寛永通寶(古寛永)	1636年	24.25	24.20	19.30	19.90	1.20~1.40	3.10 g	100	
第18図-4	42	寛永通寶(古寛永)	1636年	24.70	24.75	19.85	19.60	1.15~1.30	3.03 g	100	
第18図-5	42	半銭	明治17年(1884)	22.20	22.20	21.10	21.00	1.20~1.30	3.35 g	100	
第18図-6	42	一銭	大正	23.10	22.21	21.50	21.50	1.20~1.30	3.50 g	100	

年代1820～1860年。2は、見込み部分に砂目積み痕がのこることから、1610～1630年の製作年代が与えられようか。3は、底面回転承切り痕が残る。在地系。4は、肥前系陶器の鉢。黒い地（鉄釉）に白い文様を施した象嵌（三鳥手）のものである。18世紀前半。5は、二彩唐津である。製作年代は1750年ごろか。6は、天目台であろうか。7は、周辺の道路壁面精査時出土のものであるが、天秤はかりの一部分と思われる。木質部分はすでに欠損している。8は、本宅後背部の石垣清掃時に確認した鬼板である。福光石製であり、丁寧な仕上げである。中央部分には、田儀櫻井家の家紋（丸に立ち梶の葉）の一部らしい紋様が残る。9は、凝灰岩質安山岩製<sup>(4)</sup>の手水鉢である（図版9）。総高82.5cm。最大径推定71cm、水受部分は深さ24.0cm、最大径71.0cmである。40%程度欠損しているが、外面は、ノミ等による加工痕が確認でき、水受部分は、丁寧な表面仕上げがしてある。第18図1～6は、銭貨。1は雁首銭。2～4は、寛永通宝の古寛永である。5は、明治17年の半銭。拡張区の遺構面精査時の出土である。6は大正期の一銭硬貨である。

#### 第4項 小 結

今回の調査においては、部分的に田儀櫻井家本宅建物跡に関係すると考えられる遺構が検出されたものの、削平などの影響により、建物の基礎構造や平面規模を復元できるまでの資料を得ることはできなかった。しかしながら、1面のみではあるが、比較的安定した遺構面を確認することができた。遺構面は、19世紀の陶磁器や、明治17年の半銭がその直上から出土すること、表土直下の遺構面であることなどから、明治23年の田儀櫻井家廃業時直前までの遺構面と考えられる。時期的には17世紀の陶磁器が若干混じっており、同一遺構面において、さらに古い時期の建物の造り替えも考えられるが、2ヶ所のサブトレンチにおいては、その痕跡を確認することはできなかった。

平坦面の周囲をめぐる宮本川沿いの石垣は、岩盤上に直接石を積み上げて石垣としており、その上端は、今回発掘調査を実施した遺構面と高さがほぼ揃う。また、遺構面の下は、整地土のみで遺構面がみあたらなかったことを考えると、石垣と遺構面とは同時期に形成された可能性が十分に考えられる。

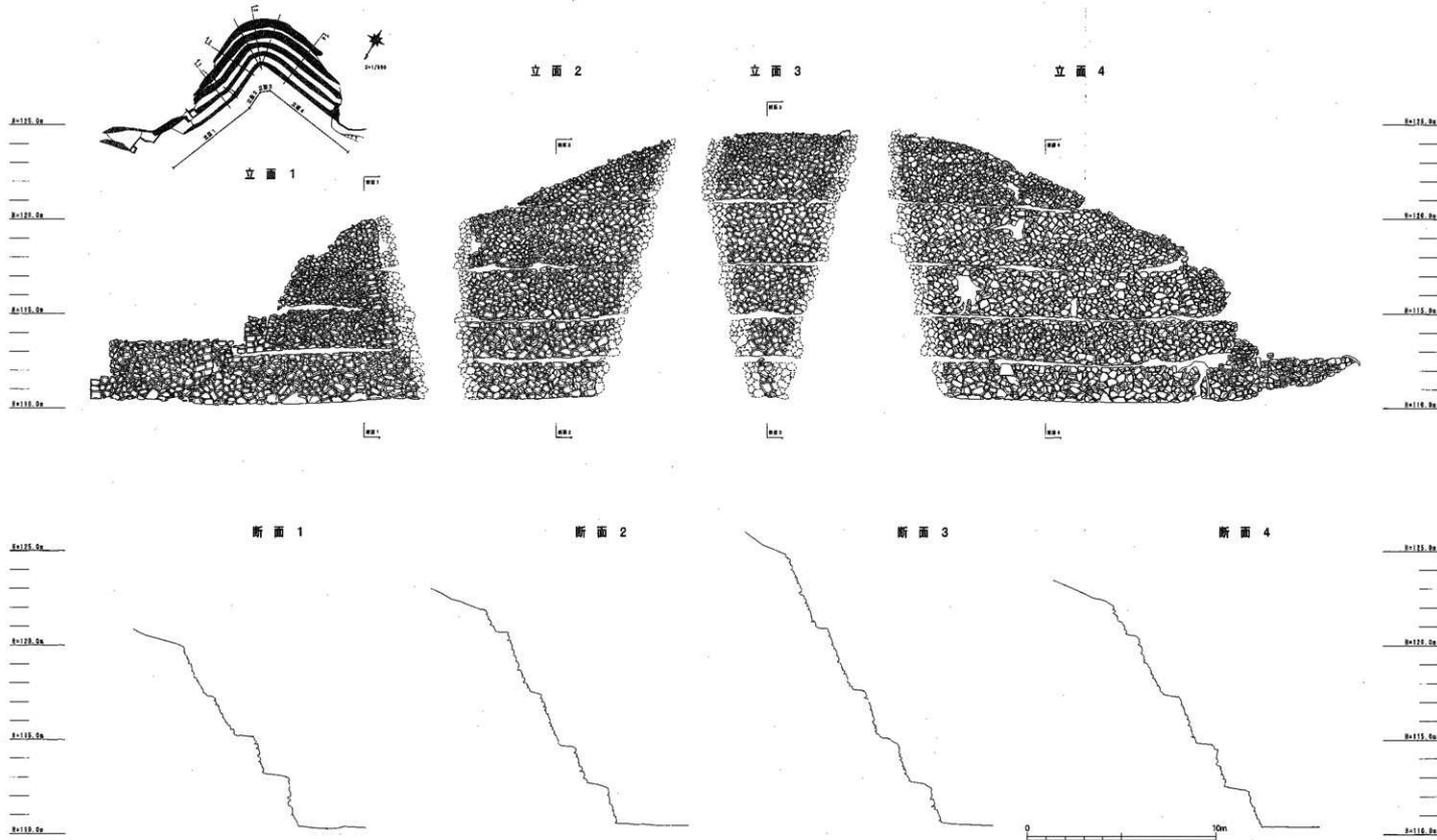
ちなみに、文献史料によれば、10代櫻井多四郎直教（天保9年・1838年没）の時代、文化9・10年（1812・1813年）ころには、仮小屋から家普請をして住居を構え「御用宿」を勤めるようになっていた<sup>(5)</sup>。可能性として、田儀櫻井家の全盛期とされる10代櫻井多四郎直教の時期、つまり19世紀前半に大規模な造成を行なったのではなからうか。

また12代櫻井勝之助直明（明治26年・1893年没）の時代、明治15年（1882）3月17日には、宮本大火によって櫻井本宅を始め山内70戸が全焼したとされるが<sup>(6)</sup>、今回の発掘調査区においては、明確な火災の痕跡はみられなかった。後の削平が深く入っていることも考えられるが、比較的残存状態の良いSX02においても火災の痕跡が認められない。火災の範囲がどの程度であったのか今後検討する必要がある。

#### 註

- (1) 渡辺勝治 「田儀櫻井家年代記」1996年
- (2) 長吉強司氏よりご教授いただいた。
- (3) 松尾充品氏よりご教授いただいた。
- (4) 中村唯史氏よりご教授いただいた。
- (5) 鳥谷智文「田儀櫻井家の沿革」『基礎調査報告書』
- (6) 注(5)に同じ。

立面分割图



第19图 田儀井家本宅跡背面 石垣実測图 (S=1/200)

## 第5章

掛樋・越堂・聖谷たたら跡の調査

## 第5章 掛樋・越堂・聖谷たたら跡の調査

### 第1節 掛樋たたら跡

#### 第1項 調査の目的

掛樋たたら跡は、昭和57年度（1982）に島根県が行った生産遺跡分布調査で発見された。東西にのびる平坦面が確認され、また鉄滓が採取されたことから製鉄遺跡と認定された。平成15、16年（2003、04）の「宮本櫻井家のたたら製鉄に関する調査委員会」の基礎調査では、やや孤立的な立地や平坦面が広くないこと、また鉄滓の散布量が少ないことから大鍛冶場的な遺跡と考えられた。その後の踏査により、長さ約54mにわたる石垣と多量の製錬滓が確認され、たたら製鉄遺跡である可能性が高くなった。先の『基礎調査報告書』において、宮本鍛冶山内遺跡周辺に分布する製鉄遺跡の性格把握の必要性が指摘され、該当する当遺跡についても内容確認調査が実施されることとなった。

#### 第2項 調査区の位置（第20図）

掛樋たたら跡は、出雲市多伎町奥田儀字掛樋に所在する。田儀櫻井家の本拠地である宮本地区より1.5km上流に位置する。立地する場所は宮本川の支流、屋敷川の右岸である。当該箇所は川沿いの狭長な段丘状平坦面、標高約180m、屋敷川床との比高は約10mである。東西は川沿いに約90m、南北幅は約10～20m、面積は1,065㎡である。現況は私有地で桑、栗の木や雑木、竹藪に覆われており、山深い印象を受けるが、日当たりは良好である。前面は山裾が水流に洗われてきた高い崖となっている。崖裾の川沿いには小径が走っている。小径と、屋敷川々床との高低差は1m強である。

遺跡のある平坦面は、中央あたりで南西に張り出している。張り出し部の緩斜面で鉄滓が集中して出土した。1m大の大型の鉄滓も散見され、排滓場であると確認した。鉄滓は約30～60cmの厚さで堆積している。またこの部分を除き、平坦面の周囲には整然とした石垣が築かれていた。石垣はほぼ水平に築かれている。最上端～最下端の標高は179.0～176.9mである。

昭和49～51年（1974～76）の砂防ダム工事の際、遺跡の北側山裾を走る現林道が整備された。その折に削り出された土砂が平坦面上に40～140cm堆積している。工事以前は上述の崖裾の小径が使われていたとのことである。そしてこの小径が枝分かれし、平坦面の東の端とつながっている。

トレンチの設定については、狭長な平坦面の中でも最も幅が広い箇所等に等高線と直交するように南北に1トレンチを設定した。そして等高線に平行に平坦面のほぼ中央部を東西に長く2トレンチを設定した。1トレンチは、近世製鉄炉（いわゆる高殿たたら）の検出を目的とし、幅1.5m、長さ約26.5m、2トレンチは製鉄に付随する施設の検出を目的とし、同じく幅1.5m、長さで約44mで設定した。調査面積は、後に拡張した箇所も含め合計で約110㎡であった。

#### 第3項 検出遺構・出土遺物（第21～24図、第10～12表、図版12～15・43）

##### 1. 遺構の層序

掛樋たたら跡の層序は基本的には、表土層—工事土砂—黒褐色土層—たたら遺構に関連する土層となっており、1トレンチ、2トレンチとも共通である。黒褐色土層とは、第21図の土層図の網掛け部分である。鉄分が沈着し固くしまった暗赤褐色～橙褐色粘質土層が水平に厚さ約10cm弱で広がり、それを床土にしてその上には有機質を多く含む黒褐色粘質土層が広がる。この黒褐色土層が現れる面

を第1遺構面とし、その下の被熱している第2遺構面をたたら遺構面と称することとする。

なお、2トレンチ東端部の南北土層では、石垣の裏込め土を切って耕作土が盛られ、農地が造成されたことが分かる。このことにより耕作は石垣構築後のことと確認できる。

## 2. 第1遺構面の調査 (第21図)

第1遺構面で、小穴を1トレンチで1個、2トレンチで4個検出した。小穴はいずれも小規模で浅い。柱穴とはいい難く、作業時の何らかの痕跡との見解にとどめたい。また1トレンチ中央部で黒褐色土層の床土中より集石が出土した。幅は約3mで、石の大きさが、人頭大より少し小さい位でそろっていることから人工的な作為が感じられる。石は全体的に黒っぽいが、これは熱を受けてのことではなく、マンガンのような物質が付着したものと思われる。2トレンチでは西端から幅約5mでやはり黒褐色土の床土中より集石が出土した。この集石は1トレンチから2トレンチへつながると推測され、平面検出のみで深さは不明であるが、雨落ち溝状を呈している。またこの集石より5mほど東側で70×50cm、厚みが30cmの直方体形の石が出土した。表面は同様に黒っぽく使用痕跡は不明。石質は流紋岩である。

1トレンチの土層をみると、たたら地下構造も確認できるが、その本床の北側の壁上部に約40cmの高さで石が東西に積まれている。この石積みは、石の大きさは不ぞろいのうえ、自然石をそのまま利用している感があり、前述した周囲に巡らされている石垣のように整然とは積まれていない。黒褐色土床土もこの部分で途切れている。以上のことから土留めのための石積みと考えられる。黒褐色土はその南側の約1m落ちたところで再度現れる。段々畑の耕作土の可能性が考えられる。また前述の平坦面周囲の石垣が、第21図の▼地点から、この第1遺構面の石積みにとってかわる。古い石垣を再利用して土留めの石積みを築いたのであろうと思われる。

## 3. たたら遺構面 (第2遺構面、第22・23図、図版12～15)

平坦面の南端の突出部で製鉄炉の地下構造を検出した。

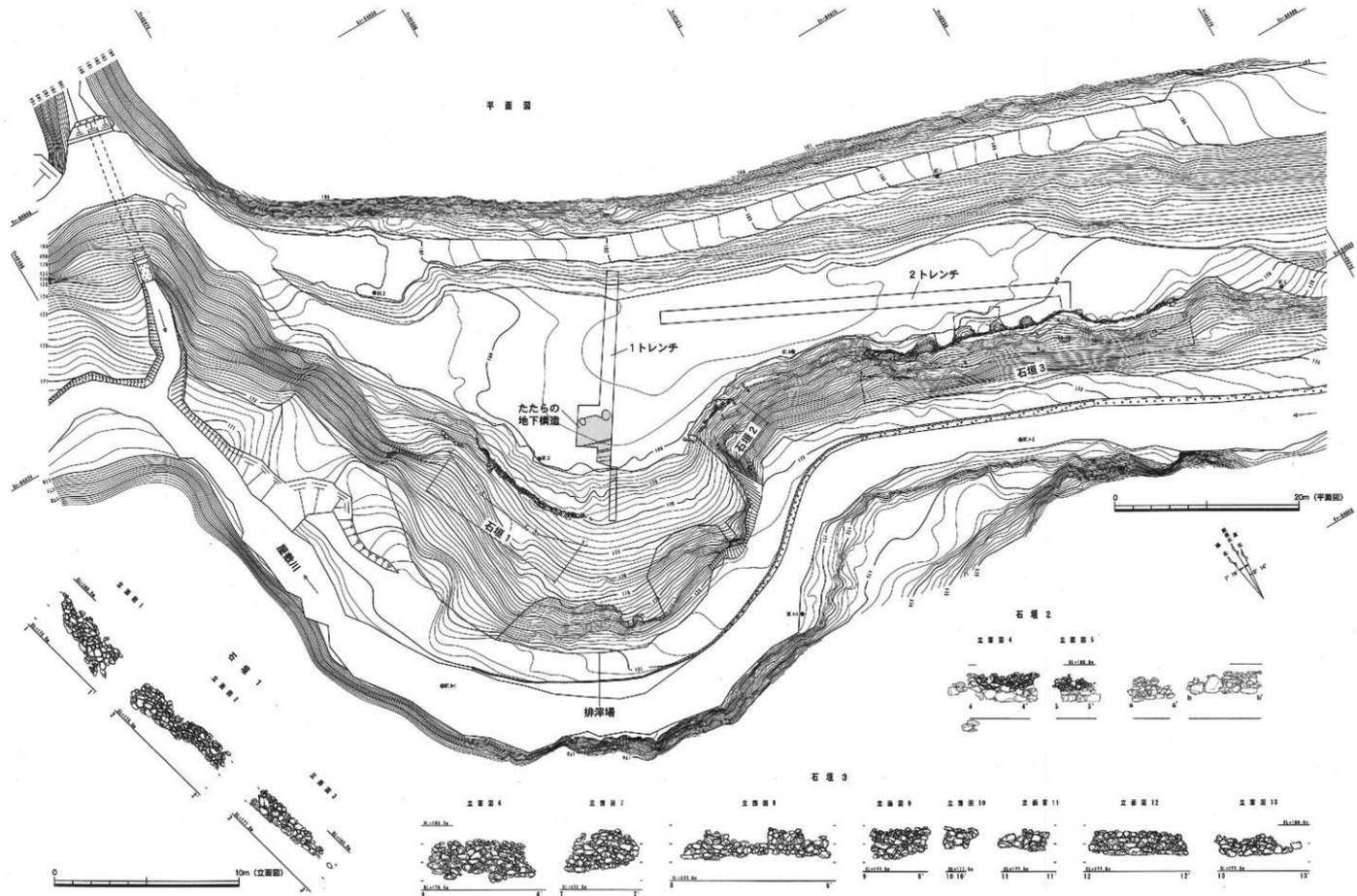
まず1トレンチの中央部より南側の第1遺構面にかかわる土をすべて除去し、1トレンチ中央部よりP9を検出した。このP9から南側に赤褐色粘質土面を確認した。この面は、P9から本床の北壁まで途切れることなく広がるため、たたら遺構面と考えられる。そしてP9は炉を覆っていた建物の北端にかかわる遺構と考えられる。一方、本床より南側は後世の攪乱により、たたら遺構面は乱れている。このため、P9から本床炉心までの距離である9.4mを反転復元した18.8m (約10間) が建物の南北方向の規模と考えられる。また、この作業面と西側の一段低い石垣の上端とは、レベルがほぼ同じである。

### 床釣り

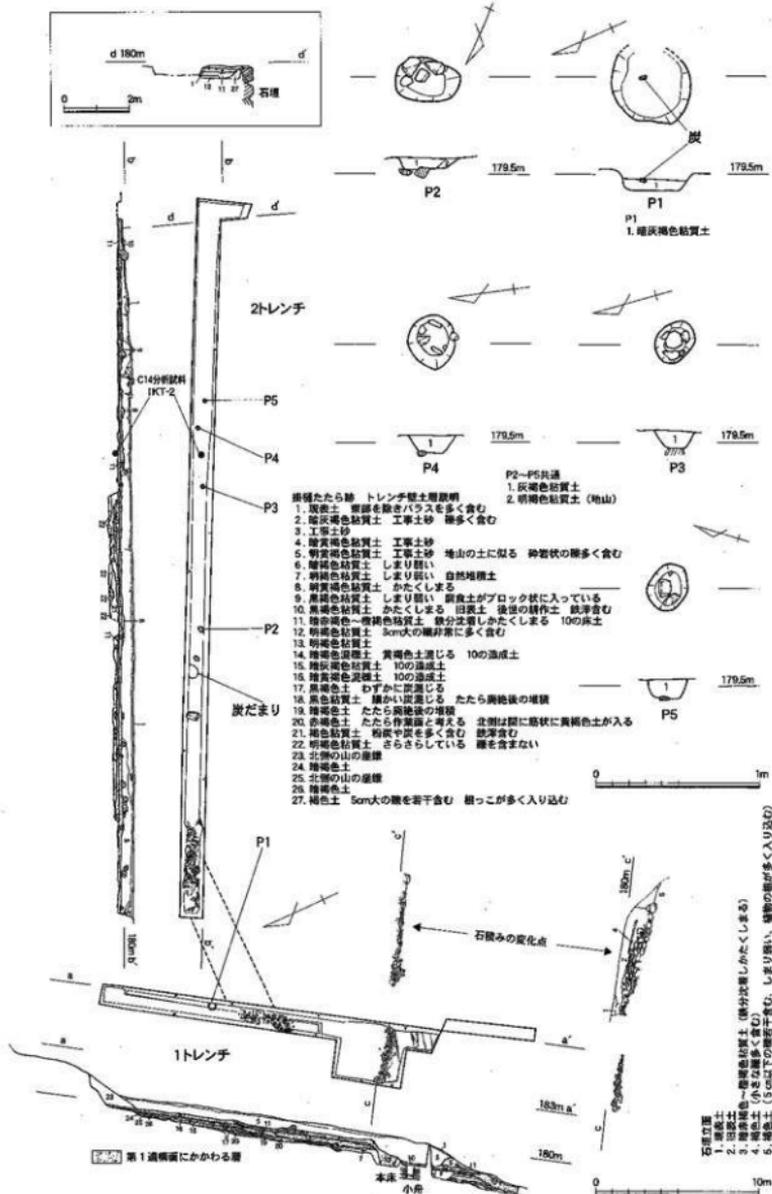
今回の調査において、床釣りの上部と本床・小舟を確認した。近世高殿たたら場合は、床釣りと呼ばれる防湿、保温のための大規模な地下構造が製鉄炉下部に設けられている。その中でも、本床・小舟・跡坪などの存在する上部と、排水施設・敷石 (坊主石)などを設ける下部に大きく分かれる。当遺跡での調査は遺構の保存を主眼にしたため、遺構の構造を明らかにできたのは、地下構造全体の一部である。

### 掘形 (第22図、図版12-2)

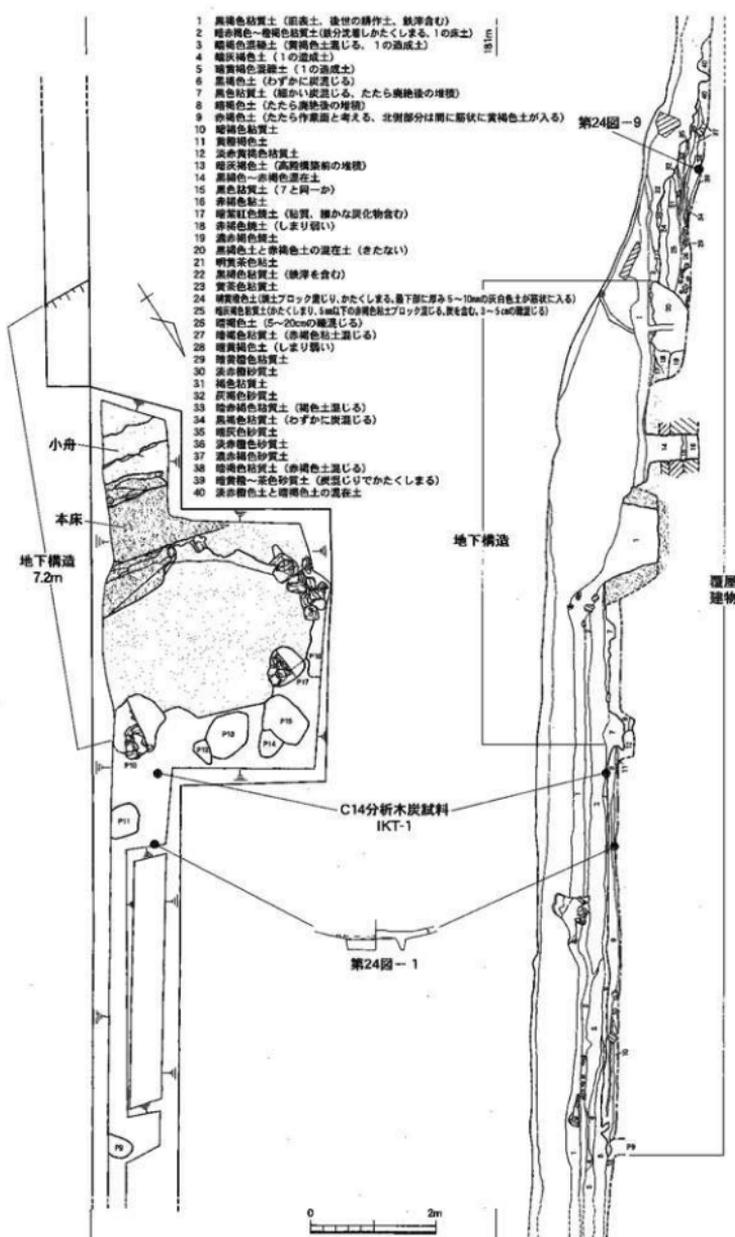
地下構造の掘形は長軸をほぼ東西方向にとる。短軸について、北側は炉心より3.2mの地点で被熱



第20図 掛桶たたら跡 地形図・調査区設定図・石塚実測図 (平面図 S=1/400・立面図 S=1/200)



第21図 掛桶たたら跡 第1遺構面実測図 (平面図S=1/300、石垣断面図S=1/150、小穴詳細図S=1/30)



- 1 黒褐色粘質土 (田舎土、遠世の耕作土、鉄滓を含む)
- 2 暗赤褐色～暗褐色粘質土 (部分で凝りかたくなる。1の底成土)
- 3 暗褐色凝結土 (黄褐色土混じる。1の底成土)
- 4 暗赤褐色土 (1の底成土)
- 5 暗赤褐色凝結土 (1の底成土)
- 6 黒褐色土 (わずかに炭混じる)
- 7 黒色粘質土 (細かい炭混じる。たたら焼後の堆積)
- 8 暗褐色土 (たたら焼後の堆積)
- 9 暗褐色土 (たたら作業面と考え、北側部分は間に腐状に黄褐色土が入る)
- 10 暗赤褐色土
- 11 黄褐色土
- 12 黄赤褐色粘質土
- 13 暗赤褐色土 (高炉煉鉄後の堆積)
- 14 黄褐色～赤褐色凝結土
- 15 黒色粘質土 (7と同一か)
- 16 赤褐色粘土
- 17 暗赤褐色粘土 (粘質、細かい炭化物を含む)
- 18 赤褐色土 (しまり弱い)
- 19 濃赤褐色粘土
- 20 赤褐色土と赤褐色土の混在土 (きたない)
- 21 暗赤褐色粘土
- 22 黒褐色粘土 (鉄滓を含む)
- 23 黄赤褐色粘土
- 24 暗赤褐色土 (凝りかたくなる。最下部に厚み5～10cmの灰白色土が腐状に入る)
- 25 暗赤褐色土 (かたくなり、5m以下の赤褐色土ブロック混じる。炭を含む。3～5cmの凝結土)
- 26 暗褐色土 (5～20cmの凝結土)
- 27 暗赤褐色粘土 (赤褐色土混じる)
- 28 暗赤褐色土 (しまり弱い)
- 29 暗赤褐色粘土
- 30 赤褐色粘土
- 31 暗赤褐色土
- 32 暗赤褐色粘土 (褐色土混じる)
- 33 暗赤褐色粘土 (褐色土混じる)
- 34 黒褐色粘質土 (わずかに炭混じる)
- 35 暗赤褐色粘土
- 36 濃赤褐色粘土
- 37 濃赤褐色粘土
- 38 暗赤褐色粘土 (赤褐色土混じる)
- 39 暗赤褐色～赤褐色粘土 (凝りかたくなる)
- 40 濃赤褐色土と暗褐色土の混在土

第22図 掛焼たたら跡 遺構実測図 (1) (S=1/80)

した淡赤黄褐色粘質土層を掘り込んでおり、南側は後世に削平されてはいるが、炉心より4mの地点で被熱してかたくしまった筋状の粘質土層を掘り込んでいる。規模は長軸が不明で短軸は7.2mである。また掘形内の埋土である焼土中には多くの鉄滓が含まれていた。

#### 小舟 (第22・23図、図版15)

幅 (内法)	53cm	長さ	不明
高さ (内法)	68cm		

南小舟のみ検出。検出時は、天井部が欠損していた。内面底部に赤褐色粘土、上部には黒褐色～赤褐色土が堆積しており、焼けた粘土塊も多く含まれていた。中にはアーチ型をした粘土塊も見られ、これは小舟の甲(天井部)と思われる。壊されたときに上部の土砂とともに落ち込んだのであろう。小舟側壁には、6～44cmと様々な大きさの石が2～4段(高さ58～64cm)積まれ、隙間には粘土が密に充填されていた。側壁の表面は溶融して厚い軸状となり、淡い緑色を呈していたことから、非常に高温で熱せられたことが分かる。石材は当遺跡周辺の流紋岩である。

また、北小舟は天井部まで掘り進んでいないが、西小口と推定される部分の上面は石と焼けた粘土で貼り固められていた。小舟小口を閉塞しているようであり、このことから北小舟の西小口は、焚き口であった可能性が高いといえる。

#### 本床 (第22・23図、図版13・14)

幅 (外法)	163cm	(内法)	93cm
高さ	86cm	長さ	3.6m (検出)

本床南側壁はほとんどが欠損しているが、北側壁は調査区内の西側が攪乱を受けつつも東側は上端まで遺存していた(図版14-3)。本床は、粘土で築かれ、暗灰色にかたく焼きしまっていた。

本床は平面的には2つの小舟の中間に位置し、船底状を呈し小口はすばまっているのが通有であるが、3.6m検出した限りでは南北壁はすばまらず、東西方向に平行であった。横断面は上端に向かってやや広がる逆台形を呈し、床面の幅は93cm、本床壁上端の幅は120cm(復元)である。床面は黒色で粉炭の痕跡が若干認められるが、内部は壊された炉壁片や赤褐色焼土が堆積していた。また床面の高さは、ほぼ水平で小舟内側面の石垣の上端と同じ高さである。

#### その他の遺構

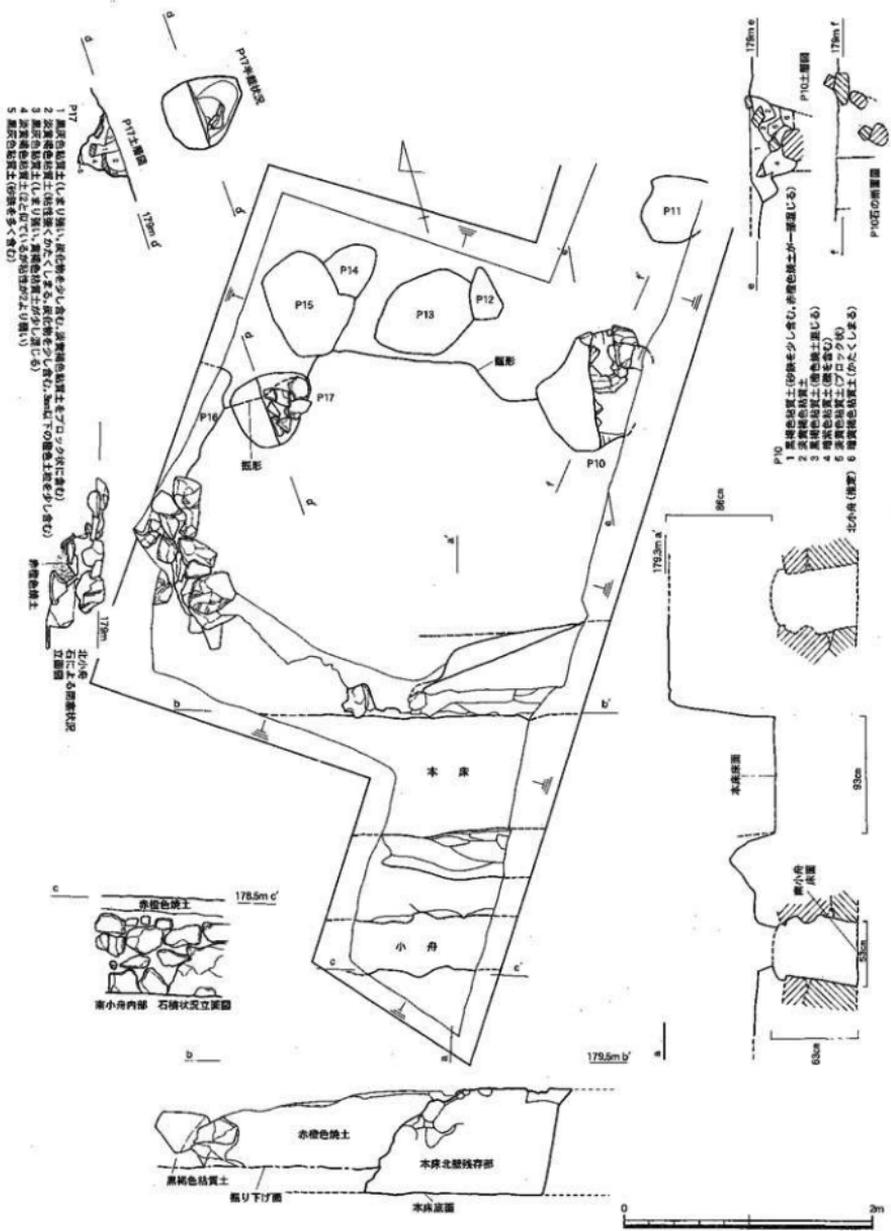
作業面の精査で掘形の周辺で7個のピットを検出した(P10～17、第22・23図)。その中で、押立柱穴の確認の目的で掘形に接しているP10とP17を半載した。

#### P10 (第23図、図版14-2)

平面形は隅丸長方形で、規模は東西約1m(復元)、南北0.7mである。およそ20cm大の石が径35cmほどの円筒を囲むように出土し、断面でみるとその石は徐々に本床方向へ傾斜しながら重なるように下方へ続いている。上面より30cmの深さで掘り止めているため類推であるが、防湿のための気抜穴の可能性が高い。気抜穴であるなら、地下構造の底面から構築されていると考えられる。

#### P17 (第23図)

平面形は隅丸三角形で、規模は東西、南北ともに約60cm。地下構造の掘形に接し、地下構造を掘り込んでいる。上面より約20cm下げたところから中央部は20cmの径で深さ15cmの2段掘りになっており、底部に砂鉄を多く含む黒灰色粘質土が堆積していた。押立柱としては浅く、杭状のものが打ち込まれていたと考えられる。



第23図 掛樋たたら跡 遺構実測図(2) (S=1/40)

#### 押立柱の存否

P10、P17のどちらのピットも地下構造の埴土（鉄滓を含んでいる）である赤褐色土を切っており、土層観察の結果からは、押立柱とは言い難い。残念ながら、この度の調査では押立柱穴を確認することはできなかった。

#### 4. 出土遺物（第22・24図、図版43）

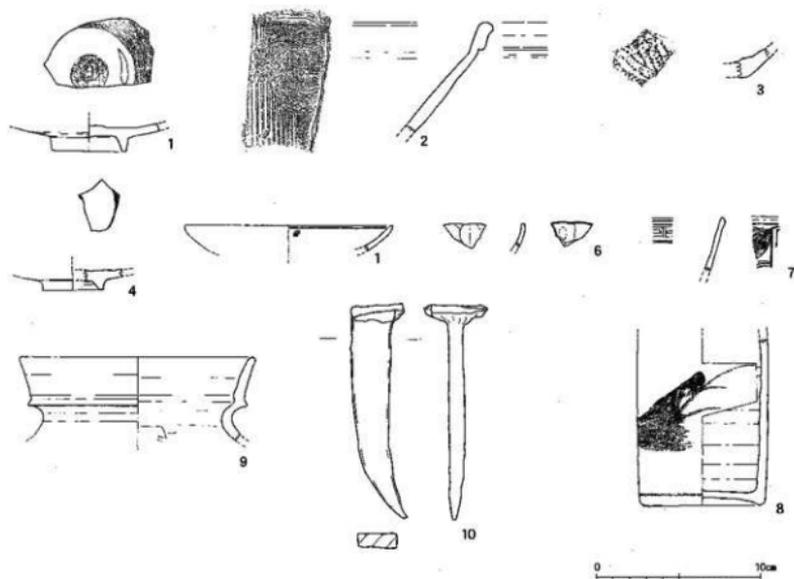
たたら遺構に伴う遺物は、第24図—1の陶磁器のみであった。地下構造の中より出土している（第22図、図版14）。これは、疊付のみを蛇の日軸剥ぎした波佐見産の青磁の皿であり、生産年代は1650～1680年である。2は鉄軸の播鉢の口縁である。石垣の基部より下の黒褐色粘質土層から出土した。この土層は鉄滓を多く含んでおり、石垣構築前のたたら排滓場と考えられる。年代は、17世紀初頭で口縁の形は唐津の形状を呈しているが、胎土は唐津ではないとの指摘を受けた。<sup>1)</sup>

3は第1遺構面直上より出土した播鉢の底部である。年代は19世紀。

4～7は表土より第1遺構面の間の攪乱を受けている土層より出土した。4は唐津焼の陶器の皿で見込みが蛇の目軸剥ぎされている。年代は17世紀中葉～18世紀前半である。5は肥前系の陶胎染付の皿で、年代は18世紀前半。6も肥前系で磁器の皿の破片である。口縁端部に紅が付され型打ち成形がなされており年代は18世紀後半から19世紀。7は肥前系磁器の端反りの皿で口縁部内側に雷文がある。年代は19世紀。

8は金屋子神社を探索中、掛桶たたら跡北側丘陵部より出土した徳利で白地にコバルト釉で染付された19世紀以降の磁器である。9は土師器の甕の口縁部で、古墳時代前期である。たたら構築時の造成土層より出土した。10はケントビと呼ばれ、木材運び出し時に使う鉄製の道具で工事土砂中から出土した。

出土遺物からは、以下のことが導き出される。遺構に伴って出土した1の皿から製鉄炉の構築年代は、17世紀後半以降と考えられる。また2の播鉢からたたら製鉄の操業年代の上限は、17世紀初頭と考えられる。



第24図 掛樋たたら跡 遺物実測図 (S=1/3)

第10表 掛樋たたら跡 陶磁器観察表

挿図番号	図版	出土地点	種別	器種	法量 (cm)		産地	時期	特徴	備考
					口径	器高				
第24図-1	43	本床・北側	5層	磁器	皿	-	4.6	肥前系	17世紀中-18世紀前半	流佐見、蛇の目輪剥ぎ
第24図-2	43	石垣西端	黒褐色粘質土	陶器	すり鉢	(30.4)	-	不明	17世紀初	スチヤキ、口縁の形は唐津、胎土は唐津ではない
第24図-3	43	南北トレンチ	2層上面	陶器	すり鉢	-	-	不明	19世紀	
第24図-4	43	第2トレンチ	1層	陶器	皿	-	(3.8)	唐津系	17世紀中-18世紀前半	蛇の目輪剥ぎ
第24図-5	43	南北トレンチ	1層	磁器	皿	(12.7)	-	肥前系	18世紀前半	陶胎未付
第24図-6	43	東西トレンチ	1層	磁器	皿	-	-	肥前系	18世紀後半-19世紀	口縁端部紅付
第24図-7	43	第1トレンチ南拡張区表採		陶器	碗	-	-	肥前系	19世紀	裏反り、口縁部内側書文
第24図-8	43	背面の山の上		磁器	徳利	-	7.0	不明	19世紀-20世紀	明治時代以降のコバルト

第11表 掛樋たたら跡 土器観察表

挿図番号	図版	出土地点	種別	器種	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	調整	備考
第24図-9	-	南北トレンチ南拡張区	土師器	甕	口径(14.3)	①1-3mmの砂粒含む ②やや良 ③淡黄褐色	内面：横ナデ、ケズリ 外面：横ナデ	

第12表 掛樋たたら跡 鉄製品観察表

挿図番号	図版	出土地点	種別	器種	法量 (cm)			重量 (g)	特徴	備考
					長さ	幅	厚さ			
第24図-10	43	第1トレンチ南部工事中	鉄製品	ケントビ	13.2	3.3	1.0	189.05		木を引っ掛ける道具

## 第4項 小 結

### 製鉄炉の年代

出土遺物により、たたら製鉄の年代は、およそ17世紀初頭より18世紀の年代が導き出される。特に、作業面の約10cm下部から出土し、唯一遺構に伴うと判断できた青磁の皿の生産年代が1650～1680年であることから、製鉄炉の年代は、17世紀後半以降と考えられる。

また地磁気年代、放射性炭素年代は次のとおりである（第6章第1・2節）。

地磁気年代 : 1745±15

放射性炭素年代 : 109±20 yrBP (IKT-1) 243±21 yrBP (IKT-2)

別に詳細に報告されているように、地磁気年代は、たたら製鉄の構築年代は18世紀中頃と出ている。一方、放射能炭素の試料IKT-1は、第22図第7層中より採取したが、この層はたたら廃絶後の堆積である。IKT-2は、第21図に示しているように、第1遺構面より下位ではあるが、性格不明の土層より採取している。また、放射能炭素年代は、およそ江戸時代前期後半ころ以降、現代までの放射性炭素年代値(0～300 yrBP)は区別できず、地磁気年代を否定するものではないとのことである。これらの年代値を考慮すると、掛樋たたら製鉄の構築年代は、18世紀初め～中ごろであったと考えられる。

### 地下構造

地下構造については、本床の床面は小舟石垣の上端とほぼ同じレベルで、小舟床面より66cm高い。本床と小舟の関係に着目しいくつか分類・検討がなされているが<sup>2)</sup>、竹広分類に従うと、掛樋たたら跡は、高床型本床約Ⅱ類に相当する。本床床面を小舟床面より30cm前後高くこしらえるものがⅠ類、40cm以上高くこしらえるものがⅡ類、本床床面と小舟床面が同じ高さのものが同床型本床約Ⅲ類である。同様の構造を持つ類例は、当遺跡より2km弱東方に立地する聖谷たたら跡<sup>3)</sup>、そして朝日たたら跡<sup>4)</sup>、梅ヶ谷尻たたら跡<sup>5)</sup>、檀原遺跡Ⅰ区1号炉<sup>6)</sup>などがあげられる。

### 石 垣

東側の平坦面を囲むように構築されている石垣(第20図石垣2・3)は、第1遺構面より古いことを確認した。1トレンチの土層によって、第1遺構面とたたら操業面の間には、他の遺構面は検出されていない。以上のことから東側の石垣はたたら操業時の石垣である可能性が高いといえる。石垣は排滓場にて一旦15mほど途切れ、西側の石垣(第20図石垣1)が始まる。西側の石垣の高さは東側より約70cm低く、たたら地下構造の本床北側壁の上端とほぼ同じである。そして円く弧を描き、約15mの長さを測る。西側石垣の性格については、覆屋建物との関係があるので、次で述べる。

### 覆屋建物

炉心から南方の作業面は削平されているが、北に向かった作業面の広がり方が9.4mであるので、南北に18.8mと大型の建物が反転復元できる。しかし、現地形では西側に石垣(炉心からの距離6.6m)があり、それだけ広い建物が建たない。西側石垣の土層の堆積状況を調査しなかったため、この石垣とたたら遺構との新旧関係が確認できないが、仮に同じ時期のものであったとすると、西側石垣が建物の西辺を区画する施設と考えられる。しかし、建物の中心に炉を据えるのが通有であるので炉心より南へ6.6mでは先に述べた作業面から考えられる建物の規模と大きく乖離し、今後検討したい課題である。

この度の調査はたたら地下構造の有無を確認することが目的の調査であったため、調査範囲が狭く得られた成果は限られる。建物の規模を初め、丸打ちか角打ちかなどの構造への言及は、残念ながらこれ以上は不可能と考える。

## 関連遺構

2トレンチでは製鉄に付随する施設遺構の検出を目指したが、第1遺構面の遺構保存を重視したため、その下にあるたたら遺構面の調査を十分できず、明確な遺構を検出できなかった。

## おわりに

中世たたら製鉄の傾向のひとつとして、たたら場を選定する際、丘陵の斜面を削って等高線に炉の長軸をあわせ、たたら炉床を設置する。一方、天秤ふいごが開発され高殿たたらに移行したのは17世紀末から18世紀前半とされている。<sup>7)</sup> 掛樋たたら跡は大規模な地下構造を持つ近世たたらであるが、年代から類推すると、高殿たたらの初期の段階に位置している可能性がある。しかし、平坦面の突出部に、等高線とほぼ平行に炉の長軸をあわせ炉を築くのは、鉄滓を捨てやすいからだろう。

## 註

- 1) 村上伸之氏のご教示による。
- 2) 竹広文明「たたら吹き製鉄の成立とその展開」(『たたら研究』第36・37号、たたら研究会、1996年)
- 3) 本書第5章第3節
- 4) 佐田町教育委員会『朝日炉』1983年
- 5) 佐田町教育委員会『梅ヶ谷尻たたら跡』1992年
- 6) 鳥根県教育委員会「権原遺跡・谷川遺跡・殿湖山気宅前炉跡」(『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書4』1997年)
- 7) 天秤ふいごの導入については、本書第7章第2節の相良英輔氏論文参照

## 第2節 越堂たたら跡

### 第1項 調査の目的

越堂たたら跡は周知の遺跡で、たたら跡やそれに付随する諸施設跡を含んでいる。越堂たたらを江戸時代から明治時代初期にかけて田儀櫻井家が経営していたことは、明治初期の絵図<sup>1)</sup>に当該地域が田儀櫻井家の所有と明記されている(本書第7章第3節第3項参照)ことや、隣接する東側丘陵部の墓地の一角に座す、田儀櫻井家6代とみられる銘が刻まれた地蔵が確認されたことから明らかである。また一方で臨海部に立地する当たたらは、流通の面で、他の山間部のたたらとは対照的に、原材料(砂鉄・木炭)の調達から製品(割鉄・銃)の搬出に至るまで海運が重要な役割を担ったという特色を持ったたたらであり、現代の臨海製鉄所を彷彿とさせる(第7章第3節第2項参照)。

このように越堂たたら跡は、田儀櫻井家たたら製鉄遺跡の中でも特異な性格を持ち、田儀櫻井家の経営形態を検討する上で非常に重要な遺跡のひとつである。現在は工場や個人の住居が並ぶ宅地となっているが、平成17年(2005)、発掘調査の機会に恵まれた。これによって、たたらの有無やその構造をはじめ、『田儀村誌』<sup>2)</sup>に掲載されている越堂鈿の配置図<sup>3)</sup>との整合性の確認などを主眼に置いた内容確認調査を実施することとなった。

### 第2項 調査区の位置

越堂たたら跡は、出雲市多伎町口田儀字越堂に所在する。田儀川の河口から約1km遡った右岸の平坦部にある。当該箇所は田儀川が大きくU字状に蛇行しており、『田儀村誌』によれば、このU字の内側に鉄生産とそれに関連する諸施設が配置されていた。現在は、この区域の中ほどを国道9号が走り、遺跡を分断する形となっている。

『田儀村誌』の越堂鈿の配置図と現在の地形<sup>4)</sup>を照らし合わせると、以下のものに、両者の一致をみることができる(第25図)。

- ・南東部の川岸の低い丘＝権現山
- ・その南裾の崖に岩を削って作られた水路
- ・高殿建物を囲む石垣

権現山については本書第2章第2節の平安時代の項(6頁)に記述があるが、現在の権現山は県道によって、ほぼ中央より南半分がなくなり、また北部は戦時中に防空壕として利用されたため削られている。このため越堂鈿の配置図に記された神武社も、金屋子神社も消失している。

水路は、西は国道9号越堂橋によって途切れ、東は途中、コンクリートなどで補修されており、当時の状況が残っているのは、約35メートル分である(第25図の黒色網掛け部)。

石垣については、地元の古老に聞き取り調査をした記録が残っており、それによると、高殿の周囲の石垣は当時のものとのことである<sup>5)</sup>。現在は東側に南北19.1m残り、北側は国道9号によって改変されているが、東西9.9m残っている。石垣の高さは90～170cmで最も高いところは石を4段積んでいる。また、上端は標高11mにそろえられており、この度検出した地下構造の本床側壁の上面とほぼ同じ高さである。

越堂鈿の配置図の高殿の右側に2棟並ぶ炭小屋の場所は、現在は駐車場になっており、礎石の並びが残っている。しかし昭和期にも住宅が建っていたとのことであり<sup>6)</sup>、炭小屋の礎石かどうかは不明である。

調査対象地は、個人の住宅地の庭部分として活用されており、ツバキ、キンモクセイ、スイセン、



ヒヤシンスなど多くの植物が栽培されていた。植物はできうる限り移植し、可能な限り広く調査した。調査区は、西側を走る国道9号と平行して南北に長く、約14m。幅は2.5~5.5mで調査面積は54.2m<sup>2</sup>である。

### 第3項 検出遺構・出土遺物

#### 1. 遺跡の層序 (第27図)

越堂たたら跡の層序は基本的には、庭土—昭和30年代の宅地造成土<sup>7)</sup>—たたら遺構に関する土層である。庭土、セメント張りを除去すると、宅地を区画するセメントの溝や縁石、そして礎石を持つ柱穴が並ぶ。これらはその直下にあるたたら遺構面 (= 焼土面や粉炭面) を一部壊している。また南部には一部権現山の山土 (第27図第8層) が混じる。

#### 2. 検出遺構 (第26~29図、図版16~20)

調査区北半部で製鉄炉の地下構造を検出した。

#### 床釣り

今回の調査において、床釣りの上部の基本的な構造物である本床と小舟を確認した。近世たたらの場合、床釣りと呼ばれる防湿、保温のための大規模な地下構造が製鉄炉下部に設けられている。その中でも、本床・小舟・踏坪などの存在する上部と、排水施設・敷石 (坊主石)などを設ける下部に大きく分かれる。当遺跡での調査は遺構の保存を主眼にしているため、遺構の構造を明らかにできたのは、地下構造全体の一部である。

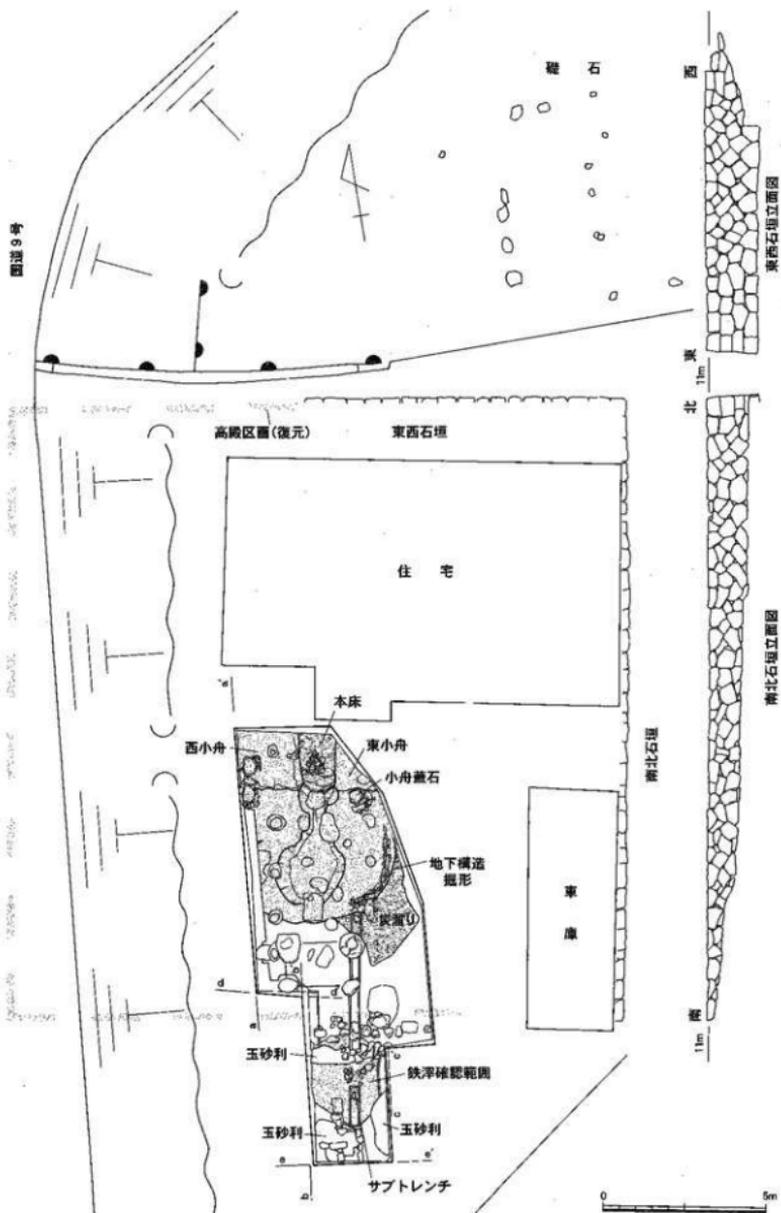
#### 掘形 (第28・29図、図版18)

地下構造の掘形は長軸をほぼ南北方向にとって設けられている。掘形は南端部で半径約2.6mの整った半円形をしている。断面を見ると、南東部に広がる粉炭の層 (第28図 粉炭 a~c) を3回にわたって切っており、地下構造を何度も掘り返していることが分かる。また、最下部の粉炭層 (第28図 粉炭 a) は初期の掘形に沿って堆積しており、この状況からこの粉炭は床焼などの乾燥作業の際に出た炭を掻きだしたものではないかと考えられる。掘形周囲には、石積みを巡らしており、高さは約56cmであった。掘形の規模は不明であるが、調査区南側は全範囲が掘形内であり、長軸の長さは反転復元すると約13mとなる。また、掘形内の埋土である焼土中には多くの鉄滓も含まれていた。

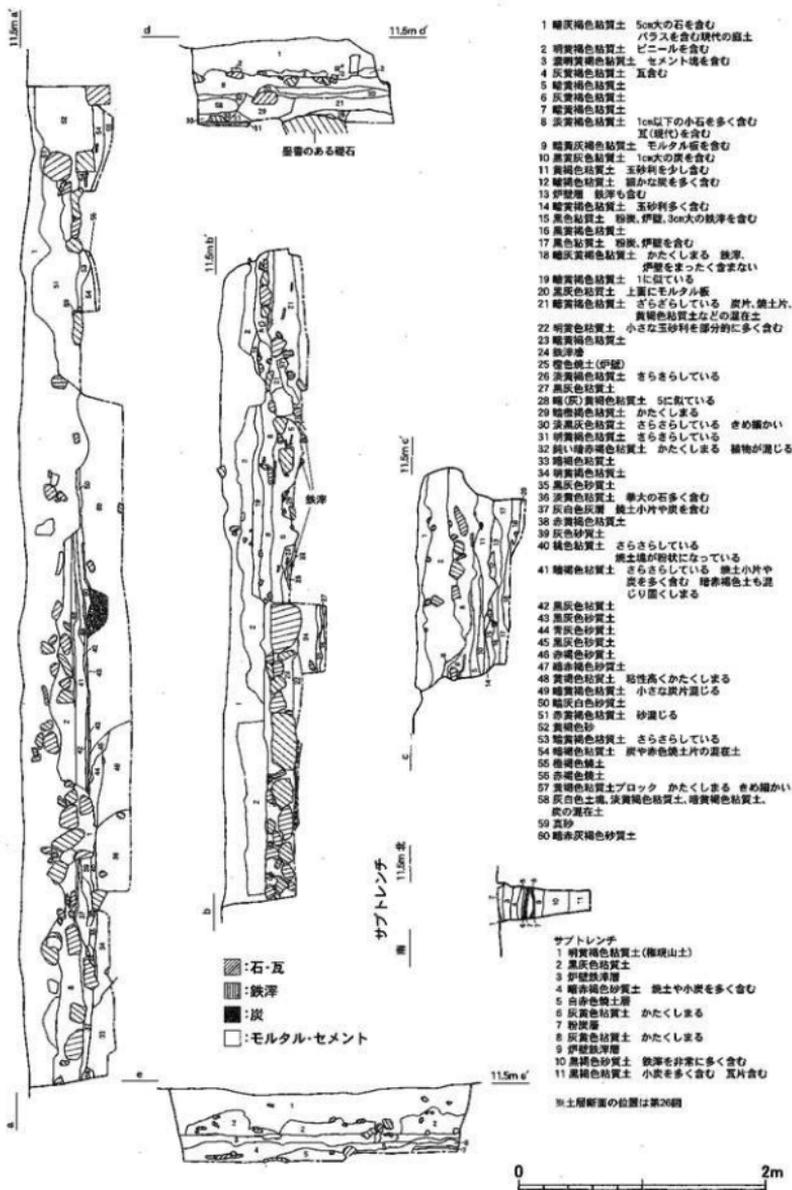
#### 小舟 (第28図、図版18)

幅 (内法)	72cm	長さ	5.1m (復元)
高さ (内法)	42cm以上 <sup>8)</sup>		

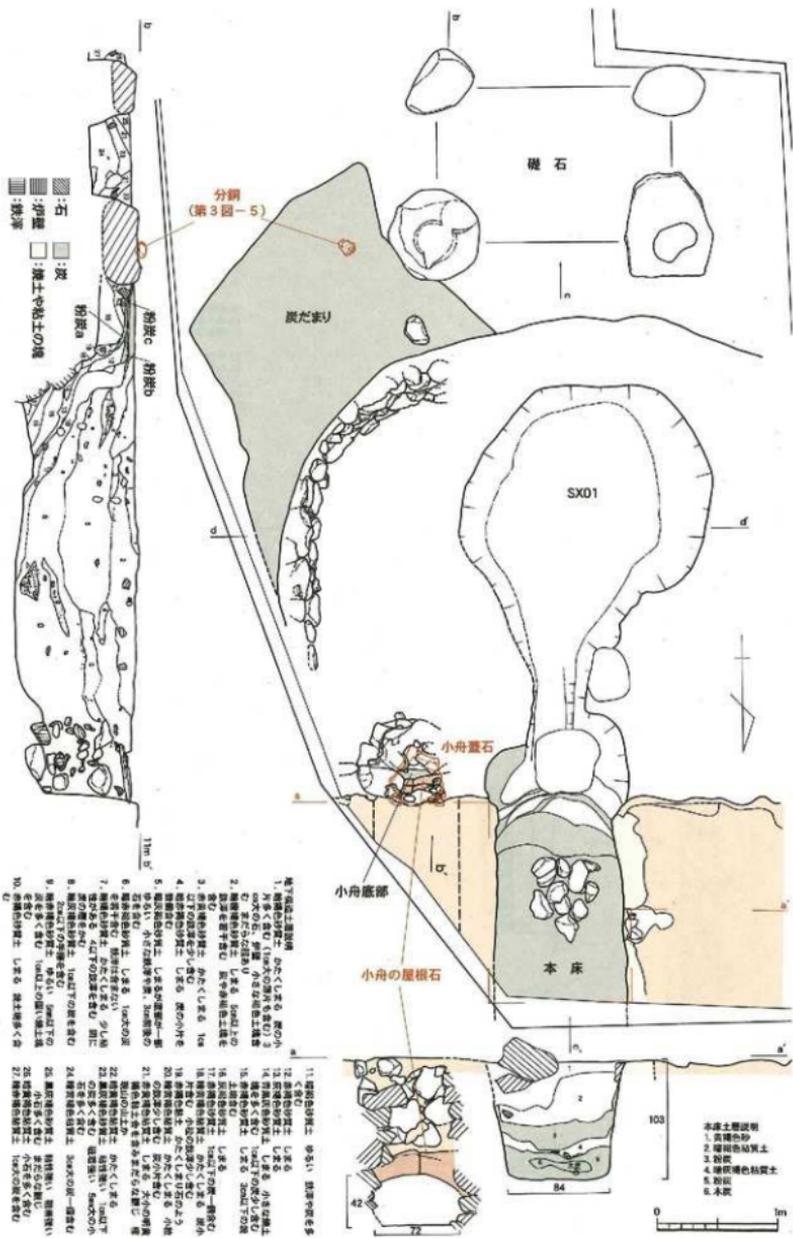
東小舟の煙出し口の蓋石とそれに続く焼粘土面を検出した。赤く焼けかたくしまった粘土は小舟の上部に掛けられた甲で厚みは約80cmである。蓋石は45×45cmの五角形で、厚みは約6cmである。外側 (南側) に向かってやや下方に傾斜しており、直径35cmの煙出し上部部を蓋している。蓋をはずし内部の観察を行った。煙道内部は40cm前後の大型の石を粘土でつなぎ、円筒形に成形している。口の広さは、上面端部になるほど狭くなり、小舟甲部分では直径45cmであるのに対し、先述したように上端部の煙道の直径は35cmである。小舟天井部は厚み15cm程度の2個の石でアーチ形に成形され中央で抱き合わせられている。小舟内部の側壁には、20cm前後の大きさの石が積み、隙間には粘土が密に充填されていた。それらの石の表面は溶融して淡い緑色を呈していた。小舟内は空洞であるが、床に赤く焼けた粘土や土が堆積していた。粉炭や薪の燃え滓などは見当たらなかった。



第26図 越堂たたら跡 調査区設定図・遺構配置図 (S=1/150)



第27図 越堂たたら跡 調査区土層図 (S=1/40)



第28図 越堂たたら跡 遺構実測図(1) (S=1/40)